

皆虚談は各君ごぞんじ、不學を譏は偏痴氣論、他の  
非を舉様なれど、名所圖會は地理書ですら、彼國王  
瀨の壺蘆巖、攝津志を錯讀て、つぼあしいはと傍假  
字注し、此類是のみならず、況是は草造紙、唯面白く  
速くかけ、加介呂奔馳る大動と酉の冬、戌へ跨る十  
二月の下旬、意見ついでに急がされ、面白くは作れ  
ねど、又十四編一帙、五日許に稿を脱しぬ、邯鄲とは  
云ふもの、京の夢大坂の夢を見るやうなる物語  
になむ、

壬子開春刊行

笠亭仙果記

邯鄲諸國物語

笠亭仙果

攝津の卷二編

幻之助は思はざる。過失故にをめぐと。知らぬ女に引連れられ。曾根崎の寢覺屋の。二階座敷へ誘はれ。頭を搔き手を摩りて。詫ぶる此方へ中居ども。はらへ來り茶を運び。煙草盆をだ明かるきに。燭臺を押し据えければ。彼の女は耳に口。中居共は打領き。もしおゆるりと、挨拶し。階子どんく下りて行く。彼の女は顔を響め。今しがたも云はしやんした。良い疵薬があるとやら。先づ其れを些計り。其んなら着けて下さるか。忝むけない。輕傷ならば五寸六寸切つたのでも。縫はずに癒る。おぢが薬師の靈驗にて。自ら製する奇たいの薬と。印籠外して中のおう。油薬を笄に。すくひ取れば憚りながら。巻きし手紙そつと取り。差出す足の疵口に。紙に伸べて打ち着すれば。手拭巻きつゝ初めて莞爾。もう痛みが去つたやうな。固より故意とは成れぬ御鹿忽。これしきの疵を受け。女のざいに六ヶしう。云ふて其處まで御同伴したを。無や女で居ながら。無黨ものとあさげすみ。お腹が立つたで御座んせう。何をいふ



のも身共の龜忽。如何様に成されたとして。立腹致す筈はなし。此儘宥恕して下さらば。身に取つて大慶至極。如何様にせられたとして。腹立つては下さんせぬか。其んならかうと身を擦り寄せ。じつとめればちやつと飛びのき。「坐興か知らず是れは不法。差し掛る要用もあれば。更めて今日の詫に。近日重ねて参るで御座らう。「何の近日そりや嘘々。其う厭がつて居る癖に。其處の何處の何方やら。知らねど御顔は今日で二度目。後と月の廿五日。難波橋の堤をば。旅ごしらへで三人連れ。長い後家様と今一人は。兩掛昇いで大方お伴。煙草を飲んで御出の所。彼の時私は屋根船で。客に連れられ天満の歸り。「さう聞けば思ひ出した。外にも二人か三人の。中に目に立つ數寄屋縮。須摩の關屋の大模様。千鳥が袖まで立ち上がり。「左様で御座んす。」「とても美しい女中や。と「え、悪くらしい其様に。愚弄ては私はいや。ありやうは此様な。勤めの身で珍らしさうに。ぬしのお顔をふつと見て。何う云ふとやら懐しう。身にしみく」と戀風が。まア此様なと白ばけに。云ふは勤めの女故。藝妓や娼妓といふものは。其うしてなりと客を引くかど。興が覺めたで御座んせうが。私は新地の北濱屋の。幾代とて名もなき藝妓。御氣にも入るまいがお顔にも。かゝるで有らうが悪いものに。心底から見初められ。又龜忽でも飛んだと。爲たのも遁れぬ悪縁と。思ふて些た一ト夜なりとも。私を呼んでは下さんせぬか。御祭禮の狂言を。斷つたのも之れ程の。疵にはさのみ困らねど。焦れくた船での初戀。斯ん

な商賣して居るもの程。眞の戀路は疎いもの。實々人に惚ると云ふは。斯んなものかど氣で氣が分らず。夜も晝も良い男。饜まで見ても野路の梅。すいたらしいの好かぬのと。口は出次第心には。今迄知らぬ癖の種。時き初めたのがぬしの不運。出掛に人に強ひられた。酒の元氣で耻しさ。押して先刻から疾まれ口。引張つて來た此の寢覺屋は丁度した揚屋で内方は。大中小の兄弟分。先刻に小女へ耳こすり。私は朝まで仕舞ふた躰。厭でも此儘歸しはせぬト。べつたり云はれて呆れ果て。「某は田舎漢。耻しながら此様な。場所は一度も履んでは見ず。何云はれてもどきく」と。夢の様で分らねど。嘘にも身共を悪からず。思ふて下さる志。一世の思ひ出此の上なし。さりなから口外へ。出し難き願望あつて。「而かも今宵は差しかゝる。心急ぎの急用事。其故にこそつか」と。人中歩いて彼の龜忽。何卒今宵は此儘に。歸してはお呉りやるまいか。旅浪人の薄資ながら。物の入費を吝むに非らず。只今も云ふ通り。近きに必ず來るべし。其れまで此金預けて置く。好いように計らい下され。餘り些少に御座れどもト。打替の金抜き出し。幾程か知らず紙に包み。差置きて立ち上るを。幾代は周章抱きとめ。「道理を分けて云はしやんす。やうなが矢張通辭。左様ならばとお金をば。預かつて何にせう。何程小かい鯛川。流れの末の私等でも。金が欲しさに戀はせぬ。「其れは癖みぢや大切の。金預くるが違がへぬ證據。「いゑく矢張いやなのぢや。幾程あるかは知らねども。棄てぬしには厄ばらひ、之



れ限りにさしやんしたとて。尋ねて行かう的もなく。何處の殿誰と名告らんしても。嘘か真か  
待みにやならず。「其んならば又何うすれば。其許は承引する。「何うと云ふたら兎も角も。今宵  
は此處に留らんして。私が云ふと篤と聞き。御逗留の中なりと。客が否なら情夫になり。情夫  
が厭やなら客になり。「否最う今日は思ひ寄らぬ。心づかひや何や斯や。元來より大事を抱へし  
身の上。女に戯れ居るやうな。悠長らしい間は御座らぬ。「もうし其れは餘りな。胴慾で御座ん  
する。其御氣強さを見ては猶。些も思ひ断れません。何うでも厭なら存命で。詮なき憂き身のう  
き勤め。いつそ殺して行かしやんせ。それも成らずば私がど。差添取り上げすらりと抜き。南無阿  
彌陀佛と咽喉に擬つれば。「ゑゝ危いと利うで取り。「實に其程思ひ詰めて。居らるゝのを否むも  
無法。なれど身共も重なる心痛。斯うして居る間も不孝の不孝。さりどて人を我故に。見殺し  
にせられもせず。迎も武運に盡きたる身の上。此處や彼處の言譯に。我こそ腹をかつさばき。  
死ぬこそよけれど刀を取れば。幾代は狼狽て止めもせず。「私もぬしが死なしやんすれば。同時  
に死ぬと指添を。復取上る後ろの障子。さらりと開けて駈け出る女。二人の間にずつと入り。  
「幾代さん此りや何事。貴殿も何處の御方か知らず。滅多に死んで下されては。やど重罪で困  
ります。私は此處の花車。お秋と申してございもの。無寐ながらお腰のものは。斯う成され  
てと袖ぐるみ。両手を掛けて押し取れば。「姉さんぬしのお氣強さ。耻しながらお前へには。豫

々打明け話した戀人。折角廻り逢ふ程の。縁は有つても嫌がられ。「いやさ全く厭がるの杯と  
申す譯ではなけれど。「なけれどなれば何卒今宵は。彼れ程思ひ詰めてなれば。なアまうし旦那様  
ど。お秋も共々勸むるに。幻之助も心弱はり。吐息を數々次ぎの間より。「幾代さんく。  
「小ちよか。「ハイちよいと耳をと障子を細め。「宜いよこちへと呼び入れて。小聲に告ればなげ  
首し。「姉さんまア聞いてもお呉れ。先刻から安立町の松さんが大呼で。内方から矢の使。一寸  
一度顔出して。呉れずば内でも迷惑と。女房さんの特別の頼み。斯ういふお方が出来る上は。愈  
々勤めを大切に。せねば立派に口もきかれず。「行つて呉るのに時間は要らぬと。ぬしの心が定  
まらぬば。一寸も動かれず。「實あやにくで私さへ當惑。「どう成るものか行しやんせ。ぬしは確  
りあづかつた。其んならば一寸の間。あゝ苦界ではあるわいなと。云ひつゝ手早に指添の。鯉  
口寛ろげ小指をすつぱり。懷紙と共に差出し。「暫らくの間名代に。して置いて下さんせ。血止  
には最一度。印籠貸して彼の藥。私もぬしに離ぬ心。もつて幾代はいたさうな。顔もせずして  
つツと立ち。「其んなら姉さんぬしをば屹と。預けて置くよと襦引上げ。小松を伴ひ下りて行く。  
幻之助は幾代が舉動。唯恐ろしき様に覺え。今又指を切り棄てし。いたき顔せぬ豪氣の振舞。  
毛の穴ぞつと恐毛立ち。物をも言はず居たりしが。背より水を注ぐが如く。五躰俄に振へて止  
らず。お秋は顔を差覗き。後ろに置きし酒肴。取り出して侷めつゝ。「何うやら俄かに色が悪



るく。夜さむで冷えて来た故か。上へ一寸引つ掛ける。お半纏でも上げませう。「何其様にも御座らねど。思へば〜彼女。思ひきつた事をして。何ともはやト歎きつ。愈々寒むげにがち〜顛へ。「幾代さんのお客の羽織。取つて置いたを彼のなりで。預かつて箆笥に有つた。御定紋でもありません。御印籠のと一つ四つめ。之れも亦一つの縁。氣味悪くとも召しませど。取り寄せて打ち着すれば。幻之助と見かう見るに。怪むべし鉄色の。鹽瀬に四つめの五ツ紋。裏の純子も我帯の。同じ地あひの笹鶴うつし。紛れもあらぬ父の羽織。兩掛に入れ置きて。悉洞九郎に奪られし品。されは仇は幾代に逢ひ馴れ。今も通ふか通はぬか。探らば何の道仇の手掛り。之れは滅多に歸られぬ。あら嬉しやと思ふにつけても。彌々身内ひき締り。坐にも得堪へぬ寒病ひ。瘡か感冒かとお秋も驚き「お病氣が尋常ではない。最前から彼方の坐敷に。お床も伸つて御座ります。彼の妓の来るまでお寐み成されて。其れから酒と致しませう。いや之れは大變ぢや。お瘡らしう御座りますト。手を引寐床に誘ひ入れ。夜衣に布團に幾個も重ねて。撫でて擦りてお秋の介抱。一刻餘り苦む程に。熱氣起りて燬くが如し。夜半の頃幾代は歸り。憂ひ哀み傍を離れず。醫師を呼び藥を與へ。心を盡して看病するに。曉方には熱氣治り。夢の覺たる如くに治りぬ。こは虚病みなりければ。二人は少し心落ち居つ。幻之助は昨夕に引替へ。此處に足をば止べしと。思へば態と枕も擡げす。今朝も心地のすぐれずとて。物侷むれども箆も

取らねど。お秋が強ひて勸むる儘に。少許はしたゝめつ。折節一代が抱へ来る。袱包を傍に置かせ。幾代は結び目引解ば。本八丈のがくつき二ツ。上衣は質素な縞縮緬。ごり〜したるを裙綿に。細くふかせし花色りうもん。唐花と紋の羽二重に。之れも四ツ目の三所紋。「染地に宜いのは御座んせねば。羽織は猶更ほんの間に合ひ。まア不斷着は此様な。物で辛抱をしやしやんせト。云ひつゝしつけを抜くを見て。「早い手廻感心ぢや。「大丸へ矢の使。其れでも廻りの若衆が。私を最負にして呉れる。其の故僅か三時か四時に。仕立たればぞんざいで。身幅がうまく合へば宜いがと。云ふ顔凝視て幻之助。「此小袖は身共の料に。拵へて下さつたか。何うも〜呆れかへつて。「何んのいなア其ればかり。御不自由はあんまいが。旅先きと云ひ差當り。持たせて御出も無い故に。いきずきた事をして。印籠をば紋本に。爲たも私が悪いが知らず。藝妓風性の心中は。此んなもの堪忍さんせ。而して過日の年輩の。お女中やお伴さんは。旅籠屋にでも居やしやんすか。「女は即ち我輩の母人。些故あつて當分は。分れねば成らぬ義理。供の者も母に附け。残し置きて有馬から。来て長町に唯一ト夜。肝狐にでも魅されたか。夢ではないかの心持ち。此んな宜い目に逢ふと云ふは。何う考へても合點が行かぬ。膏血城とか云ふ所へ。迷ひ入つて馳走にあひ。遂には生血を搾られしと。昔話の小耳に残。怪しき醫者に身の膏。取られしなんと云ふ類例。此處も其んなとにせよ。折悪い瘡の病。介抱のみか種々の



心配。御身の實意に絆されて。身共が素性名告り申さん。を、某は三河の國。吉良殿の御家中に。彼の苗字は佐々木にて現次郎とて今では浪人。故あつて人に隠れ。幼なき時に分れし兄の。行衛を尋ねに出たるもの。少し心に屈托のと。差掛りて昨日はさんく。深切に背きし言ひ分。腹を立ずに衣類まで。調へて下さる。眞實に甘へていふやうなれど。此邊は諸國の者の。寄り集ふ繁華の土地。若しや兄きに會ふ間敷。ものにもあらずと着られし。羽織の紋の等しにき。思ひよつて心に頼母し。二疊敷でも雨露を。凌ぐまでの空き家あらば。借り受けては下さるまじや。さらば病ひも心をかず。養生なして何かの様子。聞き度もあり二人にも。澤山禮が云ひたさに。其れがほんで御座んすか。お秋さん。幾代さん嬉しいか。嬉しう無うて何とせう。老松さんの後あはせ。去月まで中の島の。何とか屋の隠居さんが。居たのが奇麗でちんまりと。お一人お置申すには。ちやうど宜い。世帯道具も。疊も建具も其儘で。つひ世話もなし。私がおし送りするからは。鍋釜やお籠は。不用ものぢやが彼も飾り。其れは好い所があつて。最早家の出来たも同然。身共が瘡は一年に。是非一度は患へど。四ツ五ツでおちるが定り。癒くなつたら何れ程でも。恩返しは屹と致さう。ふつゝかな田舎もの。幫間にはなられまいが。兄きを尋ぬる其爲めに。些揚屋とか茶屋とかの。客を他から覗ひたし。難波津は淨瑠璃の。流行所で上手計と。聞き及んだが下手も亦。笑ひぐさに成りませう。武士達等遊藝が。好で一ト頃

替古して。阿彌陀の峯わり十二段。登り屋島下り屋島。聞いて呉れる人がありて。籠越で語る様な。譯にならば又一入。其れは何うとも成りませう。淨瑠璃は私しは大好。お病氣が快くなつたら。第一番に聞かねば成らず。なア幾代さん。昨夜とは打つて替つた幻様は。お氣輕で可笑いお方。一度も枕は取らねども。千年も馴染だ様で。頼と女房の心持。氣がせいゝとしたわいな。淨瑠璃語りが老松の。社の傍に其名も竹本。白太夫と標札でも掲げませう。老爺さんらしいや。其の淨瑠璃で思ひ出した。今宵も確まだ狂言が。さいいなア祭の後騒ぎ。昨夜出ぬので今宵は何うぞ。一段遣つて見たいもの。日頃の願望も叶ふたれば。此勢でしやりんに成つて。喫驚させてやりやんせう。頼兼様と兄弟ぢやと。道哲に欺瞞されて。其れから遠かに愛想づかし。提げ切りに成るときの。苦しみがあゝでは無いと。一昨日も叱られたが。心爰にあらずとやらで。厭々で勤めた故。今宵は心爰に在り。昨日は指や足を切り。いたい時の心持克く分つて來た上にも。内方へ書工が來て。大行燈を彩色した時の。せんじ蘇芳が残つて居れば。油紙の辨當袋。喜助どんの持つて居るのを。貰うて隠と入れて行き。身を投げ様とは疾くい女め。其れ程に死にたくは。此世の暇を取らして遣らう。觀念せいと引き付けられ。一太刀切られて仰け反る途端。思ひ断つて白むくへ。だらゝと注しかけたら。赤綿よりひつたつて。何うか情がうつりそうな。白むく一ツ棄てるのが。私の所作のやまどやと。聲が一度掛けさせ



たい。「お前は餘程氣まへもの。もしへ幻さん彼の通り。蓮葉な所は男の様なが。あれで貴殿に身を盡し。なにはの事も手に着かず。其處へ行つては頼と處女。奥様もあるかは知らず。何處へお出成さるにせい行衛。長く不憫がつて。何卒呼べて下さんせと。執り成すお秋幻之助は。喜ぶにつけ又呆れて。みちの者の心底は。又格別と心に感じ。容貌は固よりなれど。尋常の娘兒の。及び難き器用さは。容装るを業とする。流の女の常なれど。此の年まで都知らず。斯様の交らひせしことなき。幻之助には幾代の裝飾ひ。楊貴妃ども小町ども。見られて漫に嬉しきにも合せて思へば。父の羽織。預けしは洞九郎と。推諒すれば此幾代。若しや深き中ならば。妨害せんか其時は。戀は戀義理は義理。孝行には代へ難し。諸共に撃つより外に。爲様はなしと心に歎き。此坐にて羽織の主の。身の上の聞きたけれども。惣に言出して。怪まれんも諸事の邪魔と何心なき様して居たり。斯くて幾代はお秋を語らひ。老松町の裏屋を借り。幻之助を移り住はせ。一代の外に二代と云ふ。我が使を二人の小女郎。交々に附け置きて。自らも間がな隙がな。傍に來りて介抱し。四ツ計りなやみて。後よに尊き守御符。又南天の黒焼と。野に枯れ残る紫陽花の葉を煎じて與へ杯すれど。頼にもおちず半月餘り。日交になやみてよわげになればお秋も數々尋ね來て。幾代と顔を見合せては。切に愛ひ歎きけり。「是れよりは前に戻り。再び有馬の物語り。「幻之助源吾平。浪花へ發程し其後は。一人渚の物案じ。ゆぶれを聞いて

も立ち出ん。心も無くて斯る時。頼むは神や佛の利益。諫を聞かではやるのも。さウ／＼無理とは思はぬに。つけても那の子に怪我も無く。時節も來ずば間合よく。仇に出も會ぬやう。守らせ給へど此處彼處。伏し拜みても不安心。癪を押へて秋の日の。短き程も暮し兼ね。湯女が夕餐を侷めても。箸とる手さへ情きに。「有馬名物しは肴。麥蕨細工や箱づくし。女中の鏡蓋かはゆらし。さゝ私のおんころ餅よし／＼」向ふ坐敷に菓子賣の。女が客の肩揉みながら。だみたる聲の鄙歌も。年厭はしく打ち擲む。廊下より顔を出し。お蔭は御免と會釋して。ずいと這入つて「御隠居様。チャ私としたことが。お茶筌で居らしやつても。お若いお方を隠居様と。ト氣の毒顔に渚は莞爾。「四十と成れば最う年老り。夫の無き身は猶更隠居。其れはよいが唯一人。残されて淋しう御座る。鼠でもひきませう。お氣分も勝れぬ御様子。聞いて居ながら忙しさに。かまけて今日はさつぱり御不沙汰。おんころ餅がよし／＼と。餘まり良くも御座んすまい。虎屋のお饅を大坂の御方に最前貰ひました。不躰なからお茶うけに。煮ばなも入れて参りましたト。差置けば静と戴き。「大勢女中も有る中で。お前程尋常に。云ふて呉れるは一人も無い。「嬉しがらせて貴女も世辭もの。おほめ序に最う些と。賞てお貰ひ申ませう。私もお肩を下すなれど。後ろへ廻れば身を背け。「疲れきつて居成さるぢやらうに。「まア此んなにはつて居る。私に何の不用御遠慮。任せて置いて下さりませ。ぢやが先づお茶の冷ぬ中に。「ほんに



容姿と云ひ。氣だてと云ひ御前の様な。嫁に私はかゝりたい。悴もいやではあるまいと。云はれてさつと顔赧らめ。「餘まり愚弄て下りますな。浮れ出していけません。」いや最う飛んだ失禮を。致したが悪弄心ぢやない。斯して居ると何處やらに。嫁子の様な心がしてト。睦むげに言ひ交す。折柄すたゝ源五平。歸り來つて這ひ入れば、「汝は何故唯一人。早く歸つた氣遣はしい。幻之助は何うしやつた。慮外なや何故に。」御氣遣ひな事では無いが。お蔭さん御前はどうか。暫時此の所を。「そんならば行てさんじませう。お湯をさして參りませうか。又御手燧にお火もあり。御用が有つたらお呼び成されてト。云ひつゝ廊下へ立つて行く。後影を篤と見遣り。源五平は渚に向ひ。「若旦那の御供して。小矢野の驛までひた急ぎで。町のたてばで晝餐を。めしあがつて御休息。其時竊かに仰しやるには。源五平も薄々は。知つても居やう湯女のお蔭と。來た當坐から云ひ交し。情に絆され夫婦約束。たまかな生れで素性もよければ。お母に左様云つてと。思へど今日まで口にはいかり。打ち出し兼て卒爾に發足。思へば心掛り。仇に會ふとも氣かちくれ。不覺でも取らうかと。今から。何とも案じられる。彼れも明白昨夕晩く。己が便所に行つた時。廊下で竊かに泣いて云ふやう。正當たる夫婦なら。母様の御名代。兼て私も舅御の。仇なれば一所に行き。一太刀でも切り付けたいが。金に代へた身ではあり。儘に成らねば是非がないと。しみゝ泣いて口説きごと。身の代は五十兩か。六十兩で身儘のお

蔭。強ちに彼を伴ひ。仇討爲たいと云ふではなし。身受けして給はつたと。聞いた上では心も落ちつき。滅多に負けるものでは有るまい。變つた中なり時も時。己が口では到底云はれぬ。手前一度立歸り。母人にお歎き申し。長町の我が旅宿まで。早う吉相聞かせに來いと。仰つて追ひ歸され。それで早く歸りました。若い身では有る例。お蔭さんも里は近所。委しい事は彼の子から。お聞あつても判然と。何一つ失策のない。若旦那の稀のお願ひ。御納得成さりまして。聞いて上げて下さりませ。さうなれば今宵の内に。主人に會ふて成る丈手輕に。鹽梅よう談合ませう。「其れは思ひも寄らぬと。今の今まで彼のお蔭。今日に初めぬとながら。徒然として居た私を。兎や角やと慰めて。懇ろにして呉れる。あゝ良い嫁を取つた様など。有様云ふて居たなれど。今は中絶え途中からも。音信れこそせね長柄の長者へ。許嫁した上は。私から先づ立寄も。要らぬものとは拒めたもの。まさか一應挨拶も。なくて外より嫁とては。輕率には娶り悪い。御最もだがお世間狭い。御本妻には成らずとも。めかけ妾は有る倣ひ。彼れ程に柔順い。若旦那のよくゝに。思召しあつてこそ。此期に望んで必死の御訴しやう。お聞入れなされぬと。下郎でさへも乍憚。あゝ所生ぬ中故ぢやと。申しはせねど氣まづい様に。思ふばかりか一ツには。女の事で彼事と。貴女がしぶつて御座りますと。年輩盛りの御容秀し。若旦那と何うか斯う。訝うな意味がある故に。御不承知だと第一に。お蔭さんも氣が廻り。飛んだ浮名が



立ちさうで。はら／＼思ふて居ります。大切の所で若旦那の。お心が一致せねば。御不孝に成り耻に成り。萬一もの事が有つたなら貴女は冥界の殿様へ。何と言譯成さりますと。己が勝手口の口任せ。親切らしき意見口。斯く疎しき心底に。成りしこそよに淺間しけれ。「左様いやれば左様でもあり。互の爲によい様に。後刻まで考へて。何れ悪くは計らふまいト。聞いて喜ぶ源五平。して遣つたりと心に小躍。迷ひ入つたる戀路には。後も先も眞つ闇黒。「月も出ねばまた四時前。急いで髪も亂れ次第。一寸束ねさせて参りませう。呼んでも早くは到底も來まいト。月代の痕撫て見る。頭の黒ひ泥棒鼠。主人の恩は忘れても。口には忠と喜び泣き。どつかはどして其坐を起ち。出會がしらに廊下の隅。お蔭にばつたり。「こりや好い處で道ならぬとながら。外に金の都合も出來ず。浪速へ俄かに用が出來。一寸行かれた若旦那。送つて歸つて後家御を瞞着し。若旦那と云ひ交はしたと。執成て何んでも斯でも。身受して遣らねばならぬ。道理づくめに説破て。置いたれば十に九つ。今の間に汝は身儘。其所で後家御の前計りは。若旦那の御座る所へ。連れて行くとして此處を出て。其れからはそもじの里で。芽出たう祝ふ水杯。三々九くどう云ふにも及ばず。御恩の深い御主人をすして。不忠の名を取るも。此歴に嵌つた故。萬一けどつて身受けをば。否と有れば敗れかぶれ。手箱の金を竊み出しても。「ふ。いや之れはほんの申戯。竊みしては縛られる。縛られるて先づ祝言の。杯からして手に持たれぬ。

何の／＼賢くは見えても。おむくで欺し易い。運の開けた花簪さま。男振りでも細工つて來ようト。一人嚙舌つて出で行きぬ。お蔭は最前より。立聞きもしつ大方ならず。源五平が不長工夫。棄置き難く即刻に。渚の坐敷へ竊かに行き。「詐りは隠蔽す人の悪事。洩らすは罪と思へども。佛の様な御隠居様。萬一御心を付けぬときは。身勝手になからも此蔭も。困る上にも思はぬ濡れ衣。まアよう聞いて下さりませ。「顔色變へて氣遣はしい。今まで矢張お前の事で。源五平が兎や斯やと。「私も其事申したさ。最う／＼あの源五平さんは。律義の様で大膽もの。濟まぬ事じやが立聞きして。驚きもしつ又直接に。云ふのを聞いて私は。慄と身の毛が立ちました。最前から私が身受け。お頼ぢやと云ふ若旦那は。一寸も御存じないのみか。私は耻かしなから。長柄から來やしやんした。十三様と云ふお人と。四年以前云ひ交はし。分袂し後は消息もなけれど。堅い約束せし上は。今にももしやと楽しんで。外へ心は散らしませぬ。其れにまア彼の年で。いやらしい源五平さんは。間がな隙がな私を捉へ。初めは坐興に執成たが。段々どの手詰故。虚と云ふても濟まさぬ顔色。兎ても出來るとではない。此々の金がなくては。身儘にならぬと嘘言ついたを。眞受けに成つて彼様な。疎ましい悪工夫。お金を出して下さりますと。私は今更厭とは言はれず。嘘言であつたと云ふたなら。殺ろし兼ねぬ彼の凝り性。彼様男に膚觸れて。立てた操を破つては。義理も立たねば身も立たず。貴女も家來に金欺瞞れ。置き逃げせ



られも成さらばと。告れば渚は膽を消し、「大勢の召使の。中に残りて一人の骨折。彼の正直な實ていもの。何で其様淺猿しい。心に成つたか眞實とも。思はれねども嘘ついて。何にも成らぬお前の口から。言ふのは嘘の筈はなし。其れがぢやうなら浪花へ遣つた。彼子も何様な嘘吐いて。だまして何うした事やら知れず。あゝ案じられる。思へば、悪い奴。何うしたらよからうと。腹立つ渚をお罵はなだめ。「あゝいふ人の凝どきは。何をすることも知れませぬ。何うが欺して當坐を延ばし。若旦那さへ御歸り成さらば。何うとも所置は出来ませう。先づ荒だてぬが上々策と。私は存じます。何にしてもふと爲たと。言出した私が過失。「何の彼奴が不所存故。いや何うか爲様もあらう。歸へて來ぬ間に前へは彼方へ。「随分と御油断なく。「ようこそ教へて下さりました。別るゝ程なく源五平。「最う髪も結やつたかど。腹立つ胸を渚は押へて。「彼のとも汝の留守に。亭主に掛合埒明けて。金も渡して置いたれば。明日は早くお罵をば。浪花へ連れて行つて給も。扱最う十時もうつたらうが。手前も知る日比から。信仰する行者様。鼓の瀧に有る故に。時々參詣するにつけ。悴が無事を祈る爲め。此處では御百度せぬ計り。絶えず信仰凝して居れど。昨日今日はまだ詣でず。山路なれど僅か八丁。有明櫻も落葉して。聞い所でも月は冴へる。良い景氣を見たならば。心が晴々するであらう。草臥足で氣の毒なから。提灯點けて彼處まで。「お伴をするので御座りますか。御容易事では御座れども。夜更の風で御痛

所が。「留守に着々よく成つて。案じてたもんな大丈夫。なれども山の下り上り。其時は背負して。「愈々御出成さりますれば。此所からおんぶ致しませせう。「其れならば猶嬉しいと。身拵へして背に負はれぬ。「貴女今頃どちらへ。「ヲ、お罵さん遅がけながら。行者様へフひ一寸。「そりや御大儀で御座ります。源五平さんは氣を付けてト。行燈の火を提灯へ。うつして渚の手に渡し。「ハイそんならと門送り。二人は有馬の町を離れ。程なく彼處へ到り着きぬ。「此時月早や空高く。六甲山の峰を離れ。鼓の瀧の邊なる。紅葉の梢明るく見え。瀧の音鞆々ど。有馬川へ漲り落ち。物凄けれども秋の夜の。哀れ身に泌み鷹の。と渡る聲も最清く。見るもの聞くもの心を澄せり。折しも近き落葉山。妻戀ふ鹿のト聲に。喚驚して源五年。「畜生奴膽魂を。潰ぶさせ居つたと見廻はす油断。見澄して背に負はれたる。渚は提灯打棄て。懐劍逆手に源五平が。首に取り付き搔んとする。手先くるてひて。肩骨へ反れて輕傷を負ひければ。あつと叫んで手をはなす。渚は下へ挫と落ち。關節の痛みも打忘れ。直ぐに飛起き突き掛るを。源五平は身をかはし。臂しり摑んで寄せ付けず。「下郎には何咎あつて。名告りも掛けず刃物三昧。危いとのト突きはなされ。又も鋭くつけ入る刀尖。「餘り御無法其故はト。云ひ様短刀もぎ奪られ。引き付けられて齒を噛みならし。役の行者へ參詣は。汝をつり出す爲のみ成らねど。日來の忠義引換へて。湯女のお罵に戀慕の餘り。妾親子を欺きて。騙欺を爲んとせし汝。罵は十三といふもの



ど。去頃夫婦の契約し。二人の男は重ねぬ娘。己れに迫られ是非もなく。詐り云ひしを眞實と心得。己が妾を欺きし。首尾を立聞し。互の爲めと何も斯も。大畧と妾に告し故。初めて知つた汝が工夫。固一徹の心から。善人却て悪人と成たるからは片時も。油断は成らずと心も顛倒彼の席にて。手摺にと。思へど坊の騒ぎもうたてく。欺き出して後から。突うくと間を見る間に。早や此山な絶躰絶命。早まつて打損じ。期捕はれては運の盡期。殺さは殺せ我一念。眼前憂き目を見するぞと。且は罵り且歎き。「己れが其様心から。幻之助も何うか又。爲はせぬかと此様に。手ごめに成つた身は思はず。彼子の事が案じられる。南無行者様く。薬師様權現さま。目前利益を現はし給ひ。此奴に耻を與へて給べ。もうしくと泣き叫ぶ。源五平は怒りの顔色。「其んならお罵は男が有つて。おもしろ可笑しく待遇つたは。ながとく己を弄んだのか。其上に何も斯も。吐き出したので計圖は露離。色も戀も覺め果てた。此方に咎は無いやうなれど。零落をみつぐ深切づく。有馬三界濡れ草鞋。搦んで厭はず盡した忠義。可愛想だと思ふなら。其れは悪い了簡違ひ。欺されて居るのだと。聞かぬ迄も意見して。叱つて呉れるが人の情け。關節も利かぬ女の非力で。理否も聞かずに油断させ。殺さうとは邪見非道。其の根情を見るからは。最う善人に成る氣はない。お化に成るなら成るがよい。己れが刃物で己が呼吸の根。止めて死骸はどんぶらすこゝ。桃の種より柿の皮。澁は仇にや誰がした。皆此方の心か

ら。恨みを云ふなら自分に云へど。懐劍拾つて突込む尖先。彼方へすかし此方へ外し。逃げても逃さず危うき所へ。呼吸つき敢へず走せ来るお罵。「お出の跡を見送て。中へ入ても胸騒ぎ。静として居空もなく。一人で跡から来て見れば。奸計の其上に。お主に刃向ふ人非人。さア殺すなら私を殺しや。彼方に咎は些ともないに。刃を恐れず取り付くを。はらひも除けずにつたと笑ひ。「諸て物好きな夏虫の。招かぬに來て火に入り。其身を焦す白紅葉。罵にまかれてねど御座る。昔のお藤はいざ知らず。惚れも道理美しい。此後家を片付けて。其れから手前の足をば縛り。氣まづい承知で念を晴らし。其れから遠くへかつさらへ。打賣つて資金を拵へ。堅い商賣始めねば。年老つてから樂がならぬ。此奴を疊んで仕舞ふ間。其處にすくんで居やがれど。立ちげに蹶て脾腹を一寸當。「え、酷たらしいお罵をト。立寄る髻をぐつと掴み。胸板目掛け突き付くるを。力限りに身を捻ちもて。逃れ難なき獵場の雉子。「ほろりと鳴いて呉れても無い。此の山中へ病人達等。己を誘れ出すたはけもの。克くく腐つた生命だど。嘲り笑つて復振上ぐる。懐劍は手を離れ。左右の腕首自然と麻痺。之は不思議と源五平。驚く間もなく後へ倒され。起き上らんともがけども。些とも働くと能はず。次第に息切れ死ぬべく覺え。扱も不思議と我身を見れば。幅三尺もあるべき石の。五尺に餘るを仰に。倒れし上に乗せられたるなり。いで跳ね除けんと力を盡くし。急を上よりそつと押へ。如何にも優しき女聲。「身動きしやれば



一ト潰し。命惜くば堪へて居よと。さもなまめかしく聞ゆれば。眼睛をきはめて克く見るに。件の女は十六計り。肩上げしたる小柄の娘。渚を助けお蔭を呼び生け。「危ふい處で御座んした。私は此行者様の。お堂にお通夜をして居たもの。うつら／＼と眠る中。奇怪き物音耳に入り。目を開けば貴女方。悪くらしい彼奴が手籠め。故は知らねどお女中方の。難義は他所に見て居られず。此通石壇を。一ツ毀してお重にしたれば。活すも殺すも心任せと。言ふ顔渚は打見守り。「お年も行かぬ娘子の。此山中に通夜すると。仰るのさへ合點の行かぬに。男が五人七人しても。動かし難き彼の石を。まア何日の間に彼様に。持出して彼奴にしよはせ。危き所をお助け被成。下されたのは行者様。神佛のお姿を。現はし給ふか難有やと。伏拜めば打笑ひ。「何の私は近くの者。勿躰ない神様や。佛様では御座んせぬ。而して此方の姉さんは。貴女の最前仰つた。お辭といひ悪漢も。お蔭／＼と云ふたを思へば。定めて有馬の角の坊の。「あい其小湯女で御座んする。「其れは最うよい處で。態々も逢ひに行き。話さねば成らぬと。ほんに澤山御座んするト。二人を堂の前へ連れ行き。若し十三さん／＼。お蔭さんに逢ひました。まア早う此處迄と呼ばれて。堂を立ち出づる。男の顔をお蔭はうちみて。「お元服は被成ても。私は些ども見違へぬ。貴殿は長柄の十三さん。も逢ひたかつた／＼。何處に何うして居やしやんした。風の便も聞かばこそ。毎日々々戀ひ焦れト。云ひつゝ此方の娘の素振。見遣つてふつと心

付き。「而してまア十三さん。彼のお美しい娘子さんはト。問へども男は口籠る。「アイ私も去年の冬頃から。十三さんと云ひ交はし。國許を蒐落ちし少しの因縁を尋ね來て。此の邊に身を寄せて。春から隠れて居ます。四年以前當地に來て。お前とも言交し。淺からぬ中で有つたと。云ふ事も漸う此頃。役にも立ぬ争論した。其時ぬしが云ひ出して。其れで私しも始めて知り。遠く距つて居るでは無し。其んな事なら二人して。中よく殿御を大切に。爲たら猶更嬉しからう。親兄弟はありながら。我心から便もならず。顔も見られぬ力なさ。さういふお方を姉さんに。して暮されぬことかどて。ぬしをせたくて居たわいな。ト云はれてお蔭は夢みし心地。面目なげに十三郎。「お蔭さん勘忍して。腹立つて下さるな。其時も云ふた通り。私は長柄の濱名の倅。まだ其時は前髪だち。折角堅く言ひ交はし。臆て迎へを寄越さうと。云ふたもの、歸家りし後。心に忘るゝ暇はなけれど。我儘も云ひかねて。空しく月日を送る程に。思はぬ人の讒言にて。父上の勘氣を受け。是非なく近江の美作殿の。御家來の石倉氏へ。奉公して足掛け三年。此女は主人の息女。櫻木とてまだ漸う。十六で此通り。かほそい上にも多寡が女。まア彼様な力のあるは。天狗ならずば神佛の。現はれた様なれど。母方は大力の。代々續く奇特ある。五代石右衛門と云ふ武士にて。其娘の満月殿が。此櫻木の即ち母。血統をひいて奇躰の大力。此の所打ちひみしに。其故今宵も彼の始末。其れはよいが櫻木と。酒の上の戯れが。誠となり



て引くにも引かれず。人目を忍びて語らひしが。其内に播磨の國。浮島殿の御家來。淺香二代の逸之進と。云ふへ縁組定まりしかば。我も勸め拵へても。一圖に思ひ詰めてなれば。情なく云はし生命にも。及ぶべきかと當惑し。汝の事を片時も。忘るゝとはあらねども。同道近江を逐電し。此有馬の東に當り。名鹽村の上職人。松原作左衛門と云ふは。固と石倉の家に仕へて浪人したものとやら。其れを便て寄食。何卒此身の濡衣の。乾く様にと一と月に。一度づゝ此行者堂に。通夜して祈念を凝すにも。有馬の町を通るに付け。懐しさは山々なれど。面目なさに笠をふせ。又裏通りを廻り道。したのも矢張悪るかつた。最う斯う成つては是迄の。水臭さは堪忍し。櫻木と仲好して。給もるが何より深切ぞト。云へばお蔭も氣前もの。「私は固より卑賤身の上。姉の乙枝は新町へ。小兒の時から賣られて行く。私は有馬で湯女奉公。お八重と云ふ本の名は。十三さんの外人は知らず。通り名のお蔭で濟まして。居程なはかない身の上。お武家さんの御息女と。拵抗心は無けれども。思ひ斷れぬ十三さん。私にも半分は。いとしがらせて下さんせ。お二人で蒐落を。さしやんせずば今日此頃。十三さんにはまア合はれぬ。其上にも今宵の難義。櫻木さんが出が無いと。何れ程哀しい耻しい。目に遇ふたやら知れぬ所。思は海山怨みはなし。嬉しいわいなト喜べば。渚も顔を差出し。「他所の事かと聞いて居れば。十三殿は長柄の長者。濱名殿の物領か。又神佛と思ふた女中は。石倉の娘とは。其んなら私が

遠江へ。歸嫁つた後で生れた汝。懐かしかつた。七月迄は汝の邸に。悴と一ツに留つて居た。私は伯母の渚で御座る。文も時々取交はし。又先き頃も櫻木は。何うしやつたと問ふたれば。大和の高地へ奉公に。遣つた杯と隠されしは。汝の耻を云ひどもなさ。矢張親の慈悲なれど。氣振にも見せなんだは。満月殿も氣強い女。其れでは私の身の上も。櫻木は知りやるまいと。夫を失ひ家潰れ。此所に流浪居るとより。源五平の心變り。今宵の始末を大略語れば。櫻木は歎きに歎き。又我身の上面目なく。されども伯母に廻り會ひ。力强しと喜べば。お蔭のお八重は事の本末。委しく分りて我も亦。十三が縁に繫れば。他所の事とも思はれず。十三郎も遠州の。佐々木と知ては櫻木の。とは無くても離れぬ中と。太息をつきて。「渚様。吁以前の身であるならば。之より長柄へ御伴して。御不自由はさせぬと勘當の身の上にもあり。其のみならず申にも。申されぬ内幕の不始末。御出があつて善いか悪いか。何とも早や分りませぬ。又差當り氣遣はしきは。幻之助殿のお身の上。彼奴に白状させませうト。源五平が傍に。差寄つて聲高く。浪速へ行かれし幻之助殿。愈々無事で分れしか。包み隠さず委しくいへ。源五平々々々と。云へども更に返答せず。言はぬとて言はせいでほど。石を揺々動かせども。叫びもせねば克く見るに。何日の間にかは息絶えて。顔も手足も冷えたれば。石のあまりに堪兼しか。之れはしたりと驚けど。其甲斐なければ各々は。顔見合せて打歎き。櫻木は輕々と。石取除くれ



は平た蜘蛛。此儘置ては後六ヶしと。十三が指圖に櫻木は。源五平の首筋を。氣味悪さうにそつと摘み。逆巻急濤に投げ込つ。「其れでよし其れでよし。さらば某明朝早く。浪速津の方へ赴き。幻之助殿の安否を問ひ。聞くとあらば及はずながら。少しは力と成り申さん。まづ兎も角も角の坊へ。今宵は行きて一夜を明かさん。死人ゆき觸れ穢れば。行者尊へは改めて。またの日參籠申すべし。「十三殿云はしやる通り。此處から拜んで置ませう。「え、難有や姪には會ふ。年割なれば頼母しう。十三殿は言ふて呉れる。惡漢は目前天罰。此様子では悴がことも。最早案じは有るまいが。宜い様に頼みますト。打連立て湯山の町へ。二時打つ頃に歸りけり。曾根崎此に潜み居る。幻之助がわらは病み。今猶怠るべくもあらず。今宵は寒けを催して。袂幾重も打着られ。身中縮る枕元。小女郎の一代は甲斐々々しげに。藥暖め口取の。菓子取り出して近く差置き。「晝間から松さんが。今に居て歸りやしやんせす。歳代さんか切らしやんした。指が遂う露顯れて。其紛争がすみきらず。其れで今宵は一度も。未だ見舞には來やしやんせす。嫌ひのくくの。客なれど取り止めねば都合も違ふ。其れでも弱い顔をして。謝つては猶爲悪いと。澤山苦勞をしてなれど。此んな紛争が有る杯と。決して云ふな此れしきは。土地の慣ひで時々あるを。慣れぬ御方は苦勞にして。氣合に觸るとよくない。口止めをさしやんした。「よしなさ己れに實を盡し。可愛や重る辛勞辛苦。定めて幾代は打擲され。「何んのくく夫程な。騒ぎ

ては御座んせぬ。まア其れよりは寄越さんした。くるめ様の御符をば。明日とも云はず今直ぐに。頂いて見やしやんせ。庭の井戸は車故。私にも容易に汲まれる。水初穂でも汲でん來て。上げうわいなト立ちて行く。「汝までが其様に。深切にして呉れると云ふは。何うした縁と涙ぐむ。「生憎寢覺のお秋さんも。お十やがへりが落合つて。上も下も大騒ぎ。見にも行かぬと云ふてであつた。主も淋しう御座んせう。水を汲んで上げてから。一寸歸つて様子も見たし。成らう事なら一寸など。連れて來るから案じずと。待しやんせやとませきつて。一代は車を軋らせつ。手繰上げたる釣瓶の一方。井筒の縁に静と乗せ。湯呑洗ひて水をうつし。其儘御符を水に翳せば。幻之助は押頂き。一口口に飲み干して。信を凝らして言はず。一代は「左様なら行て來ますと。出で行く後はしんくくと。夜は更けねども植ごみの。柏の枯葉初霜に。からくく鳴るも物淋し。幻之助は猶憂目苦しみ。瘧に煩悶む其折柄。潜門をがらりのさくくと。土足で踏込一人の曲者。行燈の火で煙草を吸ひ付け。「疾くより己様が。お見舞申さう申さうと。思ふたが窃りと。狙ふ度々人が居て。段々と遅く成つた。幻之助己様の。御面相忘れたか。お笑止や其業病で。目もくらみ判然まいが。近う寄り御拜を遂げよト。突き出す顔。「や、己れ奴は。洞仙が供をして居た。下男の麥介。會ひたかつた。親人を奥山へ。入れて欺して殺した逆賊。洞九郎は何處に居る。早く云へ其れ聞かう。案内もなく深更に。忍ひ入りしは案するに。洞九



郎が指圖を受け。我を害せん爲めならん。病中なれど汝等に。負けて居る我にはあらず。縛しめ受けよト袈を跳ぬ除。衣紋竿なる幾代が巻帯。取らんとすれども腰立たず。此は口惜と枕邊の。刀は杖につきなから。五體すくみて動かれず。「あゝ口惜や淺猿しや。時も時此業病ト。急るを見遣りて打笑ひ。「悶き居るは々々々々。間日では些と勝手が悪るし。時も時故來たのだは。成程々々親方の。洞殿の御座る所も。知いで何とせうぞいやい。聞き度は聞かせもせうが。我りや幾代奴が情夫に成つて。飛んだ旨い目に逢ふ奴だ。己も幾代が客の一チ人。細く長く通へどて。帶大盡と彼れが命た。祭りの日には來合せて。廻丁の與吉が話を聞き。心に掛れば忍ぶは得手もの。寢覺屋の裏梯子。竊と覗けばち秋奴が。己れに着せは惡止の。揚句に幾代に取らせた羽織。己れが親のお晴で有らう。親方から呉れたのだ。其處で手前を生かして置いては。親方は兎も角も。己が戀の非常邪魔。片付けて仕舞時は。親方へもえらい忠義。己れに負ける己では無いが。立會ふが面倒い故。動けぬ處を見込んで來た。何と賢いものでは無いか。あゝ親方はさる國の。さる侯へさる人の。推舉で新現に召しかへられ。去にても立派な立身。最う仇打ちは逆も叶はぬ。手前も同じ猿なれど。身軀も手足も動かさる。きやつくと吠えてゐるト。飽迄嘲り腰刀。悠々抜き出し切り蒐れば。幻之助も匍ひ廻り。刀は持てども抜かれもせず。苦しむ様を見て打ち笑ひ。「芝居か何かの本で見た。此通りの瘡を顛ひ。斬り殺さる

と爲た刀が。何とか丸の寶劍で。其威徳で瘡が落ち。當が違つて圖顛倒。己も亦投げられては。面工が悪いえりにえり。佩して來た此の鈍力もの。而も鈍たり赤鬮。今佛に成る精進堅め。食はせて遣らうと付け廻る。幻之助は彼方へ顛び。此方へ轉げて刃を避しが。追詰られて障子はぱつたり。外れて庭へ墮と落つ。麥助次いて靜に下り立ち。幻之助を土足に掛け。三尺餘蹴散らせば。庭の井筒に打ちつけらるゝ。響きに井筒の縁なる釣瓶。がつたり落ちて汲置の。冷水ざつと頭より。幻之助が物身に掛り。其冷さ五躰に沁み。忽ち精神明かた。瘡病忽ち本復し。念はず突立斬りつくる。麥助を遣り過し。足を掃つて大地へどつさり。「あら有難や冷水を。思はずあびて瘡を忘れ。仇の片割手に入しは。正しく來女の神の御利益。まつた平常信仰する。神佛の冥助ならん。あゝ嬉しや心地よヤト。蠢き々々逃げんとする。麥助を宙に引立て。手繰寄せたる車井の。釣瓶引き切り繩もて縛しめ。「さア洞九郎は何と云ふ。武士に成て何處に居る。白状せずば灸所を除け。陰に刻んで憂目を見せう。病氣見舞の赤鬮。貰へば此方の之れから御馳走。帶よりましの釣瓶繩。細く長く苦ませ。ねこそげ云はせた其の上では。芽出たう此世を猿廻し冥土へころりと倒して遣らう。何にも知らざる杯とは。云はせぬと眼先きへ又尖。差し付けられて。一縮み。「あゝ申します申します申すが。節分の鬼の様に。赤鬮が目へはいつては。恐くて物が言はれませぬ。名作ものは持つて來ず。よもやと思ひし瘡は忽ち。彼村正にあらね



ども。神や佛のかた釣瓶。水も滞らず落ると云ふは。ハッア争はれぬ奇特ぢやよなア。「え、喧囂しい云ふことは。云ひ居いでと刀の胸打ち。折しも漸う縁屋より。幾代は此處へ駈け來り。「幻さん主は何日の間に。お健康な身のとりなり。而してまア何うした事で。帶さんは縛られて。「不審は最も此者は。苟めならぬ久しき盜賊。「羽織の紋が一樣故。若や尋ねて居やしやんす。兄弟衆でもあらうかと。「思はれたのも無理にあらず。日増に心底打明けて。實を盡して呉れる。汝に猶も隠したも。謹みても謹むに。如はなしとの我遠慮。最早隠さん様はなし。某は遠江。今川殿に使へしもの。佐々木幻之助。父の現太左衛門殿を。盜賊洞九郎に敢なく撃たせ。縁に離れ國を追はれ。父の仇を報せん爲。諸國を遍歴する。折しも御身に思はれて。嬉しきもの。心の絆。仇討の障りと思へば。情なく振さる其折から。瘡を患ひ其上に。父の最後に奪はれし。羽織を發見て此邊に。愈々仇敵や徘徊するを。幸ひ足を停めし處。其れより益々上なき深切。心も弱り今は早や。此方より望んでも。夫婦になり。生を改ても離れぬ心。其れは差し置き此帶どか。云ふのは仇敵の奴僕。我が病氣をしもつけこんで。害せん爲に忍び入り。危ふき折神の御利益。釣瓶の水を惣身にあび。落ち難かりし病氣は全快。馳て此奴を縛しめて。今拷問を爲る處。汝が愛する客にもせよ。是非なき次第と堪忍あれ。「知らぬ事とて汚らしい。盗人で御座んしたか。勤めの哀しき枕を交し。耻かしいやら。悔しいやら。其で無くても始より。

些も好た處はなし。え、此様盗人づら。思ひきり責めさんせ。而して主は今川様の。御家で佐々木の御子息なら。私の親は家來すぢ。御世話の爲たいばつかりで。親方さんにも宜い頃に。御恩の御主の若旦那。云ふたが眞實に成つたので。此様嬉しい事はないト。喜ぶ幾代。幻之助も。「して又汝の父御はど。問ひ掛くる時しもあれ。次ぎの間の隔の障子。手荒く引開け駈け入るは。安立町の松どか云ふ客。「戀の仇の浪人奴。思ひ知れやと幻之助。見掛て拔刀を振り舞はす。



攝津の卷二編終

邯鄂諸國物語

攝津之卷三編

第二編にもいひし如く、在下未津國を知らず、然も  
 ありげに作意なれど、京の夢大坂の夢、前後ともに  
 慥ならず、邯鄂の枕を碎ても、土地の案内暗ければ、  
 ふるき歌にも、夕ぐれに難波あたりをきて見れば、  
 たゞ淡墨の蘆手なりけり、解たやうで不解がち、知  
 ざるを知らずとして、地理風俗のさたをせぬは、外  
 題の諸國の本意に背けど、廢られもせぬ續もの、人  
 のそしりは今宮の蛭子三郎、聾となつてきかぬ氣



で、蘆手書の表紙裏など、物したるはこけおとし、住吉の濱邊の燈籠、高くとまつた津守にはあらず、人  
壬子春

笠亭仙果

鄂部諸國物語

笠亭仙果

攝津之卷三編

宵には晴し大空の。雨雲頻に蔽ひ重り。時雨か霞か荒々しく。風に交りて降り出す。折しも已に記せる如く。安立町の松と云ふ客。酒に亂れて前後不覺。幻之助が隠れ家を誰れに聞きしか克く知りて。仲居に托けし腰物を。取出して彼處を駈け出で。此家へ踏込狼藉るに。幻之助も持てあぐみ。谷なきものに怪我させてはど。あしろふ程に行燈を。先づ彌先きに踏み倒せば。燈火消えて眞暗黒。更に黑白も判明こそ。松は忽ち踏み外し。縁より落ちて井戸側に。縛しめられたる箱助が。背へ充分身を打付け。「諸は素早い幻之助。最うこゝに隠れて居るなど。切り掛けられて箱助は。縛られながら身をねぢ向け。之れは耐らぬ幻では無い。人違ひだと云ふのも聞かず。透めき乍ら切り付くる。又は機よく手首の繩目。ふつつと切れは一二寸。微傷は負も痛さも覺えず。天の與へと箱助は。松を突き遣り逃げんとすれど。目先きも見えねば掻きさぐる。兩手に思はず植込みの。ねずもちの木を抱へ込み。足もて搜れば堀際なり、して遣たりと



掛け登り。外面へ一ト目飛び逃げ去れど。幻之助は心も着かず。猶ほ目的もなく振り廻はす。松が刃の光りを目的に。近付き寄て組伏せんと。するを幾代は危なかり。棄て逃げたがよいわいなト。口には云へど東も西も。知るよしなければ冷汗を。流して急る計りなり。此時往來邊に夥多の人音。燈火點して入り来るは。松が遊びし千鳥屋の。仲居女に若いもの。松は何處へ行きたるかど。處々を尋ねし揚句。若もや此處と立寄りて。此有様に喫驚仰天。「宵から旦那のおほ不機嫌。果して此様を擾ぎ。」此りやまア何で御座ります。お静かに成りませと。立寄る程に幻之助。早く刃をもぎ取つて。鞘におさめて遠くへ遣る。此方には座敷を空けし。幾代を叱つて仲居ども。引立出れば松は猶ほ。聲荒らかに六ヶ敷。云へども勢初めに似ず。「後で何うとも成ます。唯何事も私共へ。お任せ成されて福々敷と。御機嫌直しの爲様は様々。お腹の立のは御最もト。最も倒しに松を誘ひ。幻之助には爾々ど。物をも言はで出て行く。幻之助は四邊を片付け。見遣れば庭に縛しめ置し。箱助は影もなし。走らせたるこそ残念千萬。さり迎未だ遠くへ行くまじ。塀の外面は老松殿。未だ境内に彷徨て。居るかも知れぬと門の戸引き立て。駆け出る向ふへ高らかに。念佛唱へて來かゝる修行者。幻之助は突當り。「氣の急ぐ儘に眞平御免。佐々木氏では御座らぬか。」眞に貴僧は有馬の湯で。御教化受けし大仁様。「諸其許の御住居は。此處で御座らつか。愚僧此頃寺に歸り。十夜の内は毎夜々々。墓廻りして有縁無

縁。法界の回向を致す御座る。して其處許は騒々しく。「御聞き被下其節も。お話し申した尋ねもの。其手掛りに成るべき曲者。不意に捕へて糺問程に。障害出で來て取り逃し。其後追はんと目先も見えず。念はず失禮致したり。左様ならばと云ひ棄て。行くを大仁呼び止め。「急ぐは悪しと諭したるを。最早失念召れたの。時節を待たで早やまらば。禍を招くの端。逃ぐるを追ふは決して無役。其れよりも猶目の前に。好手掛の有るを見て。我言辭を信じ召され。さらばと云ひて。大仁は南無阿彌陀々々々々々。梅田を指して別れ行く。幻之助は眼前に。手掛りありとは何事なるかど。門の邊庭の隈々。残りなく探し廻る。所へ入り来る若い者。「先刻は飛んだ大騒ぎ。お怪我もなくお芽出たい。幻さんのお前だが。我儘を立て通しても。點の打たれぬ。幾代さん此様に樂みを。拵へて置しやつても。親方も黙爾て居れど。宵から縛たいきさつの。あるのに外でもない松さん。六ヶ敷のを知り乍ら。此處へ來たのはあの女には。些と出來ぬかと思はれます。「いや最人は兎も角も。身共が一番面目ない。「何左様でも御座りませぬ其處で先刻の彼の腰刀。まだ彼れなりに大方此方に。「成程彼れに仕舞て置いたと。取り寄せて熟く〜視め。「思ひも寄らぬ見事な拵へ。何の心も付かざりしが。彼羽織と云ひ此短刀。序いでに刃をも一見と。すらりと抜き持ち燈火を近付け。「愈々確かに此りや朝日と。云ひ掛けて鞘にをさめ。「成程比丘は生佛と。感ずる顔を若い者。訝かしさうに覗き込み。「幻さまお前は時々



ど。何んだか變な目付きをして。雪佛とは何んの事。霰は降つたが雪は降らぬ。幾ら更けてもまだ八ツ前。朝日の出るには餘程だ。どりや行ませうと脇さしを。取り上ぐるをば否とも言はれず。何氣なく歸し遣り。一人熟々頭を傾け。彼こそ正しく父上の。長柄の長者へ結納に。遣はす約束被成れし短刀。其光り眼を射て。正面には向ひ難しと。朝日丸と之れを名づけ。飛鳥を目貫とす。松と云ふは彼奴が綽名。安立町の賣藥や。九倍二の店のもの。眞誠の名は作兵衛と。去りし頃幾代が話。彼箱助の類にて。矢張彼奴も洞九郎が。親類縁者のものには非らざるか。さはとて妄に手ごめにし。責め問はるゝものにもあらず。幾代を深く慕ふも幸ひ。此由篤と言ひ含め。彼だに其身を打任せば。索性も包まず明すべし。あゝさり乍ら全盛に。暮す爲めぞと客嫌ひ。せぬ彼幾代がよくゝに。厭なればこそ振り通す。松に今更靡けとは。我儘過て言はれもせまい。我が女房と云ふでもなく。今宵こそ我名を聞いて。家來の娘と始めて知れ。是迄凡小一月。見初たどか慕ふどか。云ふ計りにて縁もなく。由縁もなきに身を盡し。物の入費も厭はゝこそ。しん身も及ばぬ彼が親切。實意に引かれて何日しかに。懐しくなり可愛くなり。彼が外には世の中に。女はないかと思ふまで。別れて居る間も眼前に散々。厭く迄承知をして居ながら。馴染の客の來たと云ふ。其夜は自然小腹も立ち。二日も續きて閑暇なりと。聞けば肩身が狭まうかと。案ずる程な愚痴になり。彼の悪々しい松とやらの。自由にさするは口

惜く。彼れも定めていやで有らう。引入られて今宵迄。引續きてのわらはやみ。假の枕も交さずして。斯迄深くなると云ふは皆珍敷い二人がな。變つた事もあるものと。思ひ續けて居る折から。幻さんまだお寐せんか。お瘡が落ちたと聞いたので。夫れは何より嬉しいが。可笑くもない今宵はお使。一代や提灯お消など。云ひつゝ上つてべつたり坐る。寢覺屋の女房お秋。「深更に來らるゝのみか。何日もに變つて元氣もなし。何の用事か氣遣はしい。今宵は日暮から色々の。騒ぎの紛に神の御利益。瘡りは落ちたが疲れた故。がつかりとして氣鬱く。寐るさへ厭な心持。今宵は二度まで危険ない事。大略彼の子に聞きました。些と餘義ない用事に付き。千鳥屋へ行て居ると。松さんとやらの座敷から。呼に來て其席で。幾代さんは何日にない。酒機嫌のどろ／＼眼。今一代をば幻さんの。處へ遣らうとした處。之れからお前歸るなら。此處まで一寸幻さんの。來る様に言ふて欲しい。外でもないが斯様々々の。とで酔ふて上なれど。松さんも此の儘では歸られぬ。皆のものへ祝義でも。出さねば成らぬと云ふ處。持ち合せた爲替の金。宵に托て置いたのを。手付に渡して私の身受。其れはまア難有い。思召ぢや。内での喜び。私も之迄幻さんに。戀の意氣を立て抜いて。思ふ存分貢いだけれど。勤めする身で承らくは。其う／＼世話も成りもせず。不思議に今宵は瘡も落ち。最早達者に成らしやんす。此處が好い別れ際。松さんに棄てさせた。お金の冥利が恐くもあり。悪うしたのを腹立てず。氣永



に通うて下さんした。志ざしも悪からず。情夫に名の立つ幻さんに。松さんの眼の前で。切れて見せねば気が済ぬ。呼んでも此處へ來なさんせずば。二人手を引き押し掛る。左様云ふて下さんせ。返事は一代に吞込ませ歸して越せて下さんせと。眞面目くさつて平氣な顔。私も呆れて物が言れず。若しや様子もあることかと。廊下へ呼んでも顔も出さず。勿論親方姉さん達。寄つて集つて嚴しい意見。爲た様子は小女郎が話。其手前でもあらうけれど。受け出されては何んにも成らず。まア餘り心變り。私は無暗に腹が立ち。忌々しさにつうと立ち。あい其通傳言けませう。何うとも勝手に爲しやがれど。小聲で叱つて歸つた處。ありやまア何うした譯に成つて。彼様に愛想づかし。何うも私は合點が行かぬ。お心當りも御座いませんか。「お秋さんさへ分明らぬ必底。此幻之助に知れやうと。彼女故身をうちし。客の果と云ふにも非ず。怪我をさせて引張れ。其れから今日までたて過し。食べもの着物未々の。些細の事迄心を注け。一生連れ添ふ女房たりとも。及ぶまじき實心に絆され。兎や斯く思ふは我過り。我前世に打ち任せ。善くも悪しくも彼幾代。只我儘を立て通し。いぢより起る親切にて。非常の戀路に較べ。道理を以て推難し。呆れたりどて腹を立て。怨を合む中にはあらず。隠くすとも坐に明かし。膚ゆるしたは我過まり。猶一大事を頼まんど。思ひし事水の泡。實に々々時節の到ぬ故。九分成就して一分にて。事整はぬものならん。來いなら何處へも行きませう。其んなら一代案内し

やれ。雲時留守を頼みませう。一度も出ねば錠もまだ。無いのに明けても置かるまし。口取りは火鉢の抽斗。二ツ目に何か有た。煮ばなでも拵へて。待つて居てだに貰ふなら。其れこそは恩にきる。いや彼きりで火も起さぬ。炭取は屏風の隅に。あゝ其の疊は油一面。裾を曳いてはたまらぬ。どりや行て來ませうと。云ひつゝ着物更ためて。大小挟み履物を。探せばお秋も下たつて。「留守は一代を置いても濟む。待しやんせ私も共々。伴をせぬば落着れぬ。幻さんの諦め様も。餘り奇麗いで腹に落ちぬ。矢つ張人に油断させ。松さんの今度はうらはら。唐突に劍の舞。「之れは爲たり。年若で。暗愚かな身共。お差替もない腰刀を。畜生の爲にはいつかな棄申さぬ。否畜生と云ふでもない。否もう大事を抱藏た身共。女の心に變りしは。弓矢神の矢つ張りお守護。氣遣ひ無用と足早やに。出で行く後より燈ひを。照して追ひ付く小ぢよくの一代。お秋は提灯受取りて。お前は彼方へと歸し遣り。要らぬ事をと幻之助。否を聞かず後に尾き。千鳥が許をさして行く。「藝妓の三味線太鼓のこうた。酒びたりなる其の處へ。卑怯もせず幻之助。入り來れば見かへる幾代。松は態々丁寧に。手をついて一禮し。「先刻は失禮千萬。幾重にも御免あれ。さて此の幾代は爰許と。深く申し交したとやら。此の度拙者主人に請ひ受け。宿の妻に致すからは。指もおさしせ申しませぬぞ。幻さんへ。旦那さんの云ふての通り。私が身受けの相談も。最早さつぱり住吉の。枝葉榮ゆる松さんと。幾代變らぬ夫婦の杯き。三



々九度々々云はずとも。お秋さんに云ふた通りをかしい夢をお互ひに。見たと思ふて下さんせ。諸々念の入た挨拶。未練は些とも残りはせぬ。望まれて書いた起請。反古に成らずは返して貰はう。汝のも持参したト。守袋の口を開き。取り出して投遣れば、「私もお前の起請文。手渡しせねば心掛り。神々様のおん名もあり。不要ぬものどて打遣らず。又女でも出来たとき。間に合せたがよいわいななど。同じく投げ出す封じ文。悔しなからも幻之助。胸を摩つて手に取り上げ。表書讀んで目を見合せ。内懐へ納むれば、「ほんに重荷を卸したやうな。其處に寛々いやしやんせ。松さん早く寝やんしやう。「まア待やれ。今日は亥の日と爐を開けて。先刻に少し火を入れた。巨燧がいまだに暖かさう。些あたつてから其上で、「冷たか何處でも其れからは。私が澤澤暖める。「手前實々其心か。「知れた事をど寄り添ひて。屏風一枚開くを見て。お秋は堪らずツと出て。「幻さんが柔和しうて居やしやんすと好いかと思ふて。義理も法も知らぬ女。姉でなければ妹でなし。交際變へし幻さんに。代つて私が一ト騒ぎ。入れねば此儘引込まれぬ。金持づらの襟につく。安おしろいの厚化粧。千枚張の其横顔。はりぐちかいでは置かうかど。寄らんとするを幻之助。「止せと云ふのに尾て来て。人に異言を爲たものが。女達等悪て口。「其れでも餘まり。「まアよい」。打てよいなら己が打つ。兎も角彼方で何事も。話せば判明と押し隔て手を取り出る。其後には。二人が等しく脱上衣。投るを小女郎が受取つて。疊む此方に吸付

けて。幾代が差出す長烟管。烟草の烟雲と成る。巫山の夢を結ばんと。昨夕の雨に濡かゝる。折しも傍の炬燵の樓。搖ぎ出づると見る程に。中より布團引きまくり。現れ出たる一人の老女。松は見るより喚驚仰天。逃けも得遣らず頭は疊尻もつたて。被らんとする。布團をも。引きめくられ。「よなほし。萬歳樂と。叫べは老女は苦笑ひ。「幾代殿とは汝ぢやの。やうも。作平を。欺罔して腑脱にしてみつた。私は住吉安立町。此作平が主人で御座る。九倍次殿が無くなられ。今年で丁度十三年。後家をたてた此お瘤。此奴が甘い口前に。うつかり海苔の返り花。會式歸りの料理屋で。ついた譯に成田屋も。帯や狭いといとしら成り。海士の人目を葱賣り。綾瀬や小原や大原に。成らぬ藥りつきながし。嬉し涙の水堰入れて。田もやう畑も野郎殿。新參なれど引上て。倉の鍵さへ預けしは。皆な此方が悪るけれど。好い事にして我儘氣儘。あのものゝと年寄を。嫌ふて後には寄り付かず。悪所狂いに外を内。愒氣をしても叱つても。蛙の面に水遊び。しめ川より住吉の。隅に置れぬ蛤味は。勝れて居ようもの。嫌はれ乍ら浮か。金を使うた其上で。町人の刃物あつかひ。果は身受けの相談とは。己は呆れて物が言はれぬ。疾より戀は覺め果たが。確に所を見た上で。今日も今日とて身を囊し。此邊の奉公人。世話するものに知つたのが。有るのを幸ひ斯々と。話して此處へ日暮から。雇ひお針の目見え勤め。取別け今宵は客達の。多くて誰れも忙かしく。碌々物言ふ人さへ無いも。天の與へど



此處に立ち。彼處に隠れて己れの所爲。残らず見れば思ふたに。百層倍の不埒もの。最早泣いても笑ふても。家へ屹と寄せ付けぬ。主でない家來でない。而して彼の何でもない。行たい方へ行居らう。唐棧揃へもだが着せた。小袖も羽織も持て行く。襦袢は呉れて遣る程に。琉球細の胴つきも。さア〜脱いだり脱いだりと。否應いはせず剥取られ。松はぶる〜オ、寒と。夜着引つ被ぎて突伏は。幾代は思はず吹き出す。「不埒ものは勘當する。汝を初め氣の毒ながら。勿論身受けは薩張破談。手付の金と彼奴が脇指。此處へ持つて来る様に。内方へ云ふてお呉れ。彼奴が爲めには一文き半。費す筈は無けれども。虚言いふて来て隠れて居た。私が今兩日の挨拶も。所が故思ひきり。一分一ト切れ渡りますト。惜し〜捻つて差置くを。見向きもせねば返事もせず。幾代はつツト立つて行く。亭主後方へ出來り。手付を返す法はなしと。六ヶしう云ひ掛けても争論ひ。負けぬお瘤が強情。遂には金と脇指も。受取て之れで宜しと。松が衣類を包んで脊負ひ。脇指を腰に帶し。「其んなら大きにお世話で有つた。些ども早う歸りませう。廣田や今宮の邊へ行くと。淋しくなれど身の守り。刃物があれば大丈夫。只では駕に乗られぬ計りか。怒るに傍道へ。かき込まれては金よりも。姫御前の身は不用心ト。呔き〜立出れど。挨拶を爲るものもなし。悪所ものは義理知らず。提灯貸うと云ひもせぬ。ハイ借ぬとて困らぬのさ。お月様が彼の通り。心を斷る世話はなく。懷ろでの成る丈が。矢つ張利益ぢやと減ず

口。南を指してとぼ〜と。數夥多なる橋を渡り。浪速の町も出離れ。猶行く程に廣田の社の。松の林に差しかゝる。早や曉の風寒く。虫の聲さへ噺れ果て〜。さひしさ云はんかたもなし。此時後に聲高く。老婆奴待等と呼ぶより早く。背負ひ包みに手を掛けて。矢庭に後ろへ仰反りかへらせ。足踏かくる曲者あり。お瘤は哀悲き聲を上げ。「あれ悪漢が殺します。誰ぞ救命て下さりませ。人殺〜と。叫べど答ふるものとは。唯松風の音ばかり。「喧しい黙つて居ろ。」やや己れ奴は作半ぢやな。「ヲ、己だが其れが何うした。止め達するのが面倒さ。千鳥屋では爲る儘に成つて。耻つら搔いて居たが。能く非道い目に逢せあがつたなア。此所の奴等もいた現金。有時は旦那様。此身になれば二階には。最う立てても置き居らず。己が仕たてた丈有て。有繫に幾代はわかつた奴。之れ迄悪う爲たを悔み。眞實いとしう成たかして。襦袢の小袖と此巻帯。貸た計りか近い中に。是非寢覺屋迄來て呉れる。之れ限りにさしやんしては。幻さんへも耻かしからう。人のおちめを他所に見て。居られぬが私が性分。お前の耻を雪がにや置かぬと。實の涙を墜しをつた。此方もたて引て出直して。身受を爲ねば男が立たぬ。金も小袖も脇指も。返した上で明日から。賣藥屋のあとしきを。譲らば命生を助て遣る。厭だと吐さば踏み殺す。何うだ〜と揺動ば。「あゝ痛苦いとお瘤は肩息。先づ足を緩めて呉れ。是非がない望みの通り。叶へて遣らうと言様少し。緩まる足を兩手に抱へて。押倒し起き上つて。腰なる脇指抜かんと



するに。仆ながらに足<sup>11</sup>以て蹴<sup>け</sup>遣り。立ち上りさつても小癖<sup>こしやく</sup>な死そこなひ。其根情<sup>こんじやう</sup>では助けられぬ。お題目<sup>たいもく</sup>でも唱<sup>とな</sup>へて居ろト。又乗<sup>のり</sup>つ掛りて脇指<sup>わきさし</sup>抜き持ち。胸板<sup>むねいた</sup>目掛けてぐツさぐさ。お瘤<sup>うぶ</sup>は手足<sup>てあし</sup>を切りにもがき。「主殺<sup>しゅころ</sup>しの極悪<sup>ごくあく</sup>人。罰<sup>さく</sup>が當らで何とせう。あゝ苦しいあゝせつない。何うでも己<sup>おれ</sup>は死ぬとか。「おゝ死ぬのだ其れからは。三津<sup>さんづ</sup>の川<sup>がは</sup>で雇<sup>やと</sup>ひお裁縫<sup>ざいほう</sup>。お婆<sup>おば</sup>さんの手傳<sup>てでん</sup>して。經帷<sup>けいゐ</sup>子の洗濯<sup>せんたく</sup>しろ。先刻<sup>せんこく</sup>に己<sup>おれ</sup>が着るものを。剥<sup>は</sup>いだ時の意氣<sup>いぎ</sup>込<sup>こ</sup>では。よい給金<sup>きんが</sup>が取れさうだ。オヤ最些<sup>もうちつ</sup>とも動かぬへ。息<sup>いき</sup>が絶<sup>た</sup>えたか脆<sup>もろ</sup>いものだ。去年<sup>こぞ</sup>の會式<sup>えしき</sup>が新枕<sup>しんまくら</sup>。今年<sup>ことし</sup>の十夜<sup>じゆや</sup>が北枕<sup>きたまくら</sup>。南無妙法<sup>なんみょうほう</sup>蓮南無阿彌陀<sup>れんなんむあみだ</sup>。あに袖<sup>そで</sup>に血<sup>ち</sup>が着<sup>つか</sup>ねばよいがト。死骸<sup>しかい</sup>を起<sup>おこ</sup>し脊追<sup>せお</sup>ひし風呂敷<sup>ふろしき</sup>。解<sup>と</sup>かんとする時<sup>とき</sup>來<sup>き</sup>掛<sup>か</sup>る人影<sup>にんげい</sup>。見<sup>み</sup>付<sup>つ</sup>けられてはかなはじと。松<sup>まつ</sup>の小影<sup>こかげ</sup>に駈<sup>かけ</sup>込みて。見<sup>み</sup>れば獸<sup>けもの</sup>の皮<sup>かわ</sup>を提<sup>さ</sup>げ。襪<sup>つゝれ</sup>の袖<sup>そで</sup>もいぶせげに。穢<sup>けがれ</sup>多<sup>おほ</sup>と覺<sup>おぼ</sup>しき壯漢<sup>じやうかん</sup>なり。お瘤<sup>うぶ</sup>が死骸<sup>しかい</sup>を遠<sup>とほ</sup>くより。見<sup>み</sup>付<sup>つ</sup>て立寄<sup>たちよ</sup>り領<sup>りやう</sup>きく。血<sup>ち</sup>も厭<sup>いと</sup>はず金財<sup>きんさい</sup>布<sup>ふ</sup>。外<sup>ほか</sup>して己<sup>おれ</sup>が首<sup>くび</sup>に掛<sup>か</sup>け。風呂敷<sup>ふろしき</sup>包<sup>か</sup>腰<sup>こし</sup>に着<sup>き</sup>け。短刀<sup>たんたう</sup>の身<sup>み</sup>を取<sup>と</sup>り上<sup>あ</sup>げつ。鞘<sup>さや</sup>を探<sup>さが</sup>せど見當<sup>みあた</sup>らねば。獸<sup>けもの</sup>の皮<sup>かわ</sup>にて身<sup>み</sup>を包<sup>つつ</sup>み。尙<sup>なほ</sup>隈<sup>かま</sup>々<sup>々</sup>を搔<sup>か</sup>き探<sup>た</sup>る。其様<sup>そのさま</sup>の尋常<sup>じんじやう</sup>ならぬに。作平<sup>さくへい</sup>は氣おくれし。顔<sup>かほ</sup>をも出<sup>で</sup>さず潜<sup>ひそ</sup>み居<sup>ゐ</sup>る。折<sup>を</sup>から又<sup>また</sup>も此<sup>こ</sup>の所<sup>ところ</sup>へ。急<sup>いそ</sup>ぎ來<sup>き</sup>るは幻<sup>まぼろし</sup>之助<sup>のすけ</sup>。此所<sup>こゝ</sup>彼所<sup>あそこ</sup>に眼<sup>まなこ</sup>睛<sup>ま</sup>を配<sup>くば</sup>り。行<sup>い</sup>く袂<sup>たもと</sup>先<sup>さき</sup>に觸<sup>ふ</sup>れるもの。取<sup>と</sup>り上<sup>あ</sup>げて。「此<sup>こ</sup>りや脇指<sup>わきさし</sup>の鞘<sup>さや</sup>ではないかト云<sup>い</sup>ふ聲<sup>こゑ</sup>に。驚<sup>おど</sup>く非人<sup>ひにん</sup>は足早<sup>あしはや</sup>に。去<sup>い</sup>らんとするを幻<sup>まぼろし</sup>之助<sup>のすけ</sup>。見<sup>み</sup>付<sup>つ</sup>てつか／＼歩<sup>あ</sup>みより。腰<sup>こし</sup>の邊<sup>へ</sup>に手<sup>て</sup>を掛<sup>か</sup>るを。輕<sup>かろ</sup>ろく捻<sup>ひね</sup>つて振<sup>ふ</sup>り解<sup>と</sup>き。逃<sup>に</sup>るを逃<sup>に</sup>さず引戻<sup>ひきも</sup>す。互<sup>たがひ</sup>に無刀<sup>むたう</sup>の挑<sup>いた</sup>み合<sup>あ</sup>ひ。雲<sup>くも</sup>時<sup>とき</sup>時<sup>とき</sup>を移<sup>うつ</sup>す折<sup>を</sup>しも。夥<sup>あまた</sup>多<sup>おほ</sup>の

人音<sup>ひとね</sup>近付<sup>ちかづ</sup>來<sup>き</sup>て。はいほう／＼と呼<sup>よ</sup>はりつ。槍<sup>やり</sup>拔<sup>ひ</sup>箱<sup>はこ</sup>徒<sup>た</sup>若<sup>わ</sup>黨<sup>かたう</sup>。三間<sup>さんま</sup>棒<sup>ぼう</sup>の轎<sup>りまの</sup>を。中<sup>ちゆう</sup>に昇<sup>のぼ</sup>せてうたせ來<sup>き</sup>れば。是非<sup>ぜひ</sup>なく非人<sup>ひにん</sup>と幻<sup>まぼろし</sup>之助<sup>のすけ</sup>。左<sup>ひだり</sup>右<sup>みぎ</sup>へ分<sup>わ</sup>れて猶<sup>なほ</sup>豫<sup>よ</sup>程<sup>ぢやう</sup>に。轎<sup>りまの</sup>より顔<sup>かほ</sup>を差<sup>さ</sup>出<sup>で</sup>し。幻<sup>まぼろし</sup>之助<sup>のすけ</sup>の顔<sup>かほ</sup>打<sup>う</sup>ちみれば。此方<sup>こゝ</sup>も屹<sup>きつ</sup>と見返<sup>みかへ</sup>せど。有<sup>あ</sup>繫<sup>き</sup>に月夜<sup>げつや</sup>確<sup>たしか</sup>かに別<sup>わか</sup>らず。復<sup>また</sup>差<sup>さ</sup>覗<sup>のぞ</sup>けば籠<sup>かご</sup>をばつたり。乗物<sup>のりもの</sup>急<sup>いそ</sup>げ「ハッ」。此間<sup>こゝ</sup>に非人<sup>ひにん</sup>は逸足<sup>いしやく</sup>出<sup>で</sup>し。徑路<sup>けいぢう</sup>へ折<sup>を</sup>て逃<sup>に</sup>去<sup>さ</sup>るを。猶<sup>なほ</sup>幻<sup>まぼろし</sup>之助<sup>のすけ</sup>は追<sup>お</sup>追<sup>お</sup>る。作兵衛<sup>さくべゑ</sup>は緩<sup>ゆる</sup>々<sup>々</sup>と。松林<sup>しょうりん</sup>より立<sup>た</sup>ち出<sup>で</sup>つ。「折角<sup>せつかく</sup>婆<sup>ば</sup>アを殺<sup>ころ</sup>したが。何<sup>なに</sup>も斯<sup>この</sup>も横奪<sup>よこさつ</sup>せられ。犬<sup>いぬ</sup>死<sup>し</sup>と云<sup>い</sup>ふは聞<sup>き</sup>いたが。是<sup>こゝ</sup>れこそほんに犬<sup>いぬ</sup>殺<sup>ころ</sup>し。浮<sup>う</sup>か／＼として復<sup>また</sup>人<sup>ひと</sup>が。來<sup>き</sup>ては逃<sup>に</sup>げるも逃<sup>に</sup>げられぬ。此間<sup>こゝ</sup>にさうだト駈<sup>かけ</sup>け出<sup>で</sup>しかけ。否<sup>いや</sup>是<sup>こゝ</sup>れと云<sup>い</sup>ふ的<sup>あて</sup>はなし。此所<sup>こゝ</sup>へ行<sup>い</sup>かうと拱手<sup>てを</sup>折<sup>を</sup>りしも。華表<sup>けわひょう</sup>に羽<sup>は</sup>たく社<sup>しゃ</sup>の雞<sup>けい</sup>。とつけいこう「口真<sup>くちま</sup>似<sup>に</sup>を爲<sup>な</sup>やがる。難波<sup>なんば</sup>の津<sup>つ</sup>より遠<sup>とほ</sup>からぬ。長柄<sup>ながから</sup>川<sup>がは</sup>を横<sup>よこ</sup>にうけ。高<sup>たか</sup>く築<sup>き</sup>ける瓦<sup>わ</sup>葺<sup>ぎ</sup>。又<sup>また</sup>土藏<sup>どざう</sup>もておし廻<sup>まわ</sup>し。樹立<sup>じゆたつ</sup>物<sup>もの</sup>古<sup>ふる</sup>る一<sup>ひと</sup>ト構<sup>かま</sup>へは。濱名<sup>はまな</sup>左門<sup>さもん</sup>が先<sup>さき</sup>祖<sup>そ</sup>より。持<sup>も</sup>ち傳<sup>でん</sup>へたる家<sup>いへ</sup>宅<sup>たく</sup>にて。二代<sup>にだい</sup>はなしとの諺<sup>ことわざ</sup>に。違<sup>ちが</sup>いて既<sup>すで</sup>に七<sup>しち</sup>八<sup>はち</sup>代<sup>だい</sup>。榮<sup>さか</sup>えて家<sup>いへ</sup>名<sup>な</sup>を墜<sup>お</sup>さぬは。實<sup>まこと</sup>にも長柄<sup>ながから</sup>の長<sup>なが</sup>者<sup>もの</sup>なるべし。金銀<sup>きんぎん</sup>寶藏<sup>ほうざう</sup>に充<sup>み</sup>實<sup>じつ</sup>。何<sup>なに</sup>一<sup>ひと</sup>ツとして完備<sup>くわんび</sup>ぬとなく。樂<sup>たのしみ</sup>しさ限<sup>かぎ</sup>ある間敷<sup>まがしき</sup>に。心<sup>こゝろ</sup>に任<sup>まか</sup>せぬ世<sup>よ</sup>の中<sup>ちゆう</sup>とて。妻<sup>つま</sup>のお大<sup>おほ</sup>は顔<sup>かほ</sup>もよく。萬<sup>ま</sup>般<sup>ぱん</sup>に拙<sup>つた</sup>からぬども。嫉妬<sup>ねたみ</sup>心<sup>こゝろ</sup>最<sup>も</sup>と／＼深<sup>ふか</sup>く。左門<sup>さもん</sup>が前<sup>まへ</sup>は年<sup>とし</sup>若<sup>わか</sup>き。下女<sup>げによ</sup>は顔<sup>かほ</sup>さへ出<sup>で</sup>させず。引續<sup>ひきつ</sup>きて二<sup>ふた</sup>人<sup>にん</sup>の子<sup>こ</sup>を生<sup>う</sup>み。兄<sup>あに</sup>十三<sup>じゅうさん</sup>郎<sup>らう</sup>妹<sup>めい</sup>梅<sup>うめ</sup>枝<sup>え</sup>。諸<sup>しよ</sup>共<sup>ども</sup>に成<sup>な</sup>長<sup>なが</sup>して。早<sup>はや</sup>や生<sup>な</sup>心<sup>こゝろ</sup>づく程<sup>ほど</sup>なるに。何<sup>なに</sup>れも瓊<sup>たま</sup>玉<sup>たま</sup>を伸<sup>の</sup>べたる如<sup>ごと</sup>く。美<sup>うつく</sup>麗<sup>しく</sup>しき子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>にて。こきん雞<sup>けい</sup>を見る<sup>み</sup>るが如<sup>ごと</sup>し。偕<sup>いっしょ</sup>其<sup>その</sup>二<sup>ふた</sup>人<sup>にん</sup>の服<sup>ふく</sup>装<sup>さう</sup>のよさ。十<sup>じゅう</sup>四<sup>し</sup>や十<sup>じゅう</sup>五<sup>ご</sup>に成<sup>な</sup>りながら。異<sup>たが</sup>腹<sup>はら</sup>らぬ兄<sup>あに</sup>弟<sup>てい</sup>なれば。さしあひくらず耻<sup>は</sup>かしと。思<sup>おも</sup>



ふ心も更に無く。臥すにも共に枕を並べ。起くれば一所に睦れ合ひ。外に友達連をも持たず。人交せもせず嬉しげに。遊ぶを見るに母お大。我子ながらも妬ましく。分れて居よと叱つても。猶目を忍び一所になれば。さて疾らしや厭らしや。彼奴等は犬猫の。行動ひ爲るに極りぬ。棄て置いては家の疵。放逐すより外はなしと。夫に様々譏言し。確かに見たるとありと。畜生に執成して。尾鱗を付けたる口の鈎に。忽ちかゝりし夫の左門。元來敏慧生れならで。只お大のみ我佛と。尊み居れば彼が云ふ。言辭の善惡疑はず。さて歎かはしき子供が行ひ。世間廣く知れぬ中。兎も角も計らはん。梅が枝は遠江の。佐々木氏へ嫁に遣る。約束を爲たりしと。彼れはよく問ひ合せて。否應云はせず近き中に遣はすべし。其迄迎も二人のもの。一所には置き難く。平常親を理づめして。賢ぶる十三郎。相續人なれど五月蠅悴。宅に處かぬに如はなしと。折りも折りとて十三郎。三光と名けたる。茶碗を落し疵付しを。咎に執成し詫ても聞かず。少計の盤纏を與へ。情なくも追ひ出す。十三郎の其尤の外に思るゝ故を知れば。最と悔しく口惜く。其儘死なんと爲たりしが。眞實の親のとなれば。後に至りて思ひ返し。呼び戻し給ふと。ありもやせんと生命も惜しく。少しの知る邊を心充に。近江へ行きて箕作の。邸に奉公爲たりしなり。梅ヶ枝も辨別なき。兩親の恨めしく。愈々兄を慕はしく。思へど之れも兎や角と。云ふ程無き名を立てられんと。初めより物云はず。心の中には絶間なく。兄の身の上を案じ暮し。

袖を濡らさぬ日とてもなし。其の次々の年の。春十日許の事なるに。お大は常時拜みもせぬ。持佛堂に香を薫じ。菩提品を高らかに。讀み了つて禮拜し。飼鳥に餌飼する。侍女共に餅菓子取らせ。梅ヶ枝が秘藏する。玉琴と云ふ鶯を。熟々と諦視り。事の思はしき様子なりしが。何を見て驚きけん。叫と叫んで打倒れ。人心地も付ざるを。人々は狼狽喚めき。様々に介抱せしかば。辛じて息出でたれど。夥多の名醫も名を付け得ぬ。怪しの病に侵されて。目をあてられず苦みけり。其苦みを如何にと云ふに。餘寒の頃は云ひながら。總身を雪に埋る如く。氷の底に閉ぢらるゝかど。寒さ冷たさ骨を徹し。衣裳を山と積み重ねても。床の廻りに數知らず。炭火をおこし暖めても。少しも効驗あらばこそ。五臓を縮めて苦しむ聲。世にまがくしう物凄く。次第に瘦る顔せの。鬼も斯くやと恐ろしく。人々近付く者もなし。食事と云へば藥も通らず。唯だ飼鳥の播餌をば。自ら好みて調へさせ。甘し〜と嘗けるが。七日七夜飽迄苦しみ。身軀は石の如くになり。遂に果敢なく身死りけり。此は常事にあるべからず。前世に惡を作り。今斯く苦痛を受けしならん。後生の程も不憫だど。例を越えて此上なき。佛事を數日執行ひ。佛齋を役として。雲時は月日を送りしが。去るものは日〜に疎く。死別れの涙程。乾き易きものはなし。左門はお大が百ヶ日の。日數經過ぬに閨淋しく。近き頃茶を云ひたて。奉公志望て住み込みし。環と云へるに夜話の。媒介不用轉び合ひ。濃茶の色にひぶくさは。又の逢ふ



瀬をまつ重ね。其の夜を千代の口切にて。深く寝ればしほげの底のメラぬ風躰もきやうぎ焼。掘出し物と賞翫し。文福茶釜の化物と。心の付かぬぞ愚なる。元來伶俐く賢き環。主人の情けを受くると雖。更に驕れる顔もせねば。朋輩にも悪まれず。愈々身持ちを慎めは。諸々奇特のものなりとて。引上げて妾となし。抑續けて後妻に直し。梅ヶ枝にも母と呼ばせ。例の如くに此環も。我佛と敬ひけり。環は取り分き梅ヶ枝を。大切に待遇ひつゝ。十三郎をも呼び歸し。給へかしと勸むるに。左門も亦其心になり。近江の國を尋ねけれど。其行衛確かならず。梅ヶ枝は殊更に。本意なく思へど情けある。繼母の仕向を喜び。少しは心の慰むも果敢なし。次ぐの年はお大の一周忌。土藏開より引續き。大藏の經文開かせ。夥多の僧を一七日。家に集めて大法會。十七日は結願にて。日暮る程に締果つ。法師は布施を荷はせて。我が寺々へ歸りし後は。俄に闐と靜かになり。物淋しげに蕭々と。雨さへ生憎降り出でけり。梅ヶ枝は持佛に向ひ。懇ろに伏し拜み。部屋に退き氣に入りの。お袖お留に物の本。草双子古物語。繪卷物杯取り出させ。其れは土蜘蛛九十九神。化物話で其癖に。恐くも無ければ興もなし。其れ其の上下二卷ある。出子熊が憐れでよい。徐々と讀んで聞かしや。「チャ〜」是れは小さい畫で。可愛しいが下手らしい。「寫しの悪いに又寫し。初めの方も斷て居て。讀ぬ處も澤山あれど。又よいのがある」と云ふて。本屋が未だに持つて來ぬ。上の卷は猪狩りや。軍計で私は嫌い。下の卷の出子

熊の。責に遭ふ處から。あゝ最些と開くのぢや。「まだ一邊も見ませぬが。全躰何を書きまして。出子熊とは何の事。「可笑い藝題で御坐りますな。「今云ふ通り娘の名。「いかなとでも。「其れに美人で孝行もの。昔々九州に山家の太郎と云ふ大名。其弟貝田兵衛と云ふ。悪者に滅ぼされ。十三歳になる山家の姫君。家老牧野の太夫と云ふに。庇保れてお在したを。貝田は聞出し使ひを立て。姫を捉んとする時に。彼出熊子は牧野が娘。親の吩咐少しも否まず。姫君の姿に成り。貝田が邸へ捕れて行き。責め殺さるゝ憐らしさ。諸姫君は肥後の國。阿蘇の四郎の嫁となり。後に本領安堵して。出子熊の後懇ろに。吊らひ給ふが一部の終。岡部の與一と云ふ忠臣。軍を起し貝田を生虜り。牧野太夫が貝田をば。鋸引きにする處。讀むたびに氣味がよい。先づ其處等から讀で見や。「其れは定めて面白ふ。御座りませうと二人の侍女。交々に讀む文言。「貝田實にもと思ひ。汝は牧野が娘の。手子熊にては無きやか。急ぎ歸りて山家の姫を出すべし。手子熊打ち聞いて。嬉しの今の仰せやな。牧野が娘の手子熊と仰せあり。助け給はん事こそ。身の喜びにて候ぞ。伯父御なうと申ければ。貝田此由聞。あれは處置へと云ひければ。無残やな手子熊を。散々にさいなみけり。一番の間條には。十の指を押折り。痛くは白狀よと問ひけれど。言はず。二番の間糺には。甘の爪をはなさるゝ。思絶りぬる其上は。白狀つることこそなかりけれ。或者申しけるは。牧野が娘と思召さば。牧野夫婦を召されて。夫婦の者の目前にて。



痛く問はせ給ひなば。其身こそ健氣にて白狀ずとも。實にや親子の事ならば。夫婦が白狀ぬ事  
あらじ。さらば夫婦を召せとて。夫婦の者の目の前にて。炭の火を起し立てし。猛火熾りの其  
時。無残やな手子熊を。彼方へは歩せ。又此方へは引通す。絹の襖は春の野邊。猛火となりて  
燃上る。目くれ心も消え果て。倒れ臥す處を。情けも知らぬ武士ども。左右腕を引き張りて。  
歩めしと責にけり。牧野此由見るよりも。母が愛む娘なれば。此處にて母が白狀るかど。母  
が方を瞥見る。母此由を見るよりも。父が愛む娘なれば。素破はや父が白狀るかど。父が方を  
屹度見る。牧野餘の情さに。居たる所をずんと立ち。貝田の前に跪まり。のう如何に貝田殿。姪は  
子にてましまさずや。伯父は親にて御座なきか。餘に痛く糺問すれば。海士の他所の見る目ま  
で。見奉れば厭はしやと。申ければ手子熊打聞いて。兎ても消ゆ可き露の身を。素破や父が白  
狀るかど。兩眼を少し明け。小蟹の糸より細き聲を上げ。其處除け牧野は尾漏など。汝左程に  
思ひなば。一昨日の暮れ程に。肥後へ落して呉れよとて。萬事頼みて候へど。左はなくして結  
局敵きに渡しつゝ。火水になれど責めさすれば。思へば伯父の貝田より。牧野は特に恨めしや。  
貝田此由承はり。山家の姫に疑ひなし。唯責め殺せと云ひければ。かま差し繩にて胴を結び。  
油炎の前に引き掛けて。上つ下しつ責にけり。然らば其儘消えもせで。情なの今の命かな。七  
十四度の拷問に。度重なれば手子熊も年十三と申に。朝の露と消えにけり。傳へ聞く人々。憐

と思はぬ者はなし。お袖は鼻を詰らして。もう後には讀ますまいと。涙を拭へばお留は目を  
剃き。つても疾くらしい貝田奴ぢやと。簪し抜て畫の顔を。突かんとせしが手を止め。お大切な  
繪巻物。お許し成されて下さりませ。其でも思へば腹が立つと。恐い目をして睨むを見て。梅  
ヶ枝は眼なぶたを押さへつゝ。打ち笑ひ。突き破つてもだいじはない。何日見ても哀憐でならぬ。  
實か嘘かは知らねども。私も物數奇手子熊の。爲めに朝夕線香は立て遣る。而して其れはもう  
止て。福富の双子にしや。氣が變りて宜からうと。なにくれと讀せつゝ。熟々聞いて居たりしが。  
眠氣を催し繪にては脇息に成り居る鏡臺に。寄り掛りしまし目どろみつ。折りしも庭にさらし  
ど。物の落つる音のすれば。ふと眼を覺し見出すに。何日の間に降りたりけん。雪いたう深く  
積り。音のせしは植込の。雪を夜風の掃ひしなり。月の光雪に榮えて。眞晝の如く明らかなる  
に。庭の隈々細かに見られ。我物ながら珍らしき。心地せられて眺居れば。垣の本の雪動めき  
て。最と苦しげに叶く聲あり。近付き見るに見も分らぬ。若き女を厳しく縛しめ。雪に埋みて  
置きたるなり。恐ろしくもあり哀憐もあり。繩引解きて其由を。問はんとすれど聲立たず。手  
も痺れて足も動かず。立往生に成つたるに。件の女は益々苦しみ。遂に果敢なく息絶たり。斯  
りし程に我母の。お大に似たる眼ざし尖きが。切り戸を開けてするしと入り來り。死たる女  
の繩斬り解き。死骸を抱き上げ小脇に掻い込み。外面の方へ出で行くを。歩むともなく。梅ヶ



枝も。後に従ひ行く程に。猪名寺と彫り付けたる。立石のある寺の前の。梅の古木の下影にて。抱へ帯の様なるものにて。死骸の首を堅く結び。大枝に吊り下げつ。首を縊りて死たる様に。捨らへ置いて何處へか。母に似たる女は去りぬ。怖恐ろしき爲をする。女もあればあるものと。呆れて立てる後ろの方。申しくと呼聲すれば。誰なるらんと見返る目先に。ふらめく死屍は目を動かし。口を開いて物言ふ様。其顔の恐ろしさに。あなやと叫び梅ヶ枝は。頭を土に打伏せは。それ程人の恐がる様な。貌にしたも誰が爲。妾は六出と云ふ侍女。おん身の母御と其又母御。秘藏の驚逃したとがに。嫉氣嫉妬を取り集め。目口も分ず打破り。雪埋みし其結局。之れ此の通り死耻を。見する計りか心から。縊て死せしと人も思ひ。責め殺したる其身は安穩。己れ祟らで置うかど。先つ新しい盆に當の敵き。取り殺しても恨みは晴ず。成佛もやらぬ冥途の苦艱。お身の母御も引續き。憂き目を見せんと思ひしが。前世の果報甚く。近寄ことの難かりしに。幼なきよりの我儘氣儘。理由なき嫉妬に心を悩ます。其虚に乗らんとする折しも。去年は廿三回忌。言譯計りの回向には。預かつたれど罪を消す。懺悔をす可き心はなく。妾を雪にて責め殺し。縊て棄たるとなると。色にも出さぬ其悪さ。八寒地獄の苦みを。見せて殺した心地よさ。またおん身達兄弟も。鳥獸の行ひを。させて恥辱を與へんと。稍其心を起させたれど。性來行ひ正き故。如何とも成し難し。中にも御身は慈悲深く。古物語の手子熊さへ。菩提をた

すくる志。悪を作りし其人へ。大法會のとひ吊ひ。冤罪に生命を失ひし。此身は棒一本を。手向る人もあらはかど成り果し身の恨みをば。不憫と思はれ懇切に。亡き後吊ひて給へやど。喘ぎに喘ぎ物語る。聲は虫より細けれど。息は炎と立上る。冥途の苦艱目の當り。梅ヶ枝生きたる心地もせねど。胸を落付け顔を上げ。委細き理由は分らねども。母上や祖母様の。聞けは悪事なきおん振舞。汝の怨恨は一々最も。知らぬ中は是非もなし。此事父御へ物語らば。よも等閑には爲給はし。思へは私も因果もの。此様いふ事を發心の。媒介として遠からず。妾を變て汝を初め。罪を作りて先き立ち給ひし。方々様の後世の爲め。佛の道に入る程に。怨恨を晴して成佛あれ。尼法師に成るとを。急には許し給はずとも。男に膚は觸れまじければ。親人様にも兄にも。必らず祟つて下さるなど。云へば死骸は莞爾と笑ひ。其の御心が變らぬなら。何の執ねく祟りませう。南無法蓮華經と。唱ふる聲と諸共に。ほゝ法華經と玉琴が。夜とも云はぬ百の囀り。梅ヶ枝驚き頭擡げ。見れば今尙ほ鶯の。一ト聲二聲鳴くも怪し。お袖お留は梅ヶ枝の。背撫で摩り。貴女まア。恐い夢でも御覽うじましたか。恐ろしい魔され様。お留さんお臺子の。ほんにお酒を上げませうト。介抱せられ梅ヶ枝は。太息吐つ。四邊を見れば。是れ一睡の夢にして。寺と見えしは掛軸の山水。花壺の梅頻りに薫りて。床の間の小壁の縁に。忘れ置しけづりかけ。ならめく様に縊られし。死骸の面影見ゆるも疎まし。手古熊の責めらるゝ。所



を夢に見たりしと。侍女には先づ云はず。即て父の前に至り。夢の様子を委細く語れば。佐門も切りに打ち歎き。「左様の事のありもすべし。お大は初めお麻加と呼び。汝も知つて居やるであらう。其猪名寺の郷士。笹原霜右衛門が妹娘。十五歳父母は。蝶鯨の毒に中りて死失せ。其次の年私方へ。縁付たれどその頃より。家は次第に衰へて。三年も経過に相續の。成り兼る程貧しくなり。後を取りし兄息子は。公の法度を犯し。所を追はれて家斷絶。女房の里なれば。再興すべく思へども。障礙多くて成就せず。是も死靈の祟ならん。尤も思ひも寄らぬを。夢に見るも常なれど。お大が去年の病氣を思へば。棄置き難きとなりとて。次ぐの日は菩提所へ。法會の事を語らはんと。手紙など書かするを。環は見て雲時と止め。「女の差出た事なれど。檀那等の法事もよいが。都難波に隠れなく。生佛と世に尊む。大仁村の大仁比丘。お頼申さば眼の前に。迷の者の成佛のも。大方確かに見えまして。一入尊ふ御座りませう。」成程燈臺本暮し。十里二十里遠路から。遙々と加持祈禱。受くるものは數知れずと。聞いて居ながら未だ今日まで。お顔を知らぬはほんに不覺。檀那寺は後にして。左様しやう左様しやう。二里にも足らぬ大仁村。今から行かうと供人引連れ。佐門は其儘爲樂寺へ。赴きて住寺に逢ひ。事の由委しく語り。又の日に我が屋敷へ。招待して法會を修せしむ。大仁は懇切に。亡靈の後を吊ひ。又梅ケ枝も邪氣に觸れ。顔の色も普通ならず。患ふまじきものにもあらずと。祈り加持して守りを

與へ。響應すれども箸をも取らず。夥多の布施をひきけれど。十が三を受け。門前の乞食に施こし。後も見ずして歸行くを。見るもの涙を流して。感む敬ひ信を起さぬはなし。菩提所にても大施餓鬼。連續きて行こなはせけれど。梅ケ枝は尙此上。彼猪名寺へも參詣し。彼所にて佛を。供養し。其日に即て尼となり。庵を造り住ま欲しく。左は云はねど猪名寺へ。參詣したと。切りに請へば我も。與に彼所へ行き。笹原の屋敷趾を見すべしとて。環を殘し更衣着の初め方。梅ケ枝連れて立ち出でぬ。後に環は心を付け。夫と娘の影膳も。人に任せず自から調へ。其夜は早く門をも閉ぢさせる主人の居らねば嗜好む酒も。今宵は飲まず閨に入り。「淋しい時は夜も永い。まだ四ツそうなど打ち歎き。廁へ行って手を清め。詠むる庭に奇怪の人影。近づくを見て驚ろさしが。心を定め莞爾と打ち笑み。「何所から忍んで來たのじやら。まア此方へと手を取りて。障子閉てきり入りにけり。此者は抑も何者で殿誰も大方御存ならん。」



攝津の卷三編終

邯鄂諸國物語

攝津の卷四編

往事渺茫として聲の如し、此編上には大仁が身上  
 話、下卷には第二編の、有馬のつゞきに遣れるを補  
 て、皆がら往事を語るなれば、はかなき夢にまさり  
 て興なし、さりとして夢にもあらざれば、獺も他所眼  
 で喰氣もあるまし、巧も拙も反古なれば、羊にと思  
 へども、此獸めつたにをらず、丁度よし邯鄂の、枕屏  
 風の下張と、をもへばいとすくなし、せめては是も  
 夢好の、蝶とはよべど蝶ならぬ、てふつがひの繕ひ  
 にや、用ゐむと打棄しを、是でもよしと榮久堂、畫師



に渡して呉れたるは、夢ではないかと嬉しさに、其通をしるして序とす、

癸丑新刊

笠亭仙果

淡海諸國物語 卷四編 攝津の卷四編 笠亭仙果

郡鄴諸國物語

攝津の卷四編

笠亭仙果

長柄の長者濱名佐門。娘梅夕枝を連れて。猪名寺へ行きし留守に。しようむ環は閨に。丑満頃  
に忍び入りたる怪しの男。懇意しげに羽織脱ぎ捨て。蒲團の上に大胡坐。頭巾を取つて差出だ  
す。煙草のつぎたし一服吸ひ。「琉球紬におくじまの。羽織を着せても似合で有らう。町人衆と  
扮しても。此姦夫を大仁坊と。知る者が有らうか知らず。光明山にて亡滅たる。遍照丸の手下  
の後。鮫島に流された。大日冠者と云ふ泥棒とは。よもや誰れも氣が付くまい。化れば何うで  
も化られるものは己計りでもない。二股村の獵夫の。娘が長者の奥方とは。有繋の大仁喫驚り  
したと。さのみ四邊に遠慮もせず。沈着かへれる大膽に。環は胸を跳らして。「分袂てからの物  
語り。話したいにも聞き度にも。木竹も眠る夜中でも。油断の成らぬに私は唯。氷の上に居る  
心地。「其所は確だ大丈夫だ。甲らを生えた泥印は。人の眼を開かさぬ厭禁ひ。知らぬものは一  
人も無い。其上にも奇々妙々な。まもりが有れば平氣く。「其が眞實なら妾も嬉しい。「餘まり



嬉れしい事もあるまい。鐵瓶の湯は沸騰て居る。此南京の土瓶は茶だなト。茶碗に汲で一ト口のみ。「苦いが上物有繫は長者。友白髪と己は飲だ。菓子簞笥は千菓子計か。玉椿に幾代の友。吁此方計りで。共白髪と今でも思へど當時から。他所へ幾代の玉椿。人の事は忘れる筈。下の重には茗荷餅。「何の忘れて好いものか。「忘れぬものが長者の後妻に。成つて珊瑚の玉の輿。血涙の重れる程。打ち敲かれて山を追はれた。難澁は誰がさせた。成程心も二岐村その。初め誘拐したも。此の大日が惚れた故だ。其れを己には手も付けさせず。遍照丸が我物顔に。のろけて居るのが胸悪く。いやみ雜りに口説かれて。素より厭でもないお前。「密通したは悪けれど。己計りをこつびどい。目に合て手前は其儘。思々しくて悔しくて。今川家の打手を引込み。山寨を打潰させた。其功は有りながら。褒美所か殺されて。死なねへのがめつけもの。其頃人の噂には。鯨島へ出した船。難風で打ち碎れ。舟夫まで残らず死だど云ふは。矢張嘘で有つたのか。「否や嘘でもない先ア聞きやれ。噂の通り海中で。風か變はつては氣は大暴風雨。鍋墨を塗つた様な。雪が蔚つて眞暗黒。櫓も折つしまう。山の如な怒濤の中を。彼方へ揺られ此方へ揺られ。其中に三河の國。伊良子の濱が見えると思ふと。船は岩に當つてくだけ。船頭かけて十八九人。魚の餌食と極りがついたは。眞に思へば可愛想。己れは板子に抱きついて。浮きつ沈んで爲て居る中に。氣を失なつて死だやう。生たやら知らなんだ。所で弗ト眼が開くと。見

た事もない海邊で。物凄いな砂つ原。其所が彼の伊良子の濱よ。其所で己が居る傍に。躊躇で居るを誰かと思へば。遍照丸が曳間の町へ。出張せて置く醫師の洞仙。後で聞けば折も宜く。彼の邊に用があつて。磯端傳ひの歸り道。己は波濤に打上げられ。息も切れて倒れて居たを。深切に介抱し。妙藥を服用せた故。甦生へつて身軀も強健。時刻も丁度今宵の刻限。四邊に見て居るものはなし。難船を幸ひに。上方へ逃げろとて。路銀計りか指添の。脇指さへ己に呉れる。辭退も無約貰うて置かう。吁友達とは云ふもの。親身も及ばぬ生命の親。一生涯恩にきやう。其んなら健康で累ねと。分るゝ所にどや〜と。岩の間に隠れて居たが。漁夫と見えて荒くれ男。刺子のどとら着たるもあれば。筒袖一ツに腰篋で。魚扱を擔いだものもあり。二人を中におつとり圍め。破船の船木を拾いに出て。其れより勝しの島脱けを。相よく見つけた此りや旨い。打擲や縛れと口々に。叫喚て隙なく獲物を振り上げ。打つて蒐れば二人は可笑く。己は島脱汝等は間拔。眼を廻はして居た内は。打ちも縛りも爲居らいで。些の船木を探りに来て。大切の生命を棄るとは。阿房奴馬鹿奴と罵りかへし。對手撰ばず投げ付け踏み据え。中でも奇麗な襦袢を剥ぎ取り。獄牢で汚れた古着を着替へ。二人で徹宵し途を急ぎ。細谷と云ふ處から。一人に成つて街道を。乞食の姿で久し振り。津の國にこそ着にけれ。此處で中入其れからは。話はまた〜澤山ある。「私とても御前の事。氣の毒で成らぬ故。無事では歸る此上



は。親達にも打ち明けて。女房に成つて精一杯。眞實を盡くさうと。思ふに甲斐なきながしもの。云ひ出しても出来ぬと。心で泣いて居る中に。「いや旨く云ふ奴さ。己等が寺の門前の。鹽大福より己には不味。」「まア黙つて聞いておいで。最前も云ふ通り。彼の山家でも破船の噂。彼の大日の運の悪さ。折角お慈悲で助かつた。魚に命を放捨して。此世の夢も鯨島と輕口交りの人の話した。可笑い處かがつかりと。力も落ちて氣は重く。さり泣いて居てもつまらず。盜賊の慰物に。成つたと近所で云はれるのが。何程にも耻かしく。宜い連が有つた故。氣をぬき勝手な京參るり。大阪迄も見物の。其内に世話をやく。人が有つて此處へ奉公。お前が健全で居るとは知らず。心に染まねど身の出世。親の爲にも成る事と。勤する氣で頑固な。老人の機嫌を取る。其の苦痛さは口にも云はれず。」「苦勞氣兼をする故か。大分ふけたが何處やらに。稚氣やうで悪くない。眉毛をつけて白齒で置くと。梅ヶ枝より若く見えよう。」「おやいやよ嘘ばかり其んなら。お前の来る晩は。ひき眉をして前髪に。赤い切でも掛けませう。」「それこそ眞こに化けのかいさん。音羽屋が薄雲の。幽霊のやうなれど。お化序で見せて置く。今爲樂寺の住寺と成つたも。眼の前奇特を現はして。人に信をは取らす故。過去を指し未來を當てる。神變不思議も徒では出来ぬ。其原因は外でもない。此を見やれと袖口を。廣ぐれば環は覗いて。」「あれ狐がと膽を潰し。」「お前はまア飛んだものを。懐ろに容れて来て。」「此れが手品の種だもの

を。」「厭もう浮か／＼傍へも寄られぬ。疎ましや／＼と。氣味悪るければ打ち笑ひ。」「最う見たくても見えはせぬ。」「いえ／＼まだ合點が行かぬと。躰を探れど影もなし。」「眞に何處へか。」「其れは重狐の明神を。遣ふにも又一つのお話あり。尤も初め經讀みに。此處へ来て汝に會ひ。早や其の時から他心。ある様子は此明神の。告たので疾うに知り。今宵態々来る程なれば。何事も隠さず語り。頼んで置きたい仔細もあるのさ。諸之れからが今の續き。彼の時洞仙に別れてから。二泊めの日暮れかた。初雪が澤山降り。堪らぬ寒さもつけ元氣。酒に紛れてすた／＼行く。野池と云ふ大池の。有る端に四五疋の。大きな犬に十五六の。奇麗な娘が取繞かれ。聲を限りに泣いて居る。」「諸も／＼可愛想。女と云へば見ず知らずでも。直き不憫なのむごいのと。」「そう焼き度ば梅田の火屋の。おん坊にでもなれば宜い。」「縁起でもない。處で娘は追ひつめられ。周章て、池へのめり込む。己は十足を一ト足と。駈け寄つて犬を追ひ除け。漸の事で引上げて。性根のつかぬを色々介抱。己れも昨日は此通。人の事でもないと思へば。懇ろに痛はつて。印籠の藥を與へ。片方には枯草集め。焼き火をして暖め遣れば。存外に丈夫になり。涙を車して嬉がり。何を隠そう私しは。人間では御座りませぬ。攝津の國大仁村の。爲樂寺と云ふ寺に。久して棲古狐。此の國の豊川の。友達に合ひに来て。思ひ寄らぬ此災難。年も老れば神通も。餘程得たれど寒さも寒く。持病に苦しむ其所へ。土地に名高き逸物の。彼の尤どもに見



込まれて。通力も失せ果て。旅路の雪と消る計り。危ふき生命をおん助。被下た御恩は海山。お禮の致し様がない。厭さへ成さらずば。貴殿の袖に隠棲み。我が通力の及ぶ丈は。世の人の過去未來。人の心の善悪邪正。仕合せの良否迄。其時〱に告げ申さん。之れを以つて修し得たる。佛道の奇特と云做し。人に施し給ひなば。瞬時ひまにおん身發達。朝日の登る如くならん。之れより爲樂寺へお伴して。彼處にて先づ不思議を現はし。住職に舌を卷すべし。さらば御身今より出家し。彼の地へお在ませ。此はしたり何時の間にか。讀本を讀むやうな。言葉つきになつて來た。斯いふ所は此はうが。うつりもよく分りも宜い。所で己も驚きながら。まア何にしる旨い相談。全體己れも大阪には。道樂も爲て居たもの。其爲樂寺は遍照丸が。まよけの時居たさうだ。渡世の爲でも其所へ行き。坊主になるも變はつた縁。何れ姿は變ねばなれず。面白ろし〱。随分出世をさせて呉りや。承知を爲たといふと其儘。娘は狐の姿になり。消えたと思へば左の袖。少し重い様になる。探つて見れば物はなし。左様かと思へば時折節。烟の様に形も見える。さア其からは何事も。奇妙不思議に克く分る。志めたものだと頭を丸め。鼠衣に破れ下駄。古着を購つて引つばつて。見れば尊お僧さま。諸國修業の旅僧で御座ると。彼の爲樂寺へ潜り込み。何か用にも立つものど。通照丸に教はつて。浄土宗一ト通の。經文は似つゝらしう間に合せ。折々不思議を見せかけると。先きの住僧は正直もの。生佛の御來光と。

檀はうちゆうへ觸れ歩く。其りや難有拜みたいと。來る程に〱。十念お加持が初まりで。縁談待ち人世柄の善悪。何でも御座れた引受けて。其れ〱にこなして居れば。當らぬもまゝあれど。其節は過去の因縁。未だ信仰の足らぬなどと。欺瞞すの骨は折れず。流行出しては流石は大坂。持ち込む程に〱。泥棒よりも面白く。まア氣の張ぬで一入保養。其中に住職は死ぬ。檀はう中が後しきは。不足であらうが是非にと云ふ。殊勝らしく辭退して。ぬく〱占めた後住の上人。人眼もあれば人品を。作つて滅多な身もちも成らず。甘い者は食ひ饜きても。最う一味の生物を。久しく食はぬは有財餓鬼。其餓鬼の爲めお施餓鬼を。今宵私とするのかへ。其れもよいが明神を。使ふと聞いては何うも不氣味。而して女の狐なら。若しや腹でも立たれては。何の〱男狐。女に化けたは見場の宜い爲め。御遠慮は決して無用。いや未だ話は残れども。此續は明晩々々。些と休まうと戯れて。暫らく打臥し休らひしが。假妖狐の術ありて。人の眼を眩ますとも。夜の明けては憚かりあればや。曉に及びて歸り行きしが。二日計り隔きて。大仁坊又來りぬ。今宵は些さか酒打ち飲み。最ど興を催しつゝ。寐物語に又言ふ様。「先きの夜語らふ事ありと。云ひし儘にて未だ語らず。此は吾恩人諏訪洞仙。些か報酬ひをせん迎なり。彼の洞仙は其後に。曳間の老臣佐々木現太左衛門と云ふを。秋葉山の奥に誘ひ。殺害して物のみならず。殿の墨付印判など迄。奪ひて自ら佐々木と名乗り。京へ上りて掛屋を欺罔。



都に雲時逗留せしに。佐々木の若黨見つけ出だし。己に刃傷にも及びしかば。此處にも足を止め難く。丹波路へ立越へ。野瀬の妙見山に隠れ。此處に寨を營なまんとせしに。手下の中に心變り。するものありて事調はず。剩へ音川家の。討手に山を追ひ出だされて。手下も大半撃殺され。猪名川の川上の。屏風岩まで追ひ詰められ。己に危ふき折もよく。我れ彼の邊を修業の道。早や日も暮れて薄暗き。松の木影に大勢を敵手に鬪ふ洞九郎。微傷に紅葉を散らし。緑りの松を小楯に取り。波のうち物閃めかす。太刀筋も稍亂れし有様。見るに些ども躊躇ず。群集る組子の横合より。錫杖に仕込たる。槍取り延べて突かくる。左れども敵は大勢なり。前後左右を我れも亦。打ち圍まれて洞九郎。救ひ出さん隙間もなく。殆ど難義の折りしもあれ。現はれ出でたる美貌き女。咲亂れたる花の枝。左右の手に打ち振つて。組子を切りに打ち惱す。其度々に雪と散る。花より清き乙女の姿に。見惚れて敵は浮々と。勢ひ弱りて見ゆるを付け込み。二人は散々に切り散す。此は敵はじと色めきて。潰れ立つたる組子等を。片岸より川中へ。投げ込み。今は早や心易し。心の儘に落ち給へど。云ふかと思へば姿は消え失せ。彼方此方に閃めき出づる。夥多の狐火宵暗を。照して夜道も眞晝の如し。此れも確に明神の。助と嬉しく其由を。洞九郎にも委しく語り。其れより竊かに爲樂寺に。伴なひ歸りて忍ばせ置き。我は信仰淺からぬ。爲樂寺の一旦那。尼ヶ崎の城主。荒木村之助殿へ推舉し。東國にて竊み置ける。

系圖を證據に何某の。家に仕へし浪人と披露し。劍術醫道に柔術を兼ね。金創即治の奇方なり。破傷風をも救ふべき。靈藥もありなどと云ひたて。或時は例の不思議。見せて城主を欺かる上に。彼奴も固より懸河の辯舌。復なきものと心に慍ひ。新知二百貫に有付しなり。山賊よりは骨こそ折れ。又晝日中槍を振らせ。城下を行列さすものも。氣が變はつてよいと云ふ。最も佐々木倅あり。幻之助とてまた弱冠。母ともにも國を出で。此の邊に足を止め。洞仙を尋ねる様子。例へ廻り會ふたりとも。刃はたゝねとも彼奴も惡漢。手に餘つて騒ぎに及べは。蟻の穴から塊潰れ。所には事なかれと云へば。去る頃思はず有馬にて。見掛たるは彼等親子。所願の早く成就するや。否やと問ひしを楮はと思ひ。急ぐな延せと誡め。置き。其後寒中の。修行の道にて幻之助。今の在家も知つたれば。再度まで忍ひ來り。欺し討にせんとせしに。障出で來て本意を達せず。兎角するまに其家には。幻之助は住まずなり。餘の人が移つりたれば。他所ながら行衛を問ふに。西國へ旅立し。様子なりと臆ろげなる。答へのみに尋ね難く。如何なるとか彼奴等が。身の上計りは明神の。通力にも及ばぬよし。然れど彼は長柄の長者の。娘と親の結縁け。遂にはたよりて來るとあらん。其の時にこそ兎も角も。計らふべしと慥かな諭し。彼奴等尋ね來りなば。如何にして留め置き。毒害がして貰ひたし。小さき壺を環に渡し。光明山に居た時から。逞ましい根性の。女とは克く知れり。愈々我れに親切を。盡すとならば一



臂打りして見給へ。萬一事の破れなば。此家の金銀財寶は有りたけ。持出して逃げるぶん。又此等の事長者に告げ。領主へ懇へ出づる様な。氣まづい心の萌なば。最う此方でも明神が。知らせでつゝ抜け知るゝ故。細い腕も美しい。首も膾に切り刻み。弄り殺しにする計りと。云ふに環も呆れながら。頭こそ丸めたれ。清げに太りて剛健に。悪げのない姿形に。思ひ込みては云ふとも。道理の様に聞き做れ。誓言立て承諾きけるは。淺猿しき心ながら。又逃る可き勢ひにもあらず。是より有馬の湯場の物語に續き。名鹽村にて事のありし。其由を書きまゐるさん。然れば環と大仁坊。忍び會ふは二月の事にて。爰は其前の年。九月の末より十月に及べり。十三郎は伯母の手を引き。櫻木お蔦は前後に立ち。夜闌けて湯山の町に歸り。角の坊に枕は結へど。猶も盡せぬ物語に。睡りも遣らず秋の夜も。程なく烏の鳴くに至りぬ。十三郎は名鹽に歸らず。纏て浪花へ赴きて。幻之助の消息を伺ひ。渚も此所に唯一人宿。取り居るとも益なき事と。櫻木等に勧められ。名鹽村へ誘はれぬ。松原朔左衛門と云へるは。七十近き老人なり。製作ける名物の。紙に卵の艶はあれど。皺延されぬ老の波。起居は今も健剛にて秋の夜永く寐られぬば。疾より起きて近からぬ。三田の町へ注文の。日限の過れし。紙の荷を。自ら脊負ひて出で行きし。留守には一人。孫の與之吉。雙親の無き孤子は。年より増して成人しく。年は僅に九ツか。十のねふりの寶船。三十日の書出し取交せたる。反古を一所に切りさくも。水に浸すも

習ふより。慣れ慣れ爲すをおはぐろと。見する子守の小娘が。日向暖りの出居の口。「與之さん仕事は最う止めて。東土産の錦畫を。宜い物上げう見せさんせト。云ふに與之吉手を止め。「宜い物は欲しうないが。祖父様が今にお歸り。圍爐裡の櫓の克く燃る様にして。克く茶を沸してお呉れたら。幾許も見せう。仕事も今に一きり段落になるト。子守娘に火を焼かせ。仕事片寄せ文庫から。取り出したる錦畫は。今様源氏太平記。唐の大和の武者盡し。其れよ之れよと見る中に。茶釜はぢいと沸騰れとも。祖父は歸らで櫻木が。伯母を伴ひ入り來り。「伯父さんはへ。「三田へ行つて。「其んなら一人でお留守番か。「其れはまアおとなしい。「最うお晝故お茶も今。沸した所と茶碗を取れば。「構はしやんすな私が汲む。火傷させては言譯なしと。山茶を渚に響應て。與之さん此れは私の伯母さま。十三さんは大坂へ。急な用で行かした。歸りのお土産は何である。「錦繪が一番よい。「錦繪は東のと。伯父さま之をお覽じませ。豊國は七十に。近いと申すが此繪の若さ。貞秀も軍は上手。慥なもので御座ります。與之さん今一方を。「此繪かへ。此れ備後の三郎高德。櫻の木に文字を書いてト。一字／＼のつゝじり讀みも。分ると見えて。時に范蠡無きにしもあらずとは。何のとか私は分らぬ。是れは武松。是れは張飛。笠を蒙つた坊様が。熊谷の次郎直實。私しや熊谷が一番最負。お娘様は力が強ふて。松抜いて居る巴御前。「私は其れ程力はない。備後の三郎が側にある。その櫻木ぢやと打ち笑ふ。折しも門先



喧囂と。人の音して歸り來る。此家の主人作左衛門。後に四五人村人が。戸板に乗せたる人の死骸。庭に身き入れ下に置けば。「皆の衆御大儀々々々。這入て茶など烟草など。」否最う繁忙い收獲時。「骨折賃は彼方で濟む。」此儘で歸りませう。「引請人が有つたので。此方の村も厄介逃れ。やれ〜嬉しや南無阿彌陀。やれ〜笑止や南無阿彌陀ト。日々噤舌て歸り行く。」をうお嬢様も歸らつしやつたか。十三様は何方に御座る。而して彼の後家様は。「あい初めから話さぬと。判然まいが此方は。遠州の私の伯母様。十三様は大坂へ。今に何かの話もせう。其れよりは其死骸。まア何處の人ぢやへと。氣味悪るさうに額に皺。「飛んだものを引き込んだと。お思のしやろうが是飛がない。兼て御話し申しました。十年以前土産神の。祭に人と喧嘩して。多勢に傷を負け。身を隠くして其後は。音訪れもせぬ養子息子。妹娘おはだが夫。與之吉の爺親の。作五郎が身の成る果て。淺猿しい者に成りました。お幡奴は此佛と。中の良いに娶せて。三年目に漸と懷妊。彼の與之吉を設けたは。作五郎が家出の後生れぬ以前の父を慕ふ。賢過ぎた與之吉が親と知つたら泣ませう。黙て置いて下さりませ。「其れはまア飛んだと。何處に何うして何ういふ譯で。「まア聞いて下さりませ。三田の町から歸り掛け。鹽田川の土橋を越すとき。多勢の人群集り。何かと見れば此死骸。亂杭に掛つて居る。縁きでもないものと。思ひながらも盡きぬ縁。虫が知らせて見たくて成らず。岩の端まで下りて行き。熟々見れば何うも見えぬ顔。

水にも澎れる左なくとも。十年から離れて居れば。何うも分らぬ筈なれど。身軀に似合ず此爺が。強いものはめかどばかり。何うみても作五郎と。思はるゝ故見棄も成らず。何ぞ確かな證據でもど。襟に掛けた守り袋。開いて見れば村の土産神。木の下の八幡様の。お札が一枚色々の。中に交つて有るからは。最う疑ひは御座りませぬ。此川上は有馬川。無理に死んだか落たのか。又は人に殺されたか。何にもせい人なみの。吊ひは爲し遣り度。昇せて來たので御座ります。一根性ある奴丈。孝行にもして呉れました。況して可愛い娘の夫。哀うて々々成りませぬ。お幡も近頃死んだも増しか。生て居て此様な。死骸を見たら充分に。泣いて矢つ張死ませう。肝益も無い繰り言ばかり。お客様御免成さりませ。與之吉より留守をした。土産には飛んだもの。持て來た代り。お前の好きな赤飯でも。ふかさにや成るまい而して又。寺へも一寸お庄屋様へも。同業へもいや一ち時に。世話しう成つたト朔左衛門は。立つたり居たり與之吉は。死骸を覗き。「死んだ人は。何よりも恐うて成らねど。父様ぢやと聞いたれば。穢なくも恐はくも無くて懐かしい。而して滅多に哀しう成つて。此様に涙が出る。「此れはしたり父ではない。「否々最う聞きました。泣が悪いで隠すのなら。私しも男ぢや泣はせぬ。成人しう編笠着て施主に立つ。成らう事なら蘇生り。與之吉と唯た一言。言ふて聞せて下さりませ。最初の芋で親が無いと。友達が仇名をつけ。卑すむのが何より悔しい。父様イのう父様と。縋るを櫻木抱き



除け。「子の泣く涙は火と爲つて。死出の山に雨と降る。泣くは不孝賢こい子ぢや。此方へお出  
ト宥しつゝ。死骸を一目見て喚驚り。「伯母様私しは何とせう。此死骸は源五平。御亭主の辭  
の端。有馬川の耳に掛り。何うも合點が行かなんだ。「其んなら昨夕蚯蚓ヶ瀧から。投げ込みや  
つたのが早や瀬を越し。「流れ寄つたる鹽田川。其れが此家の縁者とはト。顔見合せて呆るゝ二  
人。朔左衛門は膝すりよせ。貴女方には此死骸。御案内で御座りますか。否さ若し御存じで。  
御座りますかト押し返へされて。櫻木は包にも包まれません。「知つて居るだんかいの。而かも私が  
殺したと云へば喚驚り朔左衛門。晴眼すはりて仰反りかへり。雲時物も云ひやらず。「大事の大  
事の父様を。お嬢様が殺したと。其んなら私には親の敵。旦那様でも常日頃。不憫がつて下  
さつても。私や堪忍を爲ませぬ程に。お覺悟成されと紙斷庖丁。取つて向へば。「あゝ危険い。  
静かにせいと隔つる爺を。突き除け向う與之吉が。小腕そつと押し留め。「武士にも及ばぬ健氣  
さに。感じて私しは自由に成り。殺ろされて遣るわいな。殺したと云ふからは。逃げもせぬ隠  
れもせぬ。併子細も語いで。此儘にも死なれまい。固より此所の因縁とは。夢にも知らう様は  
なし。殊に手詰の彼の始末。「さア此渚が何事も。話さう程に朔左衛門。其子も共々心を落ちつ  
けて。聽いて怨みを晴して給へ。此者は我が下人作五郎と云ふたか知らず。人に傷つけ立ち除  
いた杯とは云はねど。上方に居たるものとは聞いて居る。勿論久しく召し使ひ。若黨の源五平

とて。今の世には珍らしいと。賞て居た忠義もの。其れが魔にでも魅れたか。色に迷うて悪心  
を。起したので遂ひ此様な。事に成つたと委曲かに。有りし次第を物語り。「死んだものに口は  
なし。人の養子を殺ろしておいて。却つて充分が悪者ど。嘘ついて身を遁れやうと。する者で  
あらうと。何處までも疑はしやるなら。何の様に私の身を。切り呵責み。生先長き答の櫻木。  
正可の時には世の中の。爲にもなるべき彼の大力。母親譲りで力の強い。子を生む迄はむご  
くと。殺さするは惜しいもの。よう聞き分けて下されど。涙にくるゝ渚の實意。櫻木は頭を  
振り。「殺した私が助かつて。願ある身の伯母さまの。身軀に傷をつけさせて。見て居られるも  
のかいな。不忠不義の家來をば。主筋のものが殺した敵を。取らるゝ法はなければども。唯中よ  
しの此坊が。親の敵と力の強い。私しを畏れず斬り込んだ。心根が可愛さに。死なうと思ふも  
此氣質。代りで濟なら私しも死なぬ。伯母さまも殺させぬと。渚を庇へば朔左衛門。「貴女等の  
お物語り。何の嘘と思ひませふ。假令がしお二人が。悪いにしても外ならぬ。大切な御主人様。  
お怨み申さう道理はなし。やい坊や與之吉やお話を聞いて居たか。我りやしくくと泣いて居  
るな。最もぢや。父は飛んだ悪棍で。お手打にあつたのぢや。敵撃所ぢやない。お主様へ  
父が悪事。汝が失禮申たも。お詫申さにや濟ぬぞよ。魔が魅さうとも日來の忠義。忘れて死耻  
かく様な。不所存ものゝ落胤。其與之吉は此様に。猶孝行には生れたト。涙呑み込み大息繼げ



は、「祖父様も泣しやりますな。私も此限り泣きませぬ。お怨みも申せぬが。お嬢様も。祖父様も。平常のお話に。親を殺した敵とは。俱に天を戴かぬとて。同一世界に住まぬのが。孝行者と仰しやれば。其では私が死ねばならず。自分で死ぬのは痛けれど。殺して貰へば其れも良いが。此上私も死んだなら。お前が心細からうと。死ぬ先きから苦勞で成らぬト。言ひつゝ、確と手を打ちて。「よい事が御座ります。幾度も讀むで知つて居る。此錦繪は晋の豫讓。お主が敵が打たれぬ故。仇人の着物を刀で破り。かたきうちを濟したげな。豫讓の豫の字と與之吉の。よの字と異はつて居やうとも。晋の豫讓の眞似をして。備後の三郎高德の。傍に書いたる錦繪の。櫻は私ぢやと仰しやつたれば。勿體なけれど此繪をば。切りこまざいて仇打を。濟せませうト庖丁もて。三ツ四ツ五ツに切りさきく。「之れで心が濟ました。お嬢様父さんも。私も澤山悪るかつた。御免被成て何日迄も。可愛がつて下さりませと。頭を疊に擦り付けつゝ。猶目をすりて泣く顔を見るに渚も櫻木も。偕も賢い幼子の。心の中の不憫やと。云ひつゝ共に咽せかへり。生命を惜むに非ざれど。十三さんも留守にはあり。伯母様もお助太刀も。爲て上ねば成らぬ故。先當分は錦繪の。櫻で意趣も散してお呉れ。撃れる時節の來るならばト。實盛の繪を取り上げて。鬚鬚を墨に染め。若やいで義の爲めに。てづかに首を取らせた例し。「否々最早敵打の濟だ。後では怨みけ残らぬ。一番最負な熊谷直實。此の通に私くしは。坊様になり親の爲

め。出家を爲たいと慕るれば。「何にも云ふて下さんすな。私は胸が張りさける。「何故此様に譯のよく。賢いにも程かある。不憫のものやと櫻木も。渚も互に引き寄せて。撫でつ擦りつ痛はれば。「でかしたし與之吉うい奴ぢや。お二人様が其様に。いとしがつて下さるは。冥加に叶ふと云ふものぢやと。飽迄譯よき老人の。心を酌ば憐らしく。渚は殊に老人の。涙脆く我が身の上の。憂をも添へて幾世の悲歎。固より貧しき朔左衛門。久しく二人の寄留人に。入費も多ければ。今差當りて葬式の。手當にさへも當惑の。氣色を見て取り貯はへの。金を頒ちて強て與へ。懇ろに葬りの。爲もせさせて其後は。此處に暫時逗留しつ。十三郎は彼の次々の日。歸り來り幻之助の。行衛かいくれ知れずと云ふに。渚は力も落れども。事にも逢はれ取り沙汰あらん。左もなきは猶ほ持みありと。強て心を慰めけり。又或日十三郎。行者堂に詣でつゝ。角の坊に立寄りけるに。お蔭は顔も出さねば。如何に爲つると訊ひ聞くに。四五日先きお客様の。使に出たる儘にして。親里にも確かに居ず。何處へ行きしか行方知れず。男などを拵らへて。逃た様子はなけれども。矢つ張り其んな事かも知れず。又神かくしに逢たのか。親方の運の悪さ。お蔭が見えぬ四五日先き。尼ヶ崎のお方だやとて。石川芥膳様とか云ふ。お立派な殿様が。一ト廻りの御保養湯。お蔭が大層お氣に入り。侍女に使ひたいと。お金も餘程下さる様子。其れを彼の子も厭がるのは。此家でも惜みてすげない挨拶。石川様は御不機嫌。彼の時遣つて仕



舞たら。彼の子も出世此方でも。割のよい賣りものと。今では悔むで居られますと。語るを聞いて十三郎。我外に窃に契る。人はあらじと思ふもうぬぼめ。まだく深い男の有つて。連れて逃げたか何にもせよ。我とても創もつ足。口敷きいて疑ひをも。受けもやせんと匆々に。名鹽村に歸りしが。櫻木が心を盡す。深切に紛れつゝも。折々お蔭も戀しくなり。もし神かくしに逢たるか。悪棍に誘拐されしか。如何に成りしと思ふ時は。いとせめて物思はし。さり迎人に言れもせず。朔右衛門の手助け。板に張り掛け乾上ぐる。紙に思はぬ涙の落ちて。抄き厚薄ならぬ水玉を。捨らへる日も多かりけり。事こそ異れ物案じに。渚も兎角心地勝れず。氣も晴るかど窓開けて。見遣れる梢も何日しかに。焦れ初つゝ秋果つる。廿日の山の淋さに。有明の月は。誰と見るらん匡房卿の古歌をさへ。思ひ出して哀れを添ふれば。實に早や冬の日も重なり。砌の菊も霜に染み。二度の盛は物佗し。只櫻木の面影のみ。雨にも霜にも變らねど。貧しき暮しを見兼ては。仕慣れぬ水仕の爲事に。指のあかより血を含み。爪紅と見ゆるものつらし。去る程に或日の朝。與之吉不思議の夢を見たりと。朔左衛門に語る様。何日もの様にお祖父様が。紙に抄く槽に向ひ。簀を持つて居やしやる所へ。住吉へ奉公に。行つていやしやる伯父様が。悠々這入て来て。お祖父さんを突き顛かすと。祖父さんは忽ちに。紙に化て水の中に。浮いて御座るをお嬢様か。簀を持つて掬ひ上げて。板に張り日に干さしやると。正しく夢に見たが。

何ぢややら氣に掛るではないかへト。語れば打笑み朔左衛門。「住吉の伯父と云ふは。安立町の藥屋に。三年以來奉公する。作兵衛の事であらう。死んだ女房の彼れは連子。義理の有る子とあまやかし。手に餘つて勘當に。及ぶ處を人の世話で。此度は不思議に足掛三ヶ年。よいがよいに立つても無ければ。苦勞の絶えぬ不孝もの。夢は逆夢已れよりは。彼奴がどんぶらと。川へでも落ちて死ぬか。板より柱へ磔けつれて。仕舞たら結句安心。氣の狭い夢などを。氣に掛る者ではない。否々左様でも御座るまい。己に古く言傳へ。日本紀にも有る通り柘植野の鹿の物語りを。鹿の背中に霜が降りしと。見たれば翌朝其の鹿を獵夫が射殺して。身軀に鹽を塗つたどやう。誠しからぬ話なれど。夢合せと云ふとは。唐にも古く此方にも。太古より儘あると。慎むに如はなし。川端などへは注意で。よらしやらぬが宜う御座るト。十三郎は老實ちて。言ひ聞かせ居る處へ。里正より使のもの。蒐來りて急用事。其の儘御座れ猶豫はならぬ。早うくと連れ行きしが。日暮に及べど朔左衛門の。歸宅ぬに各々は。如何なる事の起りたるかと。心を痛むる折からに。又使の者入り來り。十三郎をも連れ行きつ。十三郎は里正の。縁先に蹲づき。何事ならんと伺かへば。尼ヶ崎の役人と。告名もの五六人。晴れがましく列び居て。里正より取次きて。十三郎に由を傳ふ。十三郎謹んで聞けば。「住吉安立町の木藥屋。召使ひ作兵衛と云ふもの。廣田の社の松原にて。後家瘤を殺害し。其れのみならず尼ヶ崎の。走り使ひを脅



かし。買物の小金五十兩。奪ひ取つた罪科によつて。神崎の遊所に於て。組み子を遣はし召捕つたり。金子も既に賭博と。酒食に殘らず費したるよし。其の外凡て口づから。白狀致す上からは。主殺しの例に任せ。刑罰既に定まつたり。子の罪科親とて逃れなければ。朔左衛門も喚び上げて。掟の如く禁獄せり。然れども久しく遠くに隔たり。萬事を知らぬと云ふも道理。故に格別のおん慈悲を以て。城主の用金五十兩。近親の者より辨へて。差出さば朔左衛門。枉げて赦免ある可きなり。其金の調ふまでは水牢に入れ置くべし。片時も早く持參せよと。横柄に吩咐られ。十三郎は呆れかへり。其儘歸りて人々に。此由を告げ知らせ。偕も怪しく與之吉が。昨夜の夢の命申きて。紙漉槽と見たのは水牢。老人と云ひ此寒む空。二日とは有まいと。歎けど賄なふ金もなし。渚は豫ねて貯はへの。其れ程は無きにもあらず。疾く持ち行きて救へと云ふを。櫻木は押留め。「伯母様の貯はへを。手拂しては此上に。何を力に行く先き知れぬ。長の旅を成されます。「夫ぢやと云ふて惡漢なれど。源五平を殺した我々。不足な顔は些ともせず。愈々實意を盡す翁。見殺しにせらるゝものか。「其れは此の櫻木が。伯母さまよりは一倍せつない。十三さん。お前にも男なら思ひ切り。妾に暇を下さんせ。傾城遊女に身を賣つて。「左様させては石倉氏へ。愈々向くる顔がない。「お罵さんは行方知れず。お前も寂しうあるけれど。世の義理は是非がない。國許の親様へ。立つの立たぬの道だてが。此處へ出るものかいな。母上

様も元を云へば。鏡の宿の留女。異母のお姉様の。お紺様も茶汲女に。賣られて初めは賤しい勤め。妾達は克く〜に。過世拙なく女の道の。守られぬのでムりませうと。打笑へども泣くよりも。哀しき色は目元に見ゆ。十三郎も承諾きて。さらば小矢野か神崎か。何れの廓の良からんなど。語り合ひ居る程にも。立ちかはり入り代り。見舞に群れ来る近傍の人々。中にも賢しき太平次が。此事を漏れ聞きて。「否宜い事が御座ります。遊女に成るより又一倍。顔を曝すは悔しい様なが。身を汚さぬが一つ取りえ。昨日有馬へ商賣に。いんで呼ばれた座敷の客は。難波新地の見物師。大力の女が有らば。力持が出したいもの。心當りはないかと云ふ。最う其時にお嬢様の事は。心について居ても。迎も出来ぬ相談と。黙つて歸へつて來ました。御器量なり力なり。見物には勿躰なけれど。出したら屹と大金の。儲かるは袋の鼠。忠義と孝とで身を賣るは。世間には珍らしからず。家來の爲にお主の身賣り。之れは随分新手らしい。お行り成さるお心なら。其客を連れて來て。御相談させませうかと。云ふに櫻木思案を定め。「如何に卑賤世渡も。心に染ぬ仇枕。夜毎に異なる苦界には。遙かに勝ると胸を据ゑられ。實に道理と十三郎。渚も是非なく同心し。其れより山師を呼び寄せて。櫻木は庭石を。跳ね起しつゝ手球につかひ。又紙漉く槽を持ち出し。細き腕に持ち上ぐれど。湛へたる水少しも注れず。是を見る見物師は。舌を吐いて恐入り。二年を限り五十兩。速かに相談調ひ。櫻木は大阪へ伴はれ。



朔左衛門は牢より出しが。此由を聞き泣き哀しみ。明日をも知れぬ老いの身の。助かる爲に御主人様に。耻辱を與へてあめくど。此世に存命へ居らるべき。お慈悲過ぎて怨めしいと。水にも沈み梁りにも。掛りて死なん様なりしが。十三郎と渚に叱られ。孫にも心牽かれて。勢ひ抜くれば身も弱り。暫の牢舎も老人の身に中りてや病續け。春迄枕得も上げずなりにき。

攝津の卷四編終

邯鄂諸國物語

攝津の卷五編

是は諸越金々山の麓楊子の里に高鳳と申す民に  
はあらねど一夜不測の夢を見つ歌人俳諧師の夢  
想の吟咏は奇しからず戯作者には思ひもつかぬ  
皇國學の大人のやうな語釋を夢にしたりしなり  
皆人小癩に障たまふな周遍晋など書あまねく  
と云ふ語の意あまねくはあまりなくにてりは畧  
かれねとなは通用何事も餘なく行はると釋べ  
しと語ると見て夢覺ぬ既に先達のいはれし事歟  
邯鄂の序は夢話に定まるやうになりたれば夢中







りなば。傍の見る眼も耐え難く。身も世もあらぬ妾の苦勞。察して萬づ手都合の。合ぬも然る可き定なりと。御心廣く神佛。信じて時を待ち給ひ。先づ何事も打捨て。灸を點たり藥投ひ。自昧に丈夫をつけ給へ。何時迄此處に居するとも。御不自由をさせ間敷。又這の様に深くなり。一日も餘所へは遣度無いと。色艶もなき實意の言葉に。幻之助も心軟り。實に夫も道理なり。實際足もふらめきて。見れば腕も細たり。左あらば暫時身を休め。充分療養を調へてん。去とて何時か何時迄も。手を束て居らるまじ。始にも言ひし如く。拙けれども淨瑠璃ぶし。所望客のあらんときは。物隔にて聞す可し。保養にもなり聊の。會釋も坐して喰ふに増んど。先づ一二段試に。語りて人に聞するに。普通の太夫と云ふ。賣人よりは聲も善く。節も細に言葉つき片言なければ。聞人感じ。幾代は殊更心を搖し。一向戀慕の思を増し。障り無き客を見立て一兩度も語らするに。誰もく愛で興じ。物數多恵ければ。思の外の徳を得つ。最とく拙なき仕業なれど。幾代の少しは吾を貢ぐ。苦勞の薄くもなるべしと。耻しさも忘れたるなり。或時阿波の鳴戸の。順禮うたの段を望れ。語りはて。席を退き。遽に脚絆よ甲掛よと。旅び装ひをする様に。幾代は驚き不審ば。それと此とは異なれど。十をやそこの小娘さへ。別れし二親戀ひ慕ひ。阿波の國より百里も。隔たる京浪花へも尋ね來る。云ふに云はれぬ譯あつて。母人を有馬に置き。吾のみ這地の假臥も。早や二廻の月も見る。程は雲井のよそにもあらず。國

もかわらで遠からぬ。山中に捨て置きたるは。更らに子たる道にあらず。假令ば母の吾を疎み悪き物に思すとも。餘所ながらも御有様。伺はねは不孝なり。斯云へば氣拙けれども。切なる其方の情に絆され。うかくと送る此日頃。未來の父にも現在の。母上にも云ひ譯なし。とは云へ其方に別る。心。露計もあらざれば。悪くな思ひ取り給ひぞと。唯立歸るゆやまの町迄。行て其儘歸る可し。大切の品を納たる包。讓の大小をも預け置けば。安堵して待給へと。信實て暇を告げるに。幾代も強ては止め得ず。善は急げと云ふ事あり。夜の嵐も頼れず。疾く行き疾歸り給へと。心に數々思ひても。女々敷愚痴を謂ぬ氣質に。悪疾たる様も見せず。去とて暫時の別も強く。涙流れて瀧縞の。小袖につながぬ玉は散せと。さし込む瘡を石垣絞の。伊達巻に締て出發には。笑顔造を見顧男も。網代笠に泣く目を隠せと。張裂く胸の紐卸掛。雨は降ねど合羽は濡つ。稻の笹原霜に枯れ。四十八瀬も水あせて。俛變る道すがら。母上如何にましまさん。變らで居ませ千代迄と。見上る峰に色變ぬ。松もなじみの有馬山。其日の暮に到りつき。すみの坊に遠からぬ。家に立寄り餘所なから。斯様く旅人は。今も逗留ありや否やと彼坊へ問せければ。九月の下旬その日に。御立ちありと答へたり。偕てこそと胸先づ騒き。頓てすみの坊に行けば。見知る女の立ち出て。お久しや御客様。貴方は何處にあわしたる。御母様は其砌。御親類とか御縁者とか。若旦那と倚麗な娘を。鼓が瀧から御同道。夜更て一夜



御同伴に。御泊ありしが明の朝。早々に御歸り。お蔭は何かの御様子も。委う存じて居る様子私共は碌々に。御挨拶もせざりしが。御立の時には始から。御侍申た御供の御方は。大方見えぬ様なりし。又お蔭にも引き續。遁落したか神隠しだけ。何處へか行て在家知ず。居さへすれば何かの事も。別り相な者ではあり。又兎も角も貴方への。御傳言もあるべきに。云ふを聞けば機會も抜け。彌々心安からぬと。爲ん様なければ此の家に。一夜泊て夜明を待ち。急ぎ浪花へ歸りけり。幻之助若し來らば。名鹽に居るもと云ふ事を。云ひ殘さではあるまじけれど。誰も其心附ず。程を経て霜月に及び。其事を思ひ出し。十三郎は行者堂に。參詣の序を持ち。立寄斯々云ひ置くに。其御方は某の日に。態々尋ねておはしたり。再び來給ふ事有らば。確に御傳へ申さんと。云ふに十三郎も本意無思ひ。なきさも聞て悔なから。恙なき由は知れて。初めて心は落附けり。「曾根崎には只一夜も。千代と幾代の待ちわびて。幾度もくも。一代と二代を交替る。三四丁も出迎さするに。暮夕頃に歸り來る。幻之助こそ元氣もなけれ。二人の女童は雀躍し。一代か先へ知せに行は。二代は片手に笠を持ち。片手に袖に縫つ。引に引れて歩む程に。千鳥が元より幾代は驅出。「待つたはいなく。まア一寸寄しやんせ。誰も知る者はなしと。己が部屋へ誘ひ行き。「御秋様が五種飯。焚たとてよこしたのを。影膳心で殘て置た。夫さいも未だ冷きらぬに。五十年も消光心地。「邯鄲の夢ならば。粟の飯と云ふ處。ごもくと有

難し。冷めきらぬも無理はない。左も寝む相な眼附ぢやの。「昨夜はよつびて。色客が嫌な事を悪らしい。客處か座敷も無く。宵から寝て九ツの。鐘を聞ても寝られはせず。種々と思ふ程に。苦勞でならぬば遺瀨のなさに。汲置の水を浴び。濡れ單衣で高足駄。天神様へお百度を。上ると恰度鳥が鳴く。震々御前の。角を通ると怪し姿の男。塀に身を寄せ伺ふ様子。私が指出す提灯に。驚き孤鼠々々逃て行く。私も戦とこはくなり。驅出て歸て來て。夜具に纏り居ても居られず。漸と朝湯の湧きがけから。徐々這入て人心地。其利益か壯健の御顔。見て嬉いと語りつ。箱助奴ではなけれども。彼は何でも敵の肉身。「忍び入つて闇殺に。致どの金計に違はない。「氣を附けさんせ大事の身躰。「蚤にも喰せぬと云ふ奴よ。然し一夜も旅は旅。觀音様が肌附に。宿りなされたかも知れぬ。先通常着に替へて着て。御馳走にも預う。「そんならばまア一服と。吻附指出す煙管の杖で。一代をついて。「恍惚と。顔を見て居る其手間で。先へ行て火をこしらへ。鐵瓶を懸て置やと。鍵投やれば立つ一代。「一寸待たり夫あみや。二代にも同じやうに。袂より出す有馬の名物は。人形筆に挽物細工。「唐人笛かと吹ても鳴ず。「そりやけん玉と云ふ物よ。斯して受て受け得ぬ時は。酒を呑む玩遊。てまへ達は知らぬかど。幾代は上手杓ひ舉げ。「此では好な酒は呑ぬ。そして私の引手物は。「今夜緩々。「夫はくお恭むき。氣散じな夫よりは。肝要な御母様は。「されば其事され口は。聞て居れど残念千萬。有馬は疾に御出發。



誰かは知らず。御同道と。聞いた計で一言の。仰せ置さへないこの事。誰は何れ近くに居ればこの邊は離難く。去とて母の御在家も。尋ねずもに居られまい。何時やらも云ふ通り。兎角に頼は神佛。私は此から毎晩。寒の明迄垢離とつて。這幻之助は猶更に。母上と誰の行衛。知る上にも本望を。達する様に。と信心を。凝すより外はない。夫思は、女房氣で。氣で丈が水臭ひ。始から女房じや者を。扱相變らず睦ましい。少し邪魔をしませうか。おやお秋さん。最前は美味いものを。いつかな事。おうつりが立派過て那的では假令の海老で鯛。なに小魚で御座んした。此より二人は天満宮を。日頃増して祈念せしに。或夜二人の夢の内に。束帯したる貴人顯はれ。屢々。窺へは。早く住所を移すべし。幻之助も今年は厄年。手を拱きて謹むこそよけれ。早りては失策あり。春に至らば花と共に。運も開け諸願も満ん。疑ふ事なかれど。まさしく敷告給へは。覺て兩人の有難さ。次の日曾根崎の家を捨て。千鳥屋の奥にありける。隱居所を借受つ。淨瑠璃節をも語りに出でず。書を讀み茶を煮て心を澄し。徒らに月日を送りぬ。彼の大仁が彼家を。窺ひけれども便を得ず。又幻之助の身の上計りは。きつね神も察し得ぬ事。多なりしと云ひしは。全く神の御加護厚く。守らせ給ふ故にして。這の隱居所にある事など。彼方にては夢にも知らず。他國へ行しと思ひてす可し。扱て此よりは次の年に。移りて春も未だ深からず。時々は雪も降れど。月は朧に梅の梢も。白々と打霞む。如月頃になり

にけり。長柄の長者濱名左門。梅ヶ枝をつれ。猪名寺に詣でたるは這の程なり。去ば梅ヶ枝は彼所に行着。猪名寺の門前を見渡すに。夢の様に露違はねば。疎間敷も亦恐しくも。思へば念佛を唱ふるのみ。左門は數多の布施を惜まず。此處にても嚴しき。大法會を行ふに。什麼なる惡靈たりとしても佛果を得可く思はれて。佛の道の彌々尊く。塵の浮世の世に厭はしく。梅ヶ枝は何時迄も。心に込て居可くもあらねば。兄十三郎を近江より呼び返し。妾をば尼となして僅計の菴を營み。住せ給へと強ちに。乞ども。左門は承引ず。花を見れば顔美からん事を思ひ鳥の音を聞けば聲美らんを思ひ。若き内は物に従ひ。志移りやすし。近頃は佛事の續き。法事の續き。法事扱ひしげれば。自から娑婆世界。厭ふ心が出るなり。家は誰に繼するとも。おことは一旦遠江の佐々木へ縁を組みたる娘。絶て音信無き上は。變約と覺えたり。今は態々人を遣し。返事次第改めて。他へ縁附んと思ふなり。吾儘に様を變させ。事の未だ定まらぬ。先きに佐々木より迎への物。おこせたらば如何する。云ひ譯なきしぎに及ば。不孝の子となりもぞすると。云はれて梅ヶ枝泣き出し。夫を知らぬに候はねど。何を隠さん夢の内に。斯様々々の事ありて。男は一生肌觸むと。誓言を立てたれば。背きたくても背かれず。御推量あれかしと。既に自ら缺持て。島田の髻を切んとす。左門は缺奪どり。聞けば道理の様なれど。夢に思夢あり正夢あり。正夢の様なれど。思ふ事を夢に見る。思夢と云ふ者なれど。弱點に附込



み狐狸の。まじこりて見せしにこそ。彼の侍女六出とやらん。責殺されて非業に死すとも。霜右衛門夫婦も大をこそ。とりも殺さめ。和女に何の怨かある。さばかり執念もまつはらんは。靈ある物には最と似げなし。冥道にも掟あらん。理なき祟をする死魄を。主宰の放抛して。吾儘もさせ給はじ。又上も無き佛事供養。幾度も。執行ふは誰が爲。一度卒塗婆を見てさへも三悪道を永く遁れ。佛果を得ると經にも説り。今猶むつで宇宙に迷ひ。此世の人に祟とならば佛の教は偽なり。斯近も云ひ聞するを。猶疑はしく思ふとならば。此の由を割口説き。位牌に向ひ問ひ究め。左でも猶祟なじは。此の左門と和女の夢に。再び顯はれ返答せよと。確に推究するこそよけれ。斯て正しき夢を見ば。如何ともなりぬべし。其さた無ば世にいはゆる。五臓の煩ひ取に足ず。事は違へど唐土の。魏の國鄂の里に。川の神に嫁入を。爲ると云ふ習はし有り。年毎に美き娘を。川に沈て犠牲となし。魚の腹を肥すなり。嫁入の揃へとて。其女の親は更なり村内より金銀を集め。此の事を取り扱ふ。村長だつもの、神子巫女。集たる金銀の内。一分を供物の料に當て。厳しき祭はすれど。残の九分は掛りのもの。己々の徳分とす。世に甚しき僻言なれど。此事をせざる時は。川の水神祟をなし。所のつふれに及ぶとて。是非なく惜き娘をすて。あたら金銭取らるゝは。嘆はしき事ならずや。此所に西門豹といふ賢きもの。此所の代官となり。此の事を留めんと。其日に及び。理をせめ川の神に云ひ諭し。斯ても彌々犠牲を。

與へずば此時に。災するか其返答。汝等問て來れよと。神子の弟子を川へ沈め。暫時して又曰く。未だ返事をせぬは不審。今一人行べしと。又巫を投げ込つ。後には村長だつ者をも。使に行けどひつかつがれ。此祭に關係ものども。各々大地に平伏。血の涙を流し謝り入り。此嫁入と云ふ事を。其後確く止たれど。其年も世柄善く。川の神の祟もなし。此事は史記に出て。蒙求にも扱書したれば。和女も讀みて知りつらんと。云ひ諭れて梅夕枝も。半は心の雲霧霽れ。猶試みに六出の位牌に。向ひて推問したれども。更に何の夢も見ざれば。始て重荷を卸たる。心地せられて。何時になき。笑顔は梅の初花よりしをらし。左門も大きに喜つ。此里に三日止まり。池田伊丹の酒造の。事くしき様をも見せ。大物の浦の船卸も。折よくあれば一見せさせ。此所彼所の名所古蹟。尋ね廻りていやはては。大阪へ出で住吉よ。天王寺よと拜廻り。歌舞伎の芝居も二日見せ。偕ては天満の天神に參詣し。せつしや末社を順拜するほど。早や自ら春めきて。稍々も霞に匂ひ。空朗なる花曇り。庭の木の芽もはじけ時。田樂にあぶらの乗りせつかいもせわしき頃にて。其の御所言葉の驚も。軒に琴弾く聲に誘れ。三味線擔で花の下に野遊びのせまほしく。垂込てのみ居り難きに。物は思へど幻之助。幾代が供の與七等に。唆かされてみあがりの。妹手を引く心になるも。望あるのみの浮れ歩行。有間敷事なれど。若き内には間々ある習ひ。籤を引せて一と代と二た代。二人に一人は伴行んと。文殼裂て引き結ぶ。



玉は二代の手に引けば。一代は力も落ち縁に。眩なから手ま探り。何にを爲かど差し覗けば。けん玉の糸の切て。夫を直して居たりけり。「扱てくつておきの善い子去年の冬のが未だあるか。どれ己が直してやると。幻之助は手に取りしが。幾代と與七が急立るに。心急れて袂に入れ。後迄に善くして遣う。留守をする替には。おみやげはどつさりじやと。忍打扮の腰軽く。刀ささぬが樂か。敵に油断を謀計か。いざ知らぬひの筑紫端。誂ひ織のかひの口。唐棧揃へもよくうつる。懷中鏡帯にさす。幾代は羽織の襟折て。吾と小裾を左に取ば。與七はかちく火打鎌。座敷では有まいし。「何れ歸りは天神様。身を清むるにしては無し。敷と云へば毛氈でも一枚持て行ませうか。「心中でもせよと云ふのか。「縁喜でもない又一度。かちく山をやらすばなるまい。「花見に毛氈とは時代過る。休憩所はべた一面。よすことく左様ならばと裏口よりさゝめき立て立ち出つ。寺々の花も未だ咲ず。思ひしよりは風も寒し。甲首乙首と歩く程に。與七はしやんと立ち止り。「酒なくばなんの己か櫻かなどは。偕て善く詠だなア。行先に何でもあると。毛氈所か竹筒も持たず。肩や手の暇な替り。大分憐を催ほしました。「嗤しい與七殿。下賤ばつて聞づらい。此所は天満彼が小山屋。久し振て出たからは。澤山主に奢らせう。「幾程でもかまひはない。お厨所はたしかな者と。幾代の顔を見て笑へば。共に打笑み小山の。庭を通りて。「此所も端近。同じ事ならもちつと奥。「ぐつと奥の方が宜よ。「變に聞えて可笑らしい。

「お耳に御念の入ると云ふ者。最う此所が奥の止りと。圍ひめきなる小座敷に。坐を占暫時休息し。物調へさせ献酬す蓋の隙々の。雜言は省きて記さず。「奥々と云ふ内に。三尺至らず狭ひ庭煎餅の持ち薄板の。圍ひの外はヤツぱり往來。「謀判の相談しはせまいし。奥でも大事は無い。「謀判は知らず日本國。一箇に集るお催しでも。時を聞せる與七が忠義。「痴らしい此所等へ来て。「ま何にせ這邊に。要事もあれば二代には。額堂の畫を見せながら。其所迄いつて行て参り升。「いらぬ事を。「いやく入用。さアく御出と小ちくよの手を引き。止むるを聞かず出行けり。猶相對に酔すしみ。櫻色より未だ赤き。顔の紅葉を散さんと。幾代はてうづに立ちたりしが。歸り來りて澄ぬ顔。「私しは障になつたれば。天神様へは參詣ぬ。主一人で兩人前。善く拜で下さんせ。「成程與七がつれてゐた故。參詣が後になつた。勿躰ないく。待て居やれど幻之助。社頭の方へぞ出行ける。小山屋の裏座敷。彼の薄板の塀の外には。はきもの拵なはれたるを。つくるひて世渡として。最も賤しき身の上なれど。年も若く清げなるが。煤けたる深笠に。顔は見えても顔は判らず。入子箆に臂を持せ。すげかけの下駄も打捨り向を眺め吐息をつぐ。處へ同じ世渡する。ふぢどか云ふが來掛て。「精が出るのと云ひたいが。何だか澄ぬ顔色だ。箇敷の不足錢でも取たか。「なアに其様事ではない。今し方此所の前を。通つて行たは長柄の長者。娘を伴ての天神詣り。あゝ己も此商買人の。腹から出た者でもなくと。前生を云ふ處が始まらぬ



譯なれど、「手前も長者の子か孫か。」なに左様でもないけれど。同じ人と生れながら。千万人の足糞を。嘗てつなぐと思ふ時は。命さへ汚穢な様な。直させると直すとの。違はまたしもまア聞やれ。長者の娘は乗物を。擔せながら手を引れて。外珍しい濶歩だ。どうした機會か端緒が切ると。直に同じ替へ草履。おかめの様な侍女が。跡へ残つて切れたのを。直させようと云ひ居つて。朋輩に強く叱られ。打捨つて居たのを。拾ふて置いた此見やれ。娘の顔の奇麗さは。錦畫でもあゝは書れぬ。乃公も味な心が起り。嘗めて見たり頼ツべたに。當てたりしても。物も云はねば笑ひもせず。「願はくは家來となつて細腰を纏はん。」六かしい事を知つて居るの。「新内の置き淨璃理さ。履物が物を云ふなら。大金の取れる見世物。おいらは又た其草履に化けて優しい踵にくツつかうと。云つた處ろがお庭の櫻。「まだ那邊等に居るであらふ。」眼の正月も呆痴てぬへ。斑犬も歩るけばぼうのあたりで。匂ひなど嗅いで來よう。そんなら幻。「ぶちや行くのかおいらも行かうか。いや〜眼の毒止すべし止すべし。」

み深く痛めて。仇なくは騒も得せぬと。お袖お留の其餘の女。下男も共々狂氣の如く。あれよ〜と呼び叫び。手を揚げて足も地に着ず。左門も娘が心を察し。手に汗握り睨むのみ。術計盡きはて。見殺に。するより外は無かりけり。幻之助は實前に。良久しく叩頭居たるに人の騒げば打驚き。顧れば。此在様。事を好む様なれども。微醉機嫌に心も浮き立ち。いで此の鳥を打除て。鶯を扶やり。花の如き女共の。喜ぶ顔を見べしと。腰を探れど差添の。脇指も扇もなし。こは口惜と袂を探るに。一代が糸を切らしたる。けん玉のころかりあつ。此屈強と左手に握りごめんなれ其鶯。吾救ひ參らせんと。云ひ様倍と向うを見詰め。ゑいと投たるけん玉に。鳥は眼を打潰され。はたゝきして地に落ちしが。暫時あつて又立上り。遠くへ飛でぞ失果ける。仇無ければ鶯は。自ら籠に歸るを。お籠は待ちどり勤はれば。お留は藥を與などし。介抱しつゝ幻之助の。手並を感じ一つには風雅て清き風丰に。心を動かし恍惚もしつゝ。禮を謂ふのもそゝろなり。梅か枝も此方を見ほこせ。面はゆげなる面色して。顔の赧むも云はん方なし。左門も驚き且つ喜び。其手並の凡ならぬに。感じ敬ひ幻之助を。自ら迎へて腰をさげ。何處の人におはするや。娘が秘藏の飼鳥の。命の親の其許なれば。百千の御報ひ。進むたりども多しとせぬと。生憎に旅の歸路。萬事更に心に委せず。暇だに厭ひ給はずは。此より直に御供して心行く計りの喜び。屋敷に歸り述まほし。某は長柄の主。濱名左門と申す者と。名乗れば却は



と幻之助。左有ば此の娘こそ。我が妻になすべき者。あら美やうへなしと。思ふ幾代もくらふれば。花の側の深山木なりと。心も動き思はず知らず。偕ても御身が長良の長者。不思議の縁と云ひかけしが。結納のかたなも無く。幾代の怨も最とほしと。思ひ返して口訥ば。左門は不審かり。「不審とは其方様には。此の左門に。何か御縁の。」何にとして。縁も申緒も御座らねと。あゝイヤ斯で御座ります。私は東國者。近頃登つて浪花江に。假り寝の蘆のふしはかせ。覺束なければ。浄瑠璃が。好きゆゑ長門の弟子となり。後には長良太夫とでも。名乗と師匠の申し付け。今からながらと呼ばせませ。貴方様なり私なり。兩方ながらが長柄故。遂い不思議など申したばかり。賤しい藝のお耻かしやト。赤面すれば。「左にあらす。身共も元來浄瑠璃好き。左様云ふお方であるからは。お禮の仕様に困つたが。大きに仕よいと後に居る。忠太夫と云ふ番頭に耳語けば手箱より。若干知らず黄金を一封。長者は扇に乗せて差出し。不躰けながら當座の寸志。何れ長柄へ同道し。お十八番を語つて貰ひたし。三味線弾きも無くてはならぬ。相師を誘うて來らるゝ間。別當所にて待合せんと。云はれて困る幻之助。「願うてもなき藝の一徳。直ぐに御供は致したけれど。少しばかり故障もあり。追て御呼下さりませ。扱て此の品は何かは知らず。お酬ひを受け様とて。お飼鳥りを助けはせず。戴いたも同様と。再び三度押し返し。遂には戴き請け納め。暇を告ぐればまア暫く。不味けれど持參の辨當。肴は無くとも近付きの

あるしに盃ばかりでもと。休息所に借置きたる。別當の方丈へ。誘ふ折しも社内の人々。上を下へと騒ぎたち。喧嘩くど罵りて。人なだれを打ちければ。お嬢様を先づお駕籠へ。駕籠も一緒に。侍女共も周章騒ぎ。左門もそこく駈け出せば。此の騒ぎを幸とし。幻之助は人立に。交りて其の儘身形を隠し。小山屋の方へ歸り行く。喧嘩は誰も見たがるも。人の癖にて忠太夫。一ト足残つて群がる。人々押し退け見れば月代の。跡長々と延ばしたる。人相良く無き悪漢の。古葛籠を背負ひたるに。六十に餘れる翁。縋り付きて打てども放さず。人々爺を助け給へ。斯奴は盗人誘拐。彼の葛籠には私しが孫。入れて御座ると云ふを聞き。俠氣のある忠太夫。平常好める兵法も。柔術も斯様の時のためと。人々突き退け悪漢の。前に廻つて行く道塞げばなんの。私が胡論なもの。其の爺め氣が狂れて。何を云ふやら多愛なし。邪魔せずと放せやい。「イヤ放さぬト老人も。味方を得たれば力強く。足に組つき倒さんと。すれば前には忠太夫。拳をふりあげ眉間を打つ。打たれて悪漢透めきながら。翁を蹴とばし忠太夫の。胸元一ト突き突き据て。痿む間に葛籠を捨て置き。悪漢は争ひ難しと思ひけん。逸足出して逃げ行くを己れ逃ぐとも逃がさうかと。跡を慕ふて追かくる。翁は葛籠の蓋はねのけ。「可愛や飛んだ目に遭うて。然かし無事と云ひながら。身は疲れ心は倦み。眼眩暈きてやどうと俯し。生躰なければ葛籠より。出づるは十か十一の。いたいけの小娘が。猿轡にも云はれず。縛繩に手も



利かねど。轉び出でつゝ倒れたる。翁に我が身を打ち付けて。只涙にのみくれ居たり。忠太夫は悪漢を。見失ひて飯り來れば。左門も途中にて其由聞き。立戻りて様子を見るに。傷しさ大方ならず。小娘の縛め解かせ。翁には藥を與へ。坊に連れ行き介抱ほどに。身も健かに心も體かになりて喜ぶ翁に娘。土に頭を摺り付けて。幾度も伏し拜み。其の事の由を問はれ。否も何を隠しませう。此の女小郎は男の子。私が一人の孫。父にも母にも死別れ。残るは小供と此の年寄。心細い二人の身の上。私は名鹽の村で。貧乏な紙職人。朔左衛門と申すもの。奉公に出した悴奴が。人を殺した累類に。私も獄舎の苦悶。昔し主人のお娘御。御事情有つて私方に。身を寄せて御座つたのが。見兼て傾城遊女よりは。一倍顔を露す身に。なつて多額の金整へ。下されたので忽ちに。爺奴は罪を償はれ。無難に宅へ歸つた所。嬉しいは嬉しけれど。其の金筋を聞いて吃驚。冥加ないやら勿躰ないやら。有う事が成う事か。親のために子の身賣り。お主のために賤しき苦界。するさへ滅多に出來ぬもの。お主様が家來のために。耻しい奉公を。さつしやる話は神代も聞かす。何故に止めては下さらぬと。あどのお方に大不足。云ふたばかりて空手では。取り返さるゝ法は無く。せめては死んで申譯と。騒いでも遂ひ死に遅れ。是れでは濟ぬ夫では成らぬと。心遣の擧句には。寝起も不自由な病氣となり。愈々人のお世話になり。益々貧苦に迫れども。因果と死なれす永々と。煩らひぬいて年を越し。漸と頃日健康にな

り。何卒金の工面して。お嬢様を取り返さうと。四方八方見廻しても。一兩と集めた金の。取れさうなものもなく。賣り盡したる屋財家財。只此の孫の慾目か知らず。奇麗なが目にと留り。お嬢様を買取たは。難波新地の見世物師。何事も相談づく。此の孫を夫れに渡し。舞臺子かげま寺小性。何になりと一生涯。奉公させて娘子を。返しては下さるまいか。爺の切ない胸を汲み別。不足であらうと慈悲と思ひ。勘辨して下されと。割りつ口説きつ頼んだら。諸と云ふまい者でもなしと。自分に極めて苟めに。近くへ行くふり此れを連れ。道へ出て、斯うくと云ひ合むれば嫌とも云はず。慘らしやとは思へとも。成らぬ心を鬼にして。長町の木賃宿に。泊つて其處の姉御を頼み。賣り物には花と云へは。女子の姿に装つて貰ひ。お嬢様の召し古し貰うて置た中巾の。帯締めさせたら此の通り。好い小娘になりました。嫌であらうに顔差し出し。おつとして居て儘になり。化粧をさせた柔和さ。其の甲斐もなく先方の。主人は人情を拂ふた挨拶。舞臺子にするにもせい。違物になつた上は。澤山金の出し手も有う。藝も仕付けぬ灣白小僧。顔が小と奇麗なとて。金出して買阿呆はなし。よしんば女にしてからが。此の年頃では能出して。三兩か五兩が山。彼の娘と引替などは。理解ぬも程がある。逆ても出來ぬ相談と。口を揃へて泣き付いても。木で鼻こくる無得心。小腹も立ては突と出て。見た處が始らす。責ても談合あひて。思ひ出した昔の友達。此の傳馬の寺町邊に。一人あるをば力にて。



あくせきと来て見れば。疾に何處へか店換と。聞てはづみも抜けてがつかり。力も落れば精根も。盡て足さへなえくぐた。屋敷町の横丁に。倒れて徒歩く氣性もなく。休んで居る其の處へ。來掛つたのが先刻の惡漢。誘拐とは夢にも知らず。親切さうにも言はれ。撫で擦らるるが嬉しさに。心を許してとろ／＼と。疲勞て眠るを見濟してか。此の孫に手拭喰ませ。突き倒して足を縛り。驚き支へる此の老爺を。投げ出して此の孫を。葛籠に押込み引背負て。逃ぐるに。痛さも切なさも。忘れて彼奴が腰に錠り。足に搦り一生懸命。是處まで付いては來たれども。早や眼も暈れ心も惑ひ。危急ところを御家來衆。お助けなされて下された。其れ故孫も無難に歸り。こんな嬉し難有い。幸福は御座りませぬと。有し次第をつばらに語れば。左門は聞く／＼胸を痛め。坐に涙を催せば。傍に在合人々も。幼子の心を酌みどり。朔左衛門の不幸を憐み。太息吐かぬはなかりけり。差掛りたる災難は。幸いに攘ひたれども。第一に翁の心痛。救はずんはあるべからず。袖の振り合せも多少の縁。聞き捨にはなるまじと。左門は黄金取り寄せて。些少なから初ての。對面の紀念なれば。請納めて主人の息女。身購出し安堵すべし。是程の黄金を與へなは。よも否とは云ひませじ。仁ある主義ある家來。一對の名譽たり。吾れ聊かの寶を捨て。二人の名譽をあらはさん事。望むところと黄金百兩。渡せば呆れ顔打ち眺め。御笑談では御座りませぬか。本統ならはお情過ぎ。欲いのは山々なれど。戴く理由が御

座りませぬと。餘所眼をすれば一入見上げ。何の是れしき辭退は偏屈。左れと心に快く。思はれずば其の童べ。我が家に連れ歸りて。膝下に置きて使ひたし。夫れだに承知あるならば。主從固めの盃せん。肴料と思ふべし。辭退は矢張主人へ不忠と。云はれて喜ぶ朔左衛門。與之吉を左門に渡し。そんなら御意に従ひませう。扱ても孫奴は幸福もの。女になりと男になりと。仰しやる通り儘になり。大切に奉公爲い。澤山叱つて下さりませ。かげまになるに比べては。籠とお月様。いや月夜でも日の暮には。用心もよくござらぬ。左様ならば暮ぬ内。今一度彼所へ参りませうと。徐々喜び立出しが。流石に後を振返り。涕鼻すゝり別れ行く。小山屋の小座敷に。立歸りたる幻之助の。胸膈取つて幾代が高聲。私が好きでする世話の。補足にせいの端た金。嬉しいと云ひたいが。出處が氣に喰はぬ。見ても無邪苦邪腹が立つ。飯りの遅さに窃と出て。人の後背に見て居れば。長者の娘の顔ばかり。恍惚として去たゝる。眼付きは餘程北山時雨。濡れぬさきこそ露をも厭へ。言ふまいと定めたが。愚痴も悋氣も云はねばならぬ。親父の仇の事をさい。打明して云ふ程で。今日が日まで長柄の長者と縁組仕たと云ふ事は。云ひ出さしやんせぬ心意氣妾しは如何にも恨めしい。叱るなら叱らんせ。毆ならば毆たしやんせ。ありやうお前が預けた包。有馬の留守に開いて見たら。紙に包んだ證文一通。我が娘梅夕枝。貴殿の子息幻之助へ。縁組致す其の證據。弁の片々遣し候。其元よりは結納として。朝日丸の



短刀。追て差遣はさるゝ旨。承知致し候」と書て有て。宛名は遠州曳間の城主。佐々木源太左衛門殿。攝州長柄濱名左門。是れ書判まで記した證文。中に包んで梅櫻。散しに付けた片足の筈。是様事て有たもの。私が實情を盡しても。嫌で有たは無理もない。刀の詮議も長者の方へ持て行く主の心と。思へば是れまで人様の。意見も聞かず眞情を。たて徹したが耻かしく。己れやれ此の儘で。置うかど腹の立つ。下から戀しさ懐かしさ。心で心が理解かね。まゝよ初に惚たが粗忽。人は兎もあれ是處では。愈々實を盡したら。主も遂には眞底の。實が出ようと氣を取り直し。夫れからが彼の水行で。天神様を強願だ御利益。今日まで仲良く暮したれど。長者の娘の美貌い。顔を見たので胸は焼け。お前はお前でいそくと。雜戯口交りの挨拶も。未だ名を隠して居た丈に。斯してお前を叱つて居れど。名乗つたものならお前を殺し。私も直に死ぬわいななど。酒の言はする仇なき。言葉をなたむる幻之助。隠したは重々過まり。其方も今云ふ通り。實名を名乗らぬのが。梅ヶ枝に執心の。無いと云ふ慥な證據。知つて居ながら大きな聲で。人が聞く静かに云や。聞いても大事御さんせぬ。お長者様のお嬢様の。やうな柔和い口元には。性質が違うて成られませぬ。彼人でも氣があるそう。お前の顔を見るやうで。見ぬやうで怪な眼配ひ。あの目は定めて性質。藪隈めとか云ふのであらう。悪口云ふのも矢張り負鼠。ほんの妾へ心休め。斯様云へば彼様云ふと。何となりと云ふが能い。例へば響入り仕度

よ。是所へ嫁に貰ふにせよ。朝日丸の短刀は。鞘ばかりで何にもならず。是れも一つの其方の安心。去年の十月廣田の社で。殺されて居た藥屋の。後家が腰に差したのが。無いは彼の間に人手に渡りと。語るを塀の外にて。聞耳聳つる幻が。打ち黙頭くと内には知らず。あの時刀が還つたら。今頃はお長者さま。もう能い頃に愚痴も止め。愒氣も止めたら能さうな。未だ疑はしく思ふなら。彼の證文も筈も。其方に渡して置く程に。藏ふて置くなど捨てなりと。心任せにするがよいと。取り出し渡せば篤くと檢め。ゝゝ嬉しい是れでこそ。日本晴がしたやうな。見たくもない此の筈と。庭へひらりと抛げやれば。彈力に板塀突き破り。貫き通りて幻が薄衣の肩先ぐさと刺す。幻は思はず知らず。あつと叫べば驚く二人。何事なるかと切戸を開けば。幻は肩先を押へながらも。手に持つ筈。幾代は大方酔も醒め。とんだ粗走で思はぬ怪俄。免してお呉と詫るにも。相手の悪さに胸どき。と。お交情の能過ぎた痴話喧嘩。其の抛ちの御相伴。乞食が仕ては旦那方の。お耻辱にもなるやうな。足を洗つて町人に成れる程のお手當を。戴き度と申す所を。夫う慾張りも致しませぬ。是れでも元は小添差。一本も佩めたもの。此の身に成つても小道具好き。汚ららしい乞食の血潮。付いたは連も磨りもの。戴き申して膏藥の。代は別には入りませぬが。お芳志しが有るならばと。下から出られて尙ほ氣の毒。何程か知らず長者より。贈れる金を幾代は投げ遣り。是所に置くのは可笑くない。厄陥しちや御座



んせぬか。左様ぢや〜と幻之助。何云はれても幾代任せ。幻は金さへ得て。押戴くを見も返らず。さあ仲直りの納め酒と。勇んで幾代が閉て切る切戸。帯に挟みし彼の證文。外面に落しに心も付かず。手を打ち拍きて下女呼び寄せ。お爛を熱くと云ふ折りから。與七二代は歸り來つ。暫時盃廻らしつゝ。酔に乗じて曾根崎へ。小唄うたうて歸りけり。

攝津の卷五編終

邯鄂諸國物語

攝津の卷六編

惚じて人はのせらるゝと雖も、賞らるゝは嬉しいものじやとは、能狂言鱸庖丁の伯父が語又例の癖なれど、逆夢とは云ものゝ、好きな事は再見度もものに、て、虚言にて嬉しいとはよく言云種、此の津國卷は、伊勢遠江よりは格別評判も悪からずと、榮久堂の番頭さんにはせられ、万更虚言でも有まいと、悦喜の餘り思へば是れも、御負の拙物を見棄遊ばされぬ、東都氣性と山程も、御禮申上候、扱御断申上まするは、當諸國物語は、全體一國一帙に、收め續く



るとも二帙三帙何程長柄の語でも鶯墳は編數も積つても早六出の花雪責の發端も四年の往昔となるにつけ其の頃より御披露の非人の聳入今以て延て言譯あられ蕎麥但し一盃御振舞申たでない證據には奥畫に今度は出しましたれば彌次に賞られて、僕が鼻彌高く成長致して飛行自在、剎那に諸國を見て歸り、嚙ぞ珍らしい御物語致さんものをと敬白、

嘉永七甲寅歲孟陽

笠亭仙果

鄂部諸國物語

攝津の卷六編

笠亭仙果

濱名左門の娘梅か枝は。天満の社頭にて。初めて幻之助と面を合せけるが。父の結髪せし夫どは。素より知らず。殊に去ぬる陸月の頃。夢の中に六出に向ひ。一生男を有つましと誓ひ又猪名寺にて黒髪をも。斬り捨てんとせし程なりしが。其の節父に説き諭され。再び夢をも見ざりし故。今世心の動くをも。操なしとは云ふべくもあらねど。幻之助の容貌。勝れて潔く愛嬌付き。柔弱なれど艶冶からず。物うち云ひなる氣色。起居舉動温順なる。凡べてあらまほしき性質に。心動きて忘れられず。玉琴を助けられ。父上にも喜び給ひ。諸共に誘ひ行かんと。仕給ひしほとなるに。あやにくに騒ぎの起りて。男の行方は跡無くなり。残り惜しさは限りもなけれど色に出づべき事にもあらず。人知らず太息の吐かるゝも良しなしや。昨日までも今朝までも。覺えざりし物思ひ。此處に初めて兆し初め。強ちに此の人に。妻と呼ばれし身を打ち任せ生死をも共にせんと。慥かに思ひ定むるにもあらねど。只管に其の人の。懐かしく戀しくて。



天満の社内を立ち出でながら。野里へ飯り行く道の。行く手に侍女の。嫁菜菔の摘み草も。何面白くて騒ぐかど。戯れ遊ぶも厭はしく覺へ。夢にも見ゆやと乗物にて。眠らんとすれば耳近く。玉琴が囀りて。起すさへ悪くし。日の長き盛りなれば。暮れつ方に家に歸り。休息の後父と共に。持佛菩薩に向ひ禮拜しつ。母の位牌を見るに付け。六ツ手が事心に浮み。世を捨て果てんと誓ひしものを。怪しくも男を慕ふ。心の付きしが罪深く。斯様の念ひを罷めしめ給ひと。本尊の地藏菩薩に祈れど。手に持ち給へる玉を見れば。彼の男の烏に投げし。けん玉の思ひ出だされ。係に立つも憂てし。我が斯くものを思ふに付けても。今日父上の老人を助け。我れに連れさせ給ひたる。與の吉は未だ十ばかり。聞き分け良くとも西東。知らぬ處に只一人賢き程に案じ過ぐし。日暮れは殊に寂がり。人戀しさも嘸ぞかしと。人の憂きをも身に積みて膝近く呼び拵へ。物喰はすれどももの慚ちして。箸をも取らず俯向居れば。氣詰りならんと菓子箆筒を。與へて次へ退かしめ。十二三より十五六の。侍女に打ち交へ。或は鳥差しお茶出し小僧。額の髪を口びるに。挟みて渡す白髻に。吹き出したるむべ山風に。勝を争ふ歌がるた。百人首には無しと云ふ。梅ヶ枝さへも心に入り。餘念なげに遊ぶ程に。童心に與の吉も。居らばや居らん初霜の。解けては遠慮も夏の夜の。未だ宵ながら居睡るも。晝の草臥無理ならず。誰れか抱き寝を仕て遣りやと。梅ヶ枝が云ひも果てぬに。妾が妾がとお袖にお留。彼方は

方へ引つ張れば。「未だ眠たくは御座りませぬと。擦らんとする手を捕られ。見張る目付も又愛らし。「争はれては此の子も迷惑。「其様なら是處でジャンケンで。「シイ〜〜それ勝つた。貴方は紙で妾は鉄。舌切り雀のお宿は極つた。サア來やんせと與の吉を。お袖は臥室へ連れ行きぬ。次の朝與の吉は。人々と共に起き出で。朝飯を食べて後も。お袖お留初め。湯引髪結化粧などして。相手にならねば端近く立ち出で。昨日貰ひし螺鈿の提げ重。大切さうに手に提げつゝ外の方を見出だしほろ〜と。涙を溢す左は云はねど。祖父を戀ふる心の。やるかたの無きなるべし。素より男の子なるものを。女姿は嫌はしからず。左はあれど梅が枝の。手元にて使はんには。二九年三年は此の状にて。置く方も悪からじ。與の吉の心任せ。如何にもすべしとて。何れが良きと問ひければ。「私しは去年まで。刀で斫り合つたり。お馬に乗つたり相撲を取るのが。一番好きでござりましたが。お父様をお嬢様に。殺されてから現在親の。仇ではありながら。討つに討たれぬ御主人様。其の上にも父様が。悪いから起つた事。人に怨はなければも。子で親の仇討。ならぬと云ふは因果もの。お寺様に成り度いと。思立つては刀も。相撲も嫌になり。柔和なのが坊様の。品行には第一と。聞て居れば何事も。人には善惡逆らはず。云ふ儘になる了簡故。彼方がたのお心任せ。如何なりとも仕て下さりませ。其のかはり使ふ程。御使ひなされた其の上では。お法衣と編代笠。調へて下さりませ。何にも欲しう御座りませぬ



ど。云ひく潜々泣き出せば。梅が枝も涙を浮め。「譯は知らねど悲しい事。云ひ出して泣せる子ぢや。わしも疾から尼になる。願ひなりしが父様の。御許なくて是の様に。粧り飾るも一つには。孝行とは云ふものゝ云ふにも云はれぬ。心の濁りの恥かしさ。其方の言葉を聞くに付け清潔りと思ひ切り。妾も尼になりませう。そうしてあの怖いもの。見たしとやら云ふ通り。未泣きたらいで物好きながら。父さんの殺されて。仇の討たれぬ其の話。聞きたいものぢやと云ひければ。與の吉は泣く目を拂ひ。櫻木が心となく。源吾平を大石にて。押し殺したりし其の死骸。朔左衛門の引き取りし。初め終を物語り。「其のお嬢様の旦那様と。申すは十三郎様と申し長柄の長者と云ふ大金持の。小旦那様と申す事。お若衆の時家出をなされ。近江の何とか云ふ所に御奉公召された時。其所のお主様と夫婦になり。御家老のお身の上。お祖父様はお嬢様の家來すぢのものなれば。お世話申して居ましたと。此處が長柄の長者の家とも。未だ知らざれば外所ごとの。様に語るを聞くゝも。梅が枝の驚き尋常ならず。絶へて知れざる兄の行衛。聞いて嬉しさ限りなく。此の由父に物語り。いかで不興を御許しありて。妾には兎も角もど。云へば左門も驚きながら。「又た例の出家の願ひ。夫れは差し置き十三郎。而かも同國。遠からぬ名鹽に居るとは思ひも寄らぬ。昨日今日彼の邊りを。通つても夢更知らず。呼び返すは易けれど。連れ添ふ女もあるよしなり。勘氣の詫もせぬ忤。此方より誘ひもならじ。先づ兎も角も

落ち付いたりど。環にも斯くと告ぐれば。「夫れはく何よりも。お目出度う御座ります。筋道の立て方は。如何様ともなりませう。早々お呼びなさりませ。梅が枝の出家の望。一寸諄い様にもあれど。悪い事を爲しでもなし。兎も角も十三郎。歸られた上共々に。御相談なさりませど。口には云へど十三郎。歸らば連れ添ふ櫻木とか。云へる女もともに来て。四邊に人目繁くなり。大仁坊どの忍合。さこそ障の多からめど。心は更らに樂しませ。幸も喜ぶべからず。禍も憂ふべからず。朔左衛門は孫を賣りはぐれて。誘拐の難に逢ふ。此の災ひの起らずば。長柄の長者の憐れを受け。人を購ふ身の代をや得つべき。扱て其の黄金を抱かずば。水の底にや沈むべき。是の處に至りては。幸却て禍となりぬ。開は千早經る神にしあらねば。良しや悪しやを知る由も。霰まじりに餘寒の夕風。泣く目に當りて頬さきの。切るゝばかりの冷たさも厭はで老の心の急がれ。難波新地へ引き返せば。見世物師の珍五郎は。蒲暗がりに透かし見て「又御座つた爺どの。到底も出来ぬ相談ぢや。「イヤもう孫は連れませぬ。良し旦那に有り付いてお金を充分頂きました。五十兩づゝ二た包。是れではよもや御相談が。出来ぬ事は御座るまいど。胴巻解いて打ち振るふを。珍五郎は見て訝かしがり。「此のせちからい世の中に。どうして那樣に良し旦那が。そして何と云ふお方ぢや。「ほんに私としたとが。餘まりの嬉れしさに。是所へは心が急ぐ。あゝ有り難う御座りますと。何度も御禮は云ふたが。何所の何と云ふお人か



問はなんだは強つい疎忽。尤も天満のお寺で聞けばと。云ふた處が何程も有りや。何と云ふお寺であつたか。いや危躰ぢや〜。孫に逢ひたう。思ふても何と云ふて尋ねしと。狼狽するも道理なり。主人の妻は夫の袖。そつと引かへて耳に口。寺町裏の狐が騒ぎ。悪戯をするど人の噂。あの爺さまも時々と。魅かれたのか。また矢つ張り。化けて來たのか油断はならぬ。先づ四邊中明るくしてと。行燈に。明りを移し。神棚にも。御燈を照し。四邊に目を付け睨むを見て。夫も少し怖氣たち。迂濶玉を渡しては。恨悔先に立ち難し。いや那爺百兩の。金は木の葉でもあるまいから。慾を離れて櫻木を。渡して遣り度いものなれど。其方が歸ると直ぐ後へ。俄に旅の金主が付き。彼の鎌倉の見世物屋に。春まで仕切て遣る相談。先方急ぎで早速極り。金受取つてもう立たせた。案じなさんな金儲けが。出來ると只でも返して遣る。晩くなつては道も物騒。早う飯つて行かッしやいと。急ぎ立てられて朔左衛門。そりやまア眞で御座りますか出來ぬまでも跡追詰。お目に掛つて歎いたら。邪慳の人ばかりもあるまい。旅の人もお嬢様も。何方の方へ行かしやりました。然ればの。鳥羽か伏見か淀竹田。芝居の方を北へ〜。そんなら其方へ少時も早く。あゝ危険い跌きやんな。其の様にして見する手間で。年寄らしく齒の要らぬ。油揚でもしやぶつて居いと。閉て切る戸口朔左衛門も。何を云ふやら耳にも入らず馳け出せども日は暮れつ。土地に馴れねば道も覺えず。是方彼方と聞きつゝ行けど。氣も取り

逆上て東西を失い。田圃の小路に差掛り。是れは早やとんだ處だ。北と思へば南へ來たのか。南無三寶と引き返し。急ぐとすれど頭のみ。先へ進みてせいし腰。草臥足は掛かどらず。辛うじてあへぎ〜。四五丁行けば島の内。近所と見えて良き町あり。軒端に行燈二階に灯燈。星の如くに夜とも覺えず。此所の橋は何橋。此所の辻は何町と。心覺えに猶行く先を。昇き行く籠に振り袖の。先の見ゆるは若しや我が。御主人様かと走り寄れば。籠付き添ふたる旅人が。其方は何ぞ私し等に。お訊ね申さじやならぬ事。乗つて御座る御女中は。櫻木様とて大方の「爺どのは好く知つてぢやの。難波で名代の今巴。一年定めで鎌倉へ。お連れなされると聞いた故跡追詰けたが存外に。近い處で逢いました。まゝ其籠を卸してくだされ。さして此方さんは此の太夫の。親類のものと云ふ様な。親類どころか私は御家來。申し〜お嬢様。朔左衛門が参りましたと。云ふを聞くより垂簾はね退け。慕かしかつたと立ち出る。櫻木。違ひ無い〜。まア御壯健で悦びます。なれども申しお嬢様。お前様もとんだ御仁。有う事か無ろう事か。家來のために主人の身賣。難有すぎて恨めしい。お庇で獄舎の苦悶は。免れたれども心の切なさ。死ぬよりも十倍増し。生て居る心地もなく。と云ふて無理に死なれもせず。獄舎の苦悶と窟托で散々に思つても。此世の縁の切れぬも因果。漸つと今春全快して。六づかしからうと知りつゝも。與之吉は一生涯。役者にでも小性にても。賣つて貰ふて貴方様と。引き換へに仕たい願ひ



今日親方へ掛合に。參つた處が取つても付かぬ。挨拶に頼みの綱も。絶れてすこ／＼歸りの道誘拐の災難を。救はれた上お長者様に。お金を頂き與之吉を。お上げ申して引つ返せば。早や遠國へお旅立ちと。聞いて喫驚息も吐がすと。云ふを聞く／＼例の旅人。扱も／＼奇特な人。一年の給金も。半は拂ふた太夫なれど。聞き捨てゝ連れて行くまい。見掛けは各な野郎だが玉川の水を生湯に浴て。性質ながら東ッ子だ。其の金此方へ受け取つて。難波新地へ持ち歸り此の子の始末を付けて進ぜやう。是れから直ぐに太夫をば。爺さん連れて行かしませ。万事は私が引き受けたと。切れ離れよき男氣に。朔左衛門はほた／＼喜び。流石は東の親方様。早速御承知下さる上。此處から直ぐに連れ申して。行けどは餘まり難有過ぎて。嬉れし涙がこぼれます。左様なれば緊心のと。胴巻より金取り出だすを。受取り納めて櫻木を。引き渡せば二人の喜び。旅人は櫻木を。乗せ來りし籠駕に移り。も一度駕籠の衆彼方へ。そんなら爺さん又逢うと。籠ばつたり飛で行く駕籠昇。朔左衛門は後伏拜み。案ずるよりは生むが輕すいと。此處らで貴方に追付かふとは。思ひも掛けぬ爺が幸福。扱ても／＼去年から。大變御苦勞掛けました。悴めが不所存から。とんだ所へ飛ッ汁が。掛つて大切の御顔に泥を。塗らせ申した不忠者。御免されて下りませ。申し／＼御嬢様。何故ものを仰しやらぬ。さア／＼急いで參りませうと。手を取りつゝも熟見れば。今迄正しく櫻木と。見えしは石の地藏尊。傍に花筒因果車。

ヤヤ／＼是れは怪しからぬと。四邊を見廻しきよろ／＼目。島の内の花街の。真中と思ふたは薄淋しい池の傍。真黒な森と見える。二階から軒續き。星の様な見た火影は。矢張空のお星さま。榜示の文字も星の池。そんなら此所は今宮ぢや。こりや只事では無いはいの。よもや／＼お嬢様が。悪戯に隠れもなさるまい。こりや狐めが魅したのぢやな。當方も無い目に逢せ居ると。懷中を探り／＼。魅されたは是非も無いが。お金まで取つたのぢや。思へば憎い悪狐せめて彼の金でも持て居れば。お嬢様は是非もなけれど。後家御様十三様へ。お詫の補足にも成らうものを。寄るに觸るに己ればかり。何故此の様に間が悪く。畜生まで欺されて。憂目に逢ふとぢややら。悪愆かゝす非道はせず。正直正路に義理固く。しても神様佛様。彼方向ひて御座るのか。あいや／＼開うでもない。矢張り己が自業自得。若い時つくつた罪の。罰が晩く當るのぢや。彼の猪名寺の笹原様に。奉公を仕て居た時に。侍女の六出に惚れ。嫌はれたを根に持つて。奥様を煽つけたれば。赤うなつて六出をば。驚を逃がしたとて。責め呵んで果ては雪責。凍えて死んだ其の死骸。持ち出した時手水に起き。そつと見たれば云ふなよと。口閉げの小判三兩。云はぬ色なる山吹は。身に付けず賭ごとに。遣ひ捨てゝも矢張り身に。報ふと知らず無我無中。其の女の執念の。祟りかお家は程なく死絶え。荒れ家敷となり怪物が。出るを聞いて怖くなり。夫れから心を悔悟て。不正事は忌物に。仕たれど一度も斯様／＼と。懺悔



を成ねば罪は亡びず。去年からの不幸。人の念と神の御罰。御免なれ。南無阿彌陀佛。稱へて地藏を伏拜み。立ち上つて太息を吐きつ。茫然として居る折りしも。此方へ來かる燈燈は。井筒に櫻の紋どころ。男に葛籠背負せたる。若き女は立ち留り。朔左衛門の顔打ち眺め。氣作さん其の燈燈をど。差寄せさせて打ち驚き。其方は名鹽の朔左衛門と。云はれて與驚見上げ見下し。櫻木様ぢや御座りませぬか。朔左衛門。お嬢様。あア。御無事で居らつしやつると。云ひかけ顔色變へ。又たうせたな。こゝな野狐惡狐め。大切でも大切の。お金を残らず取り居つて。未だ。何が欲うてうせた。己れめ只で置くものか。杖振上れば櫻木は。其方は氣でも狂がうて居るか。开してまア此の四邊を。何をしやうとて夜深更「何を仕うとも凄むい。魅かされて未だ此處に居るは。餘んまり。口惜しさに。又來居つたなら撲殺し。皮でも剥いで腹癒に。仕たさに待て居たのぢやと。無二無三に打つてかゝるを。櫻木は怪みながら。利腕取つて杖を奪ひ。正氣では無い様だが。どうしたものと顔打まもれば。氣作は手を拍ち。知れた。是頃噂のなる狐が。魅んだのでござんせう。太夫様の親類なら。お前様に化け居つて。爺様を欺したと。云ふ様な事であらふ。御最負からの御願で。舞臺でお廣めなされたお藥。邪氣を受けて逆上た人にも。良く効くでは御座りませぬか。御印籠にござりませう。彼れを吞ませてとつくりと。沈着せうではござりませぬか。ほんに夫れ

あのお藥と。手早く取り出し起ち騒ぐ。朔左衛門に含ませれば。忽ち心も確になり。さて尊いお丸藥。判然となりました。又も狐が來たのかと。起ち騒いだは矢張り迷ひ。御主人様へお手向ひ。こりやまア何と致しませう。夫れでは貴方は矢張り未だ。此所地に御座りましたか。何の何所へも御出はなし。大評判の太夫さん。正月の中旬頃から。住吉の御境内で。一ト月餘り當り續け。彼地にお宿は取つてあれど。今宵は少し親方に。用が有ると中歸り。そんならば遠くの國へ。來年まで仕切られて。お居でなさると聞いたのは。夫れは間違ひ是れ程に。お金の收入る力持。櫻井の花勝さんト。金看板の太夫さん。三番叟から永々當々。他へは遣らぬ此方の金箱。扱ては親方珍五郎殿は。お嬢様が欲しい故。嘘吐いて退出したのぢや。其りや胴慾ぢや無體と云ふもの。金が足りずはもう幾干。持て來いなら持て來いと。善惡掛け合ひ下さらば。うろく出掛けて畜生奴に。仕てやられはせぬはいの。お嬢様今日の始末。まア聞いて下さりませと。再前狐に差向ひ。云ひし如くに又再ひ。去歳よりの心盡し。今日の始末を詳に語り「遠くにも御座ることか。目の前に其のお方を。置きながらも金なければ。おん恥を隠す事かなはず。お長者様のお芳志。無に仕て退けた申譯。生て居らぬ老人が。因果のはては最後の通り。南無阿彌陀佛と稱へつ。池へザンブと飛び入つたり。櫻木氣作の兩人は。周章狼狽立ち騒ぎあれよ。と叫ぶのみ。覺悟はしても老人の。水に溺れて苦しむ状。目も當られず淺猿しく。



飛び入りて救はんにも。女の身とて左も得せず。氣作は素より憶病者。水練とても習はねば。見殺しにする外はなし。櫻木齒を噛み身を焦り。力があつても此の様な。時には何の役にも立ず。人に恨を云ふでは無いが。朔左衛門が話に聞けば。妾と見たは石地藏と。悔しさうに云ふたわいな。是れ何故妾に化けたのぢや。何故畜生の肩もつのおぢやと。地藏の腰に手を掛ければ忽ちバツタリ打ち倒れ。因果車に掛けたる灯燈。壓に打たれて微塵になり。消ゆると齊しく森影に。バツと焔へ立つ狐火の。中からくく笑ふ聲。櫻木倍と目を付ければ。大木の梢に一の狐。是方を見下し嘲る状に。櫻木愈口惜しく。仇も恨もあるまじきに。何故年寄を譎かし。多くの黄金取り隠した。疾くく返さば命は助けん。左なくば生けは歸さむと。口には云へど届かぬ梢。睨まへたるまゝ術もなし。狐は人の聲を遣ひ。力自慢は止しにせい。眞實力かあるならば。倒れし地藏を起して見せよと。云ふに櫻木いよく腹立ち。たかが四尺や五尺の石。起すに何程力がいると。引き起せども更に動かさず。狐は上より快よげに。打ち笑ふて見下し居る。眼を目的に物陰より。はつしと打つたる手裏劍の。狙外れず左の眼に。ぐつさと中てばぎやつと喚び。堪りも敢ず眞逆に。落るを見れば大犬より。一層勝れる老狐。手負ひは獅子に限るにあらず。苦痛に堪へかね荒れ廻り。氣作を目掛て咬つくを。櫻木早く駈け隔て。丁と蹴つくるやさしき足も。強き力に狐はころく。得たりと櫻木馳せ寄つて。彼の石地藏を引起し。狐

の上にとつかと乗せ。先刻の口を忘れたか。斯様石は重うない。一と揺り揺れば手足を悶き叫べど更に動かれず。次第く弱りつゝ。再た蘇生らん状も見えず。偕ても好い氣味朔左衛門の。當の仇は討つたれど。金は何所へ遣つたるかと。四圍を探せど頼には見えぬ。櫻木も氣を疲らし。四圍を見廻し太息を吐き。斯う仕ても居られぬ。妾が番をする程に。大儀も太儀怖くもあらうが。氣作さんは村の人を頼んで来て此の大略を。庄屋様へ届けずば。此の儘には歸へられぬ。如何様捨てても行かれますまい。金は大方森の中に。有うと思へど眞暗がり何が出様か怖くて。一人や二人ぢや這入れられぬ。朔左衛門は土左衛門と。名を變へられる狐々は。澤庵漬の香物と。なつて双方も不氣味な顔色。此處に残つて居るよりも。未だく村へ行くのが勝手。左様ならば出掛けませうと。立ち上れども腰はぶるく。もう性根を付けさんせと。背中とつさりア痛しこモウ大丈夫と踏みはだかる。此の時森の間より。常夜燈の火袋携へ。徐々出づる立派の武士。燈火を差し寄せ死したる狐。熟くと見る状櫻木は。熟視りて膽を潰し。貴方は父上お懐しやと。云ひ掛け己が身を顧みて。傍へも得寄らず差し俯向を。例の武士はじろりと見て。遠江國箕作家の。老臣石倉尉之助。久秋とも云はるゝ者が。小家掛け芝居に面を晒す。女に由縁があつて濟うか。父などは汚ららしい。尤も力の勝れたる。娘一人持つたるが。下人奴と密通し。屋敷を立退き此の年月。行先知れず後に聞けば。彼の下人



奴も。富める者の子とやらん。親の勘氣を受けし。ものどあれば諸共に。揃ひに揃ひし不孝者不忠者に聊かも。心の残る用なけれど。今度主君友照公京師御在番の序を以て。當國住吉へ御參詣。某も御供致し。濱邊遊覽する程に。思はず見上げし芝居の看板。若き女の力持ち。虎の尾を引き留めたる。看板の勇ましき。繪嘘ごとは知れてあれど。少しは力の有るものか。我が娘も母親の。血統を延いて男に勝る。力の有りしも持つたものをと。憎い奴とは思ひながら。此の看板を見るに付け。神經の知らせか若しや又。彼奴らめが世を過ぎかね。また悪漢に誘拐され。命を捨て得ず阿容々々。人に生耻晒しはせぬか。家中の武士も徘徊すれば。若し知己の眼に掛らば。親にもあらず子にもあられど。人の口は防がれず。箕作家の老臣の娘が。見世物芝居に出て居ると。取り沙汰をせられる時は。御主君までの御名汚れ。愈々彼に定まらば。其の儘には捨て置かれじと。今日旅宿より只一人。出直して覆面に。面を隠し芝居に立ち寄り一見してより胸一杯。満月も近頃病身。手足も痛みて氣力も衰へ。まさかの用にも立がたし。己が好める男もあらば。其の通り親に願は。如何もして養子と爲し。分家致させて國に留め置き。殿の御用に立べき身の。親に暇を呉れたる不所存。何程暮し兼るとて。物貰ひ同様に。見世物芝居の群に入り。耻かしくも思はずや。知らぬ内は是非も無し。最早や片時も延されずと只今の身の上を。餘處ながら尋ね知り。夥多の黄金を費やしても。身を購なひて手打ちに致し

人の口閉がんと。心を定め在所を聞き知り。歸る後より見え隠れど。語るを聞くに櫻木は。悲しき艱らさ身も世もあらず。「お腹が立たうが父上様。お免しなされて下さりませ。只一言の云ひ譯も。ならぬ此の身の不孝の段々。切りなりと突きなりと。貴方の心のまゝにして。御機嫌直して下さりませ。親様の手に掛つて。死ぬが妾しや本望ぢや。嬉しいと云ひつゝ叫ど泣き伏せば。「エ、騒がしい沈着て。我がいふ事を疾くと聞きやれ。再前よりも彼所にて。現もなげの老人に。逢ふて互ひの物語り。逐一に聞きたるが。賤しき業に面を晒すも。義の爲にして是非なき次第。且つは初の男奴と。是れまでも一緒に暮し。嫌きも嫌かれもせざりし様子。不所存者も夫れ程の。事は理解して居るのかと。少しは不慙に思はれて。尙ほ窺へは老人は。星の池へ入水して。命を果たす。あら憐はしと思ふ程に。憎むべきは其の畜生。人を嘲弄するを見兼ね小束を投げて負傷せしに。臆て殺害し力量早業。老人のたうの仇を。討ち取つたる健氣さど。云ふを聞き果て櫻木は。少し心を慰さめて。頭を擡げ涙を拭ひ。「親々。様に海山の。御苦勞掛くる不孝者。お叱りもなくお賞の言葉。冥加なや勿躰なや。この上は素の様にと。云はせも果てず打ち笑ひ。「其方は櫻井花勝と云ふ。賤しい身分のものではないか。娘ならば勘當して。許さぬ奴に何一言。換すどころか隠しても。隠されぬ世間の手前。行状は善かれ悪しかれ。打つて捨てねば武士がたゝぬ。「夫れぢやに依て些も早う。首打つて下さんせ。呼吸ある内に尙一



遍。逢たい人もあるけれど。思ひ切つて未練け云はぬ。妾しや殺されても父様よ。娘と尙一度云はれ度い。斬つてくと頸差伸べ。身を差付くれば尉之介。太息を吐き眼を屢打たき。「不具な子ほど可愛いも。なべて世間の親心。何處までも他人にして。殺し度うはない娘。時候の勢で逆上たか。乃公は恚う耳が聞こえず。何云ひやるか聞き取りにくい。時に彼の花勝とやら。共に力の強い同志。若し我が娘に逢やつたら。弱うなつても母親は。死ぬ様な氣遣ひなし。父親は此の通り。只二人とも由ない苦勞に。心を遣うて居るほどに。女ながらも一つの功を。立て、歸參を願うて見よ。其れまでは遠ざかり。國のものには下賤しい。妾を見せて呉れるなど傳言が仕て貰ひたしと。事を解けたる慈悲の言葉に。又争はん様もなく。ハイの返事も涙聲。「縁もゆかりも無けれども。一度見ても最負の太夫。是れ此の金は當座の餞別。受け納めて親方と。云ふものに渡しなば。身儘にならぬ事もあらしと。首に掛けたる金囊。氣作に渡して立ち上れば。「エ、難有う御座ります。然かし餘まり勿躰無うて。妾に罰があたりませう。开して貴方は最早お旅宿へ。「其方も餘り遅れぬ内に。歸るが善からう然らばぞと。衣紋直くれば取りつく櫻木。「良う聞き解けては居りますれど。お別れ申して又何時か。お目に掛るか知らぬと思へば。お顔を見せて下さんせと。寄るを排ひて尉之介。「武士の娘ぢや無いか。イヤさ。無事で御座れと云ひ直し。無情なく行きしが忍目に。見返す横顔延び上る。娘と思はず眼を合せ。其の

儘眞向に石倉は。堺の庄の旅館を指して。足早にこそ急ぎけれ。氣作は睡い眼を擦り。「欠伸の涙は耳から出る。哀い涙は眼から出ると。解つて居らねば出榮はせねど。珍らしう泣きました太夫さんの彼れが親御。眞に親子の情愛は。外目からは阿呆らしいが。ア、したもので御座りませう。いや殺さうのさア殺して。下さんせのと途方もない。大切の千兩箱を。筐に釣るした延喜の様に。左様手輕くは我儘に。爲せまいと思ふて居ても。滅多にものは云ひ出されず。只ハラ／＼と思ふばかり。太夫は櫻井人は武士。當座の纏頭が此の通り。百兩から上の重さ。矢張り奴も狐々ちきで。お金は石では無いか知らぬ。苗字も大かた石倉と。「阿呆云はんせ儘かな父さん。若し石ならば素の様に。見世物に出りや濟むはいな。是れより二人は村長を。尋ねて今宵の始末を告ぐれば。村長は二人を留め。珍五郎を呼び寄せ。一方には名鹽村へ。人を馳せて十三郎に。朔左衛門の亡き骸を。引き取らせんとする事よりして。櫻木の身の片付き。書載すべき事多かれども。空雜々々しくて興なければ。事の序に譲りて略す。「池の堤の稻積より。徐々ど立ち出る大仁坊。頭巾眼深に大廣袖を。ふらめかして懐手。「不圖暮れ方に通り掛り。見世物師と爺いの話し。聞いて俄かに一ト仕事。淀か伏見か武田の芝居と。云ふた装振で興一兵衛。定九郎もどきで親爺どの。親爺どのとやらうと思へば。町中では勝手もわるし。良い思案が有りさうなど。腕を拱むと明神が。己等が魅かして取つて見せう。後背でかくれて見て居る



ど。云ふに任せて従いて行けば。此の今宮の裏門まで。引張り出して此の通り。甘く取らせれた二た包。然しながら思ひも依らぬ。邪魔が這入つて明神は。可愛想にぐつしやりと。殺られたはひよんな事。此の意旨返しに何人なりと。残酷い目に合せうとは。思ふて見たが一人は大力一人は老公何方も手怖し。例の雨なり風なりと。起して眼を眩ませうと。祈つても利きめは無し。明神が斯う成つては。妙術も行はれぬか。是れではさつぱり名僧智識の。道徳もあがつたり。折助の看板で。だいなしに仕て終ふたはい。扱て永々とシヤつらが縁言。痲痺はきれる寒くはなる。酷い目に逢ふ晩だ。然し武士奴もやつと歸り。番を仕て居相な阿女が。阿呆と一緒に村へ行つたは。天道人を殺さずば。彼奴がどつとして居ると。生佛の上人様は。蹉跎往生なさるところ。又來られては中位。永居は恐れこの百兩。せしめたを土産にて。どりや徐々と歸らう同穴。玉木か懷中で温たまらうか。否待て。明神が亡くなつては。長柄まで一と飛びの。飛行自在も出來ればこそ。用心厳しき左門が屋敷。忍ひ入るにも是れまでの。様には手軽くやられぬのか。いや早つたらぬものに爲つた。弱目に祟り風までが。馬鹿にするか滅法に。寒いやつか吹いて来る。腹は北山時雨さうな。空合になつて來た。オ、彼の燈火は爛酒や。好いものが通り掛かつた。成程天道人を殺さす。オ、イ、ト呼び止めて。肴も酒も物揚だ。熱つ爛であでは辛い。早う早うと云へども聞かず。早速と行くを引き止むれば。此處は何時

も直ぐ通り。酒もおでんも賣りませぬ。悪い狐が騒ぎ居つて。木の葉の錢で節々欺られ。モウいしごりで御座ります。賣らねへのかヨ。左様よ賣れん爛酒。業晒しもろこし團子が。聞いて惚れる。返す。云ふ事ながら。悪しき事あれば良き事あり。朔左衛門の非業に死せるは。最と不慙なる事なれど。櫻木の父に逢ひ。身を購ふ黄金を得たるは。又喜ぶべき事にして。朔左衛門も落付て。黄泉の人と成るなるべし。是れを嬉しと云はんとすれば。名鹽村にて又一つ。大方ならぬ大厄難。起りぬること憂けれ。朔左衛門が與の吉連れて。出でたりしも荷めに。近きわたりへ用ありて。行きたりとのみ思ふ程に。夕暮方まで返り來ねば。老人なり子供なり山中の事なれば。谷へ落ち又獸の。害には遇ひもせじやなど。心もど無さ限りもあらず。十三郎は心當り。遠近と探し見んと。松火など取り出だす。折しも戸を開くる人あれば。朔左衛門歸られしかど。問ひ掛くるに答へぬも道理なり。年も若く壯健なる。武家の若黨めいたる男。あへぎく入り來り。尊宅に遠州の浪人。佐々木幻之助の母御の兼て。身を寄せ居らるゝ由。左様御座らば早速に。申し入たき火急の使。件の佐々木幻之助殿。母御に用事ある由にて。此の近所まで來られしに。なませの山中にて急病發り。物あたりや激しき苦痛。生死の程心もどなし。身共は音川の家中。淀與曾右衛門の走り使ひ。主人與曾右衛門は。主命により山新田開發の。巡檢多用にて遅れて歸り路。歸り掛つて旅人の難澁。見過し兼て介抱せさせ。醫藥



も與へられたれど。更に効能の見えればこそ。母に逢ふて云ひ置き度き。一言ありとの事なれば。我等と供に彼所まで。急いで御座れと聞きも敢へず。渚ははつと胸潰れ。十三郎も仰天し。夫れはまア御親切。そんなら伯母様些ども早く。云はつしやるまでは御座らぬはいの。あとを頼むと履物を。穿く間急かれて轉ぶが如く。お危険御座ります。お頭巾お杖と十三郎。渡すを攫んで渚は駈け出で。使ひの男に手を引かれ。物も覺えず出で行く後に。十三郎は氣もそゝろ老人子供も捨て置かれぬど。差當る幻之助の。病氣も伯母に任せ置き。二人を捜しに出られもせず。矢張我が身もなませの山へ。駈け行き様子を見るべしと。門の戸引き閉て近隣の。佐平次に暫時の間。心を配けて給はれど。聲を掛けつゝ彼所へ行き。見れば果たして七八人。跣ふもあり起てるもありて。何事か罵り居れば。只今は御親切に。お知らせ下され添けなし。と云ひつゝ近付き能く見れば。病人らしきものはなくて。誘ひ行きし後家の渚を。高手籠手に縛めて主人と覺しく綺羅びやかに扮装たる。男の前に引き据えて。下人共打ち毆き。責め居れば十三郎は仰天し。何人なれば人を偽り。此の山中へ誘き出し。伯母を捕へて無躰の打擲。しなに依つたら歴々の。武家でも其の儘差し置くまいと。下人を突き退けつツ立つて。其の由聞かんと詰め寄れば。妨げするなど棍棒にて。十三郎を隔てさせ。若黨ども覺しき剃り下げ奴。嚴つがましく臂を張り。汝等が不思議に思ふも道理。我が君今では某と云ふ。御大家の御客分。素は

盜賊の物本山。佐々木の奴等が仇と狙ふ。牡丹谷の洞九郎さまだ。何と肝が潰れたか。幻之助なり渚なり。大王のお眼からは。昆虫ども覺し召さぬが。仇と狙ふ奴ばらを。生け置いては極りがわるいと。彼處や是處を毎日。斯ういふ鵜助まで。人相書を頂いて。日常尋ねし二人の行衛。先づ婆アから目付けた折節。大王の御主人たる。お大名の某殿。極お忍びで大王さまに。案内させて有馬へ御湯治。御逗留の節を幸ひ。幻之助奴がでね掛つて。居ると云ふて吃驚させ。釣り出して此の通り。是れから己れも捕縛り。幻之助が隠れ家を。白状させる此方の手順。斯く云ふ我れを誰れどか思ふ。大王様の股肱の臣。後家奴には兼て知合。大王様がお醫者を仕て。御座つた時からお氣に入り。藥箱を擔いだ故。取りも直さず下男の箱助。去年幻之助に逢た時。今の名を名乗らずに。引き退きしは何より残念。今では無双太郎と云ふ。豪傑さまだ踏ん張れば。洞九郎は打ち笑ひ。噓しい控へて居る。否なに十三とやら。大仁坊といふ賣僧に。兼て云ひ付け置いたれば。幻之助は彼處でも。何せ捜し出さうけれど。一日でも早いが勝手何所に居るか白状するか。また誑かして我が家へ。連れて来て置くとも仕ろ。其んなら婆アを人質に。夫れ迄此方へ預らう。勝手な方にするがよいと。然も大様なる顔色を。見るに堪らず十三郎。怒れる聲を振り立て。毛頭知らぬ幻之助が。行衛をよしや知つたりとて。何んの明さう連れても來ぬ。人の親の仇を害し。其の子に云ひ譯け無けれども。手を束ねては居られぬ



仕義。大悪人の洞九郎。觀念せよト刀を抜き。斬て掛るを引つ外づし。「ものども此奴を捕縛れ  
畏まつたと追取り巻き。刃を恐れぬ棒づくめ斬り擾はんと働らきつゝ。心は矢竹に焦やれども  
素より蚊細き生れ質。武術と雖も未熟なれば。敵には負傷も負せやらず。敢なく刀も打ち落さ  
れ。數多の賊に組み伏せられ。脆くも繩に掛かりつゝ。齒咬をすれど其の甲斐なし。渚は覺悟  
の聲震はし。時節至つて夫の仇。己れ奴に逢ひながら。一ト太刀刀向ふ事も叶はず。縛められ  
し口惜しさ。然し我が子が。本統に十死一生なら此の上に。何ぼう悲しかるべきに。己れ等にも  
未だ見付けぬと。聞けば未だ頼もしい。とても知らぬ彼の子の行衛。如何程責めても云はれね  
ば責めるなら責めよかし。殺すなら疾く殺せ。死んで取り就き心の儘。憂き目を見せて仇を取  
らう。とは云ふものの盜賊でも。岩木で作つたものでもあるまじ。物の情を知るものは。盜賊  
詐偽を仕ながらも。義を建て人を憐みて。弱を助け強きを挫き。世の豪傑と慕はるゝ。其れに  
引き換へ己れ奴は。何にも知らねば頼母しい。朋友と氣をゆるした。夫を殺し物掠つて。殿様  
をも偽り嘘る。嘸其の前後も非義非道。十惡五逆限りもあらじ。眞に己れは鬼よ蛇よど。聲を  
限りに泣き罵しる。「八釜敷死に外れぬ。死に度は殺して遣らうが。此の世の業が滅せぬか。未  
だ少時と殺すにや早い。悴を釣り出す餌食にして。此の世の水を最う少し。飲ませて置か  
ねば勝手が悪い。此の二才奴も又外に。少と入り用のある奴だ。一緒に暗い處に居ろ。悪氣を

研く盜賊も。草双紙でも古い様な。己りや何處までも善人を。苦せまるが大好物。いや大分夜  
か更けた。箱助鷓七手速こく。口も足も捕縛ばり。二人とも是れに押し容れ。明日は土産の荷  
の振で。屋敷へ早く馬で遣れど。腰を掛たる用意の揚げ荷に。二個の葛籠へ。あらがふ二人。  
猿轡にほだしを掛け。押し入れ蓋を覆はせつ。塵芥打ち拂らひ空打ち眺め。「南に御座す北斗の  
劍先。丑の刻も過ぎたらん。殿の目覺は正七ツ。疾く旅宿へ歸らんと。葛籠を擔がせ手下  
を従へ。有馬山へぞ急ぎける。



攝津の卷六編終

柳亭種彦作

詠染逢山鹿子

初篇より

第六篇大尾

に至る

博文館

藏版







沢木屋の  
太夫  
逢山



縮妻組の俠客又六













伴右門  
女房  
阿菩



名古屋  
山之妻  
於梶





六角守多え助

### 詠染逢山鹿子初篇序

先<sup>さき</sup>年<sup>とし</sup>この書<sup>ほん</sup>房<sup>や</sup>にて、有<sup>あ</sup>馬<sup>ま</sup>のお藤<sup>ふじ</sup>が事<sup>こと</sup>を編<sup>つむ</sup>し、人<sup>ひと</sup>形<sup>がた</sup>筆<sup>ふで</sup>  
 のひよつくりと、出<sup>で</sup>そくなつたる後<sup>あと</sup>編<sup>へん</sup>を今<sup>いま</sup>年<sup>とし</sup>は書<sup>か</sup>  
 んと思<sup>おも</sup>ひのほか、田<sup>た</sup>舍<sup>せ</sup>源<sup>げん</sup>氏<sup>し</sup>に水<sup>みづ</sup>滸<sup>こ</sup>傳<sup>でん</sup>、原<sup>もと</sup>來<sup>より</sup>より不<sup>ふ</sup>學<sup>がく</sup>  
 でなま嚙<sup>かみ</sup>の、和<sup>わ</sup>漢<sup>かん</sup>に腹<sup>はら</sup>をそこねてや、初<sup>はつ</sup>秋<sup>あき</sup>頃<sup>ころ</sup>より病<sup>やまひ</sup>  
 に臥<sup>ふし</sup>絶<sup>たふ</sup>て筆<sup>ふで</sup>を把<sup>とら</sup>ざりければ、書<sup>ほん</sup>房<sup>や</sup>大<sup>おほ</sup>に憤<sup>いきり</sup>り、紺<sup>こん</sup>屋<sup>や</sup>の  
 明<sup>あき</sup>後<sup>ご</sup>日<sup>ひ</sup>作<sup>さく</sup>者<sup>しや</sup>の來<sup>きた</sup>年<sup>とし</sup>、是<sup>こゝろ</sup>非<sup>ひ</sup>稿<sup>こう</sup>本<sup>ほん</sup>をわたせていふ、その  
 紺<sup>こん</sup>屋<sup>や</sup>から思<sup>おも</sup>ひつき、逢<sup>あ</sup>山<sup>さん</sup>鹿<sup>か</sup>子<sup>こ</sup>の古<sup>ふる</sup>もの、筆<sup>ふで</sup>の簇<sup>くし</sup>に  
 張<sup>は</sup>りあげて、當<sup>あた</sup>坐<sup>ま</sup>しのぎにあたへたる奇<sup>き</sup>特<sup>とく</sup>有<sup>あ</sup>馬<sup>ま</sup>は  
 卯<sup>う</sup>の春<sup>はる</sup>まで、延<sup>のび</sup>してはおきつれども、お藤<sup>ふじ</sup>のかはり



の藤娘は、ほんの簀から棒づくし、お子様がたもご  
ぞんじの、大津繪づくしの小歌の當振まづ口繪か  
ら渡し場の、畫工へ註文誂染、三本傘の紋所ろ、あが  
りがよいとお讚もあらば躍てよるこぶ雀竹、虎  
落の、高き惠をあふぐは、此お天氣でといひわけも  
きかず、日和のつゞきたる霜ふり月の中旬なり

文政庚寅春

柳亭種彦

誂染逢山鹿子初篇

柳亭種彦

「男の齒から外へ出した。言葉は引かぬ今日中に。遠山が擗あけて見せると。言葉がつて茨木  
屋の。角口より立出のるは。稻妻組の兄分と。人に知られた大津の又六。同じ仲間の闇助雲八  
立並んで口々に。これく兄貴。いつぞは聞かうと思ふて居たが。此方は元實體もの。大津繪  
書いて親父の手助け。おいらが様な者を見ると。人間では無いやうに。物も碌に云やらぬ者が  
いつの間にか仲間になり。力は強し其上に。やつどうは利いて居る。夫ぢやによつていや兄貴  
の。いや親分のと尊んで。此方黨等が大きな力。それは宜けれどお初といふ。あの美しい心  
中もの。御臺所と捨て置いて。いやがられる遠山を。身受けするのはどういふ譯か。乃公には  
さつぱり合點が行かぬ。それく闇助の云ひやる通り。何んで夫れ程遠山をと。雲八が高聲を  
此れと止めと又六は。四邊見廻し懐ろより。帛紗包みを取り出し。色は思案の外とやら。どうい  
ふ縁やら遠山に。惚れは惚れたが今では又。その色戀は取りのけて。那奴を乃公が耳に入れぬ  
ば。男の立たぬ其の譯はと。差出すと品雲八が。手に取上げて帛紗を開き。こりや何んだ



草履が片々。チ、合點の行かぬ筈。此の又六は眞面目男者。ちと聞きはつツた事があつて。武士に成りたい兼ての願ひ。劔術柔術を心がけ。女郎狂ひは扱て置いて。物見遊山は大嫌ひ。處に一昨年大晦日。暗さは暗し忙がし。迂つかりとして大家の武士の。供を割つて通つたら。慮外者めと手どり足取り。詫言云つても聞入れず。剩さへ其主人の。穿替の此草履で。打つて打つて打ち据へられ。額に疵を受けたれば。出世の望みも最う協はぬ。元より暗の事なれば。面體は覺えぬども。名古屋山三といふことは。箱提灯の紋所。三本傘で紛ひはない。何卒彼奴めを此の草履で。打ちかへさんと思へども。六角どの、家老職。迂濶に手出しも叶ひ難し。處ろに幸ひ此廓へ。折節忍んで通ふと聞き。山三に廻り逢ひたさにと。言葉の内に差出る闇助。「ウ、夫れで乃公等が仲間入。ぞめいて歩くは聞えたが。色氣を離れて遠山を。受出すといやるのは。エ、忙しない黙つて聞きや。是から云はねば分らない。那の遠山が情夫といふは。阿野四郎次郎音信とて。かの山三めが主人筋。先へ廻つて遠山を。此方へ身引して置くは。山三を乃公が釣り出す闇と。聞いて二人は横手を打ち。「成程それでさらりと讀めた。して又身受の其の金は。「女房お筈が才覺して。是非今日中はこゝへ来る筈。何を云ふても百兩と。つばまつた金なれば。那奴も骨が折れるのであらふ。其處らまで。行て見て来よう。まさかの時は二人とも。乃公が肩を持つて呉れそりや。「頼まんすまでもない。皆んな此方と一様に。染めた

雲八一寸さきは。闇助が呑みこんだ。揃つて鳴り込む稻妻組。「そんなら二人。「兄貴後にと西東分れ〜に行き過ぐる。」後へ昇き来る戸なし駕籠。「ハイモシお客でムりますと。駕籠屋が呼ぶ聲茨木屋の。亭主鬼藏は若い者。芝七ども〜出迎へ。「さア大盡の御來臨。先々これへと手を把れば。客はきよろ〜打守り。「御身は此處の御亭主か。扱て馴々しい物の云ひ様。身は遠國の武士だが。都一見に上つたら。茨木屋といふを尋ね。そこで女郎を買ひ召され。一生の話の種だど。朋輩どもに教へられ。夫でわざ〜罷り越した。石部金右衛門と申すもの。以後はお見知り下されて。四角四面の三つ指に。可笑しさ耐へ主人の鬼藏。「それは忝け有馬山。ゐなの笹原酒一つ。それお銚子もてお蓋と。立廻はるを押止め。「あゝ其の様に置ましたいと。氣が天邊へふて上つて。肝心の問ふべき事を。ツイ失念の仕る。先の第一に尋ねたいは。望みの女郎はこれありと。求むる事が罷りなるか。「いやもう夫れはお望み次第。「チ、宜か〜。して又すぐに身受いたいて。國元へ連れ下る。夫れも罷りなるぢやまで。「成るともなるともお金次第。「チ、夫もよか〜。望みといふは途で見た。葱の紋をつけた女郎。確に此樓の抱へと聞く。ありや何程で夫妻に呉れると。問ふも張脇最前より。後ろに聞き居る新造籠。耐へずふつと吹き出せば。鬼藏は振向き目顔で押へ。「こりや今までのまがきと違ふ。昨日からは二代の遠山。名をついだのを忘れたか。太夫になつた身をもつて。何が可笑しい嗜めと。叱り散らして此方に向



ひ。輕薄笑ひに坐を黒め。「葱の紋をつけましたは。逢州と申しまして。難波に居つた太夫職。様子ござつて此の間。私し方へ引受きました。最早年期も僅かたれば。百五十兩下さらば。さらりと貴君へ上げませうと。聞いて欣ぶ金右衛門。「チ、よか〜。そんなら早う聘んで呉れ「はい〜承知致しました。只今お客へ借りられました。少しは手間がとれませう。先づ奥二階で御酒一獻。これまがき。さうでは無かつた遠山さん。笑ふて居ずにお連れ申しな「あ〜石部さんとやら。此處とは違ふて奥二階。見晴らしも宜かよかぢや。あいでなんしと連れて行く。後見送つて若い者。芝七は差よつて。「若し且那さま。年も行かぬ年まがきさんを。遠山と名をかへさせ。同じ内に二人の遠山。どういふ譯でムりますと。問はれて鬼藏ひそ〜聲。「稻妻組の又六が。遠山の身受けしたいと。付けつ廻はしつ蒼蠅いゆる。百兩もつて來たら遣らふと。出來ぬを承知で云ふたれば。どう仕居つてか。其金が。調ひさうだと云ふ噂。彼の遠山は三百兩で。根引の相談しかけて置けば。那奴に遣つては工合が違ふ。夫れぢやによつて新造まがきを。急に二代目遠山と。名をかへさせて又六が。今でも金を持つて來れば。那奴を突付け否だと云へば。百兩とらぬ分の事。又逢州はゆりとか云ふ。男に心中立て居つて。勤めをせぬ故金安すで。引取つて置いたのが。どうやら物になりさうな。是れから金の捉みどり。逢州が明いたから。早う連れて戻つて呉れ。「おつと合點と芝七が。あたふた馳け行く角の口。摺れ違

ひて立派な武士。供の小性に打向ひ。「これ駒吉。此家が彼の茨木屋。何んと廓といふ處は。賑かなものであらふ。こりや可内もうか〜して。その狹箱とらる〜など。云ふは何うやら聞いた聲と。主人鬼藏は表へ立出で。「是は〜山三さまと。云ふ口押へて。「あ〜これ〜。誰が聞くまいものでもない。さんと計り云ふたがよい。「扱此の間談した通り。愈々大夫遠山を。「はい三百兩下されば。只今にも差上ります。「チ、此の方も其手筈。則ち金子も持たせ參つた。奥へ通つて證文と。引替へに渡さうが。太夫を連れては人目に立たう。後より駕籠で三條の。身が屋敷まで送つて呉りやれ。「へい〜畏まりましたと。云ひつゝ鬼藏は駒吉の。顔つく〜と打諦視り。「ても見事。お小性衆でムりますか。あなたが若も女なら。打つて付けの太夫職。遠山さまをもお連れなされ。右と左に梅櫻。おうら山吹三百兩。頂戴と出かけませう。遠山さまもあの二階に。三味線弾いて御座いました。さア御案内致しませうと。云ふに山三も打首肯き。「いやなに駒吉。此頃顔が見たいと云ふた。遠山に逢ふたなら。心の丈を打明けて。合點か。可内其の挾箱鬼藏に渡せ。「先づあいで成されませ。奴どのは局見世。ぞめてムれと挾箱。鬼藏は受取り山三を先に。駒吉諸共奥へゆく。「又うと〜と一人の武士。要ありさうに佇立む處へ雲八闇助兩人も。彼の又六を待ち侘びて。うろ〜來かゝる出合頭。彼の武士に突當り。日も暮れぬのに目を開いて。通りやがれと顔見合せ。「や。わりや何時ぞや仲間であるた。權太ではな



いかいやい。「ヲ、闇雲久しう逢はぬ。」てもまア汝はいつの間に。えらい出世を仕居つたな。「ウ、ちつとした譯があつて。名も改めて軍藤太。稻妻組の仲間を抜け。難波の方へ行つてみたが今日立返つて来た様子は。乃公が難波の新町で。振つて振つて振りつけられた。逢州といふたも。此茨木屋へ住かへて。来たといふ噂を聞き。もう是れからは刀の威光で。口説落して見せる合點。いやと云へば斬して逃げる。後の始末はして呉れど。聞いて二人は笑局に入り。「こりや面白い又六が。尻押しいでに逢州をも。シタガ待てよ其女郎は。確か今は内に居ぬ。なア闇よ。「ヲ、葱の紋をつけた奴が。先刻こゝでかちらりと見かけた。歸るまでは局でも。そゝつて居よう權ではない。あゝ何んとやら六かしい。ヲ、夫々軍藤太。雲入も突合へど。我名の闇と受込んで。三人打連れ喘ぎゆく。「折から表へ悄然と。人目を忍ふ編笠に。内を覗きつ聞耳そばたて。「あの三味線は太夫が音メ。あゝこれ一寸逢ひたいと。獨り言する其處へ。何心なく出で来る新造。「四郎さんではんせぬか。「ヲ、まがきか大きうなつた。ちよつと太夫に逢ひたい程に。そつと此處へおこしてたも。「あい。遠山さんは客人の。身受がすんで今宵が名残と。今美くしいお衣装そんど。琴三味線の合せもの。此處へはどうもんすまい。昨日から太夫さんの名を貰ふて私が遠山。最負に思ふてよい客を。引付けて下さんせと。あごなき言葉此方には。もやつく胸の耳にも入らず。那奴に限つて其様子。不心中は無い筈ぢやが。これまがき。何う

なりと嘘いふて。まア〜乃公に逢はせて呉れ。「あい〜。そんなら待つてんせや。知つての通り堰かれた此身。親方に知らせぬやう。「合點でんすお前とは。云はずに欺してあゝそらど。あたふた立つて行く後に。腕を撫つて二階を見上げ。待つ間程なく遠山は。袂かい取つて梯子を下り。「私に逢はうと云はんすは。誰さんぢや誰殿ぢやと。云ひつゝ顔を見合はせて。「ヤア四郎さん。ようまア来てと取りつくを。取つ突き退け目に角立て。「様子はまがきに皆聞いたあのこゝな畜生めと。持つたる扇で滅多打。其手を拂つて遠山は。ちやつと飛退き打笑ひ。「身受けせられて行くゆゑに。腹立てさんすは其りや無理ぢや。金で賣つた此身體を。又金だして連れてゆく。客には仕様が無いわいな。夫れほど腹が立つなれば。人の根曳をせぬさきに。何ぜよびどつては下さんせぬと。つんどしければ耐り兼ね。「何う云へば斯うふと。最う己れには言葉はない。奥へ踏ん込み其客に。直きに逢ふての詰開き。見事に罅を開けて見せうと。借と見上ぐる二階より。「遠山が身受けの客。夫へ參つて御意得やせうと。小性駒吉引連れて。静々二階を降來り。「阿野四郎次郎音信どの。よもあん忘れはるまい。六角多京の太夫の執權。名古屋三山春平。「ふう其山三が何んで又。遠山の客となりと。詰寄する顔打守り。「何んでとは音信どの。お恨めしう存じます。改め申すにあらねども。阿野のお家と六角の。御先祖は元兄弟。久しく疎遠に過ぎたるゆへ。主人多京あなたの親御。祐慶どのと相談あり。其許様をこちらへ迎



へ。銀杏の前と名づけたる。多京の娘と娶はせて。六角の家を繼せ。多京が一子宇多之助を。阿野のお家へ參らせて。あなたの妹御若葉どのと。夫婦となして阿野のお家を。相續させんと兼て契約。かけ替もなき一人の男子を。取替る程親しき御ん中。祐慶どの御死去の後は。何とやらん疎々しく。此遠山に御心奪はれ。今に館へ御ん入りなく。銀杏の前はそなたさまを。戀ひ慕ひてくよくと。嘆かるゝのを見るに忍びず。遠山を身受けなし。影を隠して置くならば本心に立返られ。聳入もあらんかと。詮方盡きたる我が討らひ。様子は斯くの次第でと。山三が言葉に遠山も。涙拂ふて側により。「かうした譯でと打割つて。山三さんの密かのお話。賤しい遊女にお武士が。手を突いてのお頼みを。否とは云はれぬ義理になり。心に思はぬ愛相づかし私しが胸の切なさを。推量して下さんせと。反向くる顔に露時雨。消えも入りたく四郎次郎。差俯向いて居たりしが。漸く振り仰向き。「噫面目ない山三どの。云譯するも未練ながら。云はるゝ如く多京どの。御子息宇多之助どのを。我家へ貰ひ受け。妹若葉と夫婦になさんと。兼ての約はありながら。丁度我身の今のやうに。宇多之助どのにも放埒。其上に室町どのより。預け置かれし鷹の一軸。失ひし落度によつて。多京殿の勘當受けられ。妹若葉は戀ひこがれて目も泣腫れて。盲目全然。何卒して宇多之助どの。在家を尋ね出し。密に館へ迎へ入れ。妹が心も休めたく。人の入り込む色里を。尋ね廻りし其内に。不圖遠山に通ひ慣れ。道理も義理

も捨て果てし。今此態になつたもの。何面目に六角の。家が何うして續がるべき。世に亡い者と銀杏殿に。諦めて下さるやう。立戻つてかく傳へてたもと。涙隠して男泣き。やつと聲立て駒吉は。四郎次郎に取纏り。「いえゝ私しは諦めぬ。若い殿御の傾情狂ひ。權妾ぐるひはある習ひ。あられも無い姿になつて。此家へ來たは。貴郎にお目にかゝらうばつかり。夫のみならず兄様の。行衛を尋ねて廊通ひ。私しや嬉しい忝けないと。取付き嘆けば打驚き。「扱は其方が銀杏の前か。人非人の此音信。それ程思ふて下さるは。嬉しうムると手を抱れば。「遠山も悦び顔。「其お言葉で私しも安堵。今まで奥で銀杏さまが。良ともすればおむづかる。其お心根がいとしさゆゑ。琴三味線で浮かしても。お笑ひ顔は出なんだが。其一と言で日本晴れ。さア是からはお盡。及ばすながらお取持。なに恥かしい事があらふ。忤怩せずとムんせと。右と左りに音信と銀杏の前の手を執つて。無理に奥へぞ誘ひける。「山三もやうく胸落つき。「若葉さまの御事は必らずとも音信さま。お心づかひ遊ばすな。宇多之助の行衛を尋ね。目出たう祝言させますと。云ひつゝ、碓と障子を立てきり。「乃公があのお坐敷へ出たら。反つてお氣が詰るであらふコレ新造ども新造ども。狭箱に振袖の。お召替が入れてある。あのお坐敷へ上げて呉れと。斯れも次へと立つて行く。「お、奥の暖簾は。確に此家が茨木屋。モシちとお頼み申します。私は鬼藏さまに。急にお目にかゝりたさ。故意々々尋ねて參つたもの。爾う云ひついで下さんせと



云ふ聲聞えて主個は立出で。「此方はついぞ見なれぬ女中。鬼藏といふは私がこと。何んの用でと問ひければ。件んの女は會釋して。「はい私しは又六の。女房はつでムります。此方の人が意氣張て。お前の抱への遠山どのを。身受けせねば男が立たぬ。死なねばならぬと現在の。女房の私しへ向ひ。手を合はさぬ計りの頼み。最う能々の事であらふと。愷氣はどこへかいとしようなり。お恥かしい事ながら。着類は元より朝夕に。無ければならぬ道具まで。活却なしてやう／＼に。其身の代の百兩を。調へて参りました。ちつとも早く遠山どのを。連れ歸つて此方の人の喜ばれる顔が見たさ。大津から一と走り。夫はさうと又六どののは。當家に居られますかと問へば鬼藏は打點頭き。「世に珍らしい男思ひ。又六どののは今日中に。是非ともこゝへ見える筈其金子渡してちつとの間。あの小座敷に待つて御座れ。「そんならお世話になりませう。能う改めて御覽じませと。お筈はどつかわ財布より。金子取いだせば受取つて。「夫れ禿どもお内儀をおつれ申せと片頬に笑み。仕濟し顔に入りけり。暫くあつて名古屋山三。銀杏の前を誘ひいて。「お名殘惜しいはお道理ながら。人目にかゝらぬ其内に。一先づお歸り遊ばしませと。勧められてもすまぬ顔。「夫ぢやと云ふてあなたを此家に。置き申しては此胸が。「はて扱て夫も暫時の内。お館へさへ呼び申せば。万々年も替らぬ御夫婦。まアちつとの間遠山に。預けお置きなされまし。御父上多京さまは。何時ぞやより清水へ。御願望にて御參籠。尤も拙者と相役の。

輔佐の宗軒が附添ひ居れば。心づかいは無けれども。何を申も彼れは老躰。それゆゑ四つの鐘を合圖に。毎夜々々私しも。彼處へ守護に參る身は。貴嬢さまにも能く御存じ。早や日の没れるに間もなければ。何かと心ろ急きます。お駕籠の者は目立たぬやう。出口に待たせ置きましたれば。あれまで徐々お歩いでと。急き立てられて銀杏の前。手をもじ／＼と行きもやらす。「さア父さんは清水へ。七日の間の參籠も。今宵が丁度御結願。館へお歸りなされと。もう來る事はならぬゆゑ。ちよつとあなたにお暇乞を。「これはしたり契情に。未練な女とお心を。蕙まれさつしやるかど。諫め申せば打情れ。「そんならば過まつた。早う祝言させて給もと。漸々に立出で給ふ。表に武士小腰を屈め。「お檀那山三さま。餘り時刻がびます故。「ア、小文次か迎ひ太義。さアおいで遊ばしませ。供せい。「はッ。打連れてこそ歸りけれ。「怒る折から。柴七が。迎ひにつれて逢州が。何心なく歸り來る。後を跟けても軍藤太。袖を捉へて。「コレ逢州。素知らぬ顔は餘んまり惘慾。難波で悪しくされたのに。性懲りもなくついで來たは。濱荻でなはいよしといふ。返辭が聞きたいばかりじや。角らむ縁の暖簾の。鬼一と口に喰はせて呉れどしなだれ寄るを突き飛ばし。「京の水に染まつても。私が氣隨は矢つぱり直らぬ。ねきへも寄らず手もつけず。そっくり此處へおきせんに。成りそなおやまを呼びなんしと。莞爾笑へば業腹煮やし。「そんなら何うでも汝りや已れに。「お、諄。可愛男があるわいなと。づつかり云へば聞



助雲入。小影を立出で腕まくり「コレ逢州さん此和郎は全躰あいらが仲間のもの。綿屋の二階か瀬戸物屋の。地震の様にびんく〜と。やつつけられちやア稻妻組の。顔が立たぬといふものじや。可愛い男は誰でござんす。夫が聞きてへ聞きてへと。支へる柴七踏み飛ばし。三人よつて逢州を。せちがい掛れば四郎次郎。見兼ねて一と間をむつといで「チ、其色男は此處にいる。云ひ分らば乃公に云へと。云ふ顔を見て驚く逢州「やア四郎さん。お前は大事のお身の上。此處へ出さんす用はないと。止めれば雲八をせわらひ「こりや又仕事替つて来た。今四郎さんと逢州が。迂ッかり云つたが運の盡。わりや遠山が深間ぢやな。全じ家の太夫ゆゑ。肩持つに極まつた。此方の兄分又六の。戀の仇だ觀念しろと。三人等しく打掛れば。遠山奥より轉びいで。逢州もろ共コレ待つた。止めるは孱弱き女業。四郎次郎も唯一人にて。持て餘したる後より。そろ〜石部金右衛門。立出で雲八が。脱いたる下駄を拾ひ上げ。我れと我手に羽織の袖。泥によむしてずつと出で「やい〜此處な無禮もの。此泥下駄を武士に。何んで投げ打ひろいだと。睨みつけられ兩人は。薄氣味わるく尻込みして「投げた覺はムりませぬが。今の騒ぎで大方それは。飛んで行つたでムりませう「黙りあがれ「はい黙りました。播木に羽が生へて。飛んだためしも聞いたれど。下駄に羽翼を生せしこと。和漢に其例未だ見え。拜領なしたる此羽織。泥に汚れた申し譯。奴等一々撫斬りだ。云ふ顔怖々逢州が。差覗いて喫驚な

し「やアお前はと云ひかゝるを。目顔で止めて素知らぬ風情「身は石部金右衛門。名さへも堅い田舎武士。此處等に知つた者はない。さア三人の慮外もの。云ひ置きたい事あらば。今の内に遺言して。夫へ直れと煙草盆。さげて静々坐に直れば。軍藤太は弱身を見せず。そつちが武士なら此方も武士だ。コレ此首にやア骨がある。些つと田舎の侍ひには。齒が立つまいと云ひながら。欺し打に斬りかくるを。ひらりと外して金右衛門。持つたる煙管振上げて。刀を發矢と打落す。處ろをつけこむ雲八が。襟髪捉んで狗のころ投げ。間もあらせず闇助が。差込む手先をぐつて捻ち上げ。撓めつすがめつ金左衛門。其手を見やりにこ〜顔「チ、爾うだ違ひはない。此の手の疵はどうした怪我だ「エ「汝りや元來ひるかんど。去年の五月五日であつたか。祇園へ參詣した時に。乃公が小柄を拘りどつて。逃げゆく處ろを此様に手を捉へて其儘に打捨て呉れんと思ひしが。最う是からは此京へ。決して足は入れますまい。命はお助けお助けと。吹へ面かわくが不憫だから。盗人の思ひのかゝつた。小柄をさすの汚らはしく。此の掌へ突き立て。逃してやかた乃公が顔。もう汝は忘れか。此處等をぞめひて喧嘩をかけ。もがり騙りをまびひろぐな。残りの二人も確かに同類。手にかはるのも力の汚れ。とつと歸れと突放せば。荒肝とられて三人には。言句も出でず躓まる。金右衛門は塵打拂ひ「さアもう此處は是でよか〜。拙者も奥へまからふ程に。何れもくれて立上れば「思ひもよらぬ御厄介。



「ほんにお蔭かげでよい氣味と。喜ぶ遠山四郎次郎。逢州一人不審顔ふしんがほ。四人は奥へ三人は。後に残つて目をきよろ／＼。軍藤太は打落うちおとされて。刀をとつて鞘さやに納め。「飛んだ奴つめに腰折こしられて。張合はりあががつかり抜け。今日は歸つて出直さうと。云ふに闇助氣やみすけの毒顔どくがほ。「いやもう是はほんの災難さいなん。そんなら那彼そのとこが其時の。武士であつたかしら。雲よ一緒に歸らぬか。「乃公りやもうほんど遣わられたで。腰骨こしほねが折れたやら。あいた／＼闇よ／＼。肩かたへかけて行つて呉れ。「いや腑甲ぶが斐ひない奴でゐる。どれ乃公が引ッ立てし。や。こりや大變たいへんぢや。乃公も手がさつぱり利かぬ。「手ならば二本や三本は。折れても大事なけれども。何を云ふても肝心かんじんの。足が無ければ渡られぬ。戀の願ひの尻もつて。腰まで抜けたを見捨てるとは。恩知らずめと叫さけべども。何思ひけん軍藤太。心に首肯くわんき馳はせ出せば。二人の詮方せんかた泣顔抱なみかかへ。跛こひき／＼歸りけり。「早や暮れかゝれば主個しゅこの鬼藏おにざう。忙々いそ云ふに出で來り。「夫れ行燈あんどうに火を點せ。何處どこにのらをかはひて居るぞ。男ども男ども。三條と大津まで。急ぎの駕籠かごが二挺に挺いる。庭口にわぐちから小坐敷せうざしきの。縁側えんがはまで廻して置けど。差圖さずの半ばへ來かゝる又六。「オ、鬼藏おにざうどのか丁度ちやうどよい。最前に女房にようぼうどもが。遠山の身の代しろを。百兩もつて來たさうだが。乃公は路みちで行き違ちがつた。もし此方こなたへと半分聞はんぶんかず。「オ、お内儀うちぎはどつくに見えて。此方こなたも奥で待つてゐる。其の身の代しろの百兩も。受取つて此處こゝにある。今夜は内うちが大取おほと込み。長う短う云はふより。太夫を直ただぐに渡わたしませう。連れてゐれどまがきが

手を。引いていづれば不審ふしんの又六。「これ親方。取込みだと云ひながら。人じらしな事いふ隙ひまに太夫を渡しや受け取らふ。「あゝこれ／＼。人じらしでない是が遠山。廊中くろむちうへも披露ひら目をして。昨日から突出し太夫。今までの遠山は。名古屋山三さまといふ。歴れきつきとしたお侍さむらいが。三百兩で身受けが濟なんだ。ありや是れまでに大分の。金を儲たくわけて呉れた女郎にようぢやう。此方の様子素寒貧すくせみな。處へやる氣は乃公もないと。いはれて又之面めん色いろかへ。「そんなら何んで百兩の。「金取つた其替そのかわりに。此遠山をやるからは。云ひ分わらふ筈はずはないと。鬼藏おにざうは後ろを振返り。「駕籠かごが來たなら此太夫を。大津まで送おくつてやれと。まがきを奥へ突つやれば。又六は性根せうねを据すへ。「汝なりや山三と云ひ合あはせ。乃公を一杯はめ居つたな。「あゝこれ／＼。名は鬼の字をつけて居れど。佛ほとけの様な此鬼藏おにざう。吝けちり聞きいことはせぬ。此地こゝを毎晩まいばんでめく此方こなた。こちらへは一度も取らず。どの遠山に執心しやくしんやら知らふ筈はずは無ない道理道理。云々の遠山と斷ことわはらぬのが。其方そなたの無念むねん。黙もくつてゐるは此金子こゝねが惜おししくなつた又六どの。百兩ばかりの目腐めくれ金かね。三拜さんはいしたら返してやらう。云ひ捨すて奥へ行かんとする。堪たり兼ねかねて又六は。ぬぐ手も見せず後ろ袈裟けさしや。あつとも云はず仆たれ俯ふす。鬼藏おにざうが胸ぐら搔かいつかみ。直ただぐに突込つぎむ止めの刀。機はたに立出る女房にようぼうお筈はず。此躰こゝろ見るより膝ひざわな／＼。又六きつと奥おくを見返みかへり。「己れ山三め一と打うと。馳はせゆく先を。「まア待つてと。立身たちみで隔へたつる女房にようぼうを。「邪魔じまひろぐなど引き退ひく。裳もすそに纏まとはり縋すりつき。「これ急いそかしやんすな此方こなたの人。山三は



戻つて奥には居ぬ。「エ、遅かつた口惜しい。」よし又奥にいるにせよ。先は武士お前は町人。萬一の事があつたなら。お年寄られた祖父さま。私しは何んとなりませう。又平はよい子を持つた。仕合せ者ぢやと褒められた。お前が不圖した事からして。俠客の仲間へ入り。明けても暮れても喧嘩口論。餘りの事に祖父さま。御意見はなされねど。彼奴は諸所鳴り歩るき。雷の様な奴ぢや。何處ぞで雲を踏み外し。落ちて後悔し居るであらふ。乃公が渡世の浮世繪の。大鼓を落して狼狽へる。雷がよい手本ぢやと。祭りの燈籠を書かしやんす。序でにお前の其着物へ書かしやんした雲に稻妻。ひけらかす爲ぢやんせぬ。何うした譯か遠山の。身受けをせねば男が立たぬ。乃公は生きては居れぬと。女房の私へも明して頼み。もう能々の事であらうと。思へど大枚百兩は。私の手では出来難く。親父さまへ云ふたらば。死ぬ程の事ならば。何うかして遣らふてう。私しの物は云ふには及ばず。妹の小春が着類きそげ。家財貨財も質入れして金子調へた甲斐もなく。短氣を出して人を殺し。山三とやらまで打果たれば。男が立つかは知らねども。餘んまり夫は胸慾ぢや。些つとは親や女房の。心にも成つて見やしやんせと。口説き立てられ又六は。腕撲ぬいてるたりしが。打首肯いて立上り。死骸の懐ろかい探り。百兩の金取出し。「さア其身代金百兩を。戻すが薩つぱり遠山を。思ひ切つたといふ印。親父さまにも妹にも。安堵するやう云ふて呉れ。乃公も一緒にゆきたいが。今歸つては不審が立たう。素知ら

ぬ顔で仲間と連立ち。今夜は此處等をぞめいてるやうと。云ひつゝ人に知らさじと。死骸を暖簾に押しくるみ。下屋へ踏込めばち箸は少し。落ち着く胸を撫下ろし。「山三に逢ふても必らずども。氣早な事して下さんすな。親父さまの書かしやんした。其雲から落ちぬやう。」應さ。人の見ぬまに早う行きや。「あい。明日に戻つて下さんせと。心残して立歸る。折柄人音又六は。疵もつ足の氣味わるく。小影へちよつと身を忍べば。庭の切戸を押開けて。並んで昇出す二挺の駕籠。「其方の駕籠は三條か。こつちは大津八丁だど。云ひつゝ遙か行き過ぐる。後ろに徐々立出る柴七。こなたに又六忍び足。「今駕籠昇が三條と。云つたは確か山三が屋敷と。倍と見やれば柴七も。芝原笑つて小膝を打ち。「こちらの駕籠に大津八丁。あとぼつかけて。「チ、爾うだと。兩人一度に尻端折り。飛ぶが如くに駆けりゆく。「人音無ければ四郎次郎。遠山つれて板折戸の。影よりそつと延上り。「又六とやらんが素振。心得難く思ひしゆゑ。空駕籠を昇せてやつたを。案に違はず追ゆきし。さア此隙にちつとも早う。大夫來やれと手を引いて。密かに其場を立去りけり。「早や日も暮れてほのゝと。月さし昇る田圃道。息を計りに又六が。其駕籠待つたと息杖奪いとり。當り次第に薙ぎ立つれば。やれ暴れもの氣狂ひめと。叫きながらに駕籠昇は。駕籠打捨て逃げてゆく。仕澄したりと又六は。息杖からりと投げ出し。「これ遠山。親方鬼藏と同類になり。よう偽物を突きつけたな。さア其恨みを云ひに來たど。垂押上ぐれば新造ま



がき。「私しやお前に恨を受けける。恨はさつぱりムんせん。堪忍してと願ひ居る。」ホイ南無三寶又違ふた。エ、口惜しいと見返る此方の。小徑を傳ふて柴七が。「チ、イ、又六さま。駕籠が違ふた間違つた。此方の戀人遠山さんの。乗つた駕籠は乃公が止めて。コレ此處へ昇せて來た様子があつて此つちらで。入用なのは其まがき。損徳なしに替へてやらふ。」チ、夫は此方も勝手だど。云ひつゝ又六こなたの駕籠へ。立寄らんとしなければ。内よりばつたり垂刎ね上げ。思ひも寄らぬ軍藤太。手に種が鳥携へて。筒先づゝと差付けられ。流石の又六仰天して。飛び退く此方に柴七が。相圖の呼子吹き鳴らせば。其處の稻叢彼處の木影。忍び打扮の侍ひ大勢。各自に白刃抜きつらね。押ッ取り圍まれ又六は。尻ひん捲つて撞乎と坐し。「何意趣あるか知らねども。卑怯未練な飛び道具。只つた一人を仰山らしく。浮れ鳥の里打扮。悪く羽叩きひろぐが最期。片ッ端からしめ殺すぞ。」まア駕籠から出たお若衆の。顔はどうやらチ、夫々。汝りや仲間て居た權太でないか。「いかにも權太だ。我れ誠にさいつ年。打亡ぼされ給ひたる。赤松満祐の家來。篠垣軍藤太と云へるもの。下賤の者に立交り。様々阿呆を盡したも。一と器量ある人を尋ね。味方に頼まん皆な計畧。武術に達せしのみならず。並々ならぬ汝が魂。夫を見込んで取捲かせた。血判しやれと懷ろより。連判狀を取出す。其隙に柴七は。まがきを勦はり駕籠に乗せ。眼を配つて附添ひながら。「某ことも赤松どの。御身近く仕へたる。廣庭柴五郎と

云ひしもの。此まがきこそ御主君の。遺紀念の小百合姫。落城ありし其後は。乳母の下に御在せしが。悪漢に誘拐され。茨木屋におはす由。漸々に聞き出し。我も彼處の下男となり。折を見合せ奪ひとり。此姫君を守り立て。足利家を打亡ぼし。元の如くに赤松の。お家再興せんもの。思ふに幸ひ大津まで。送りの駕籠に追ひつきて。内を見れば人はなし。折ふし夫なる軍藤太が。汝を味方に加へん手配り。折こそよけれと其駕籠にて。其處へ騙かり寄せたれば。所詮叶はぬ網代の魚。鬼藏を殺せし上からは。汝は最早罪人なり。とても死ぬべき命なら。赤松殿の御内となり。戰場へ出て功名しやれど。聞く度々に驚く又六。「各々方は大それた。納まる御世に干戈を動かし。謀叛人の味方には。否だと云はれ火蓋を切らふか。」さアそれは。「汝が父の又平は。故主の領地美濃の國。不破の里の生れと聞く。左すれば縁の無きにもあらず。さア、何うだと軍藤太が。筒先向けて詰寄すれば。又六それには目もかけず。己れが着物に畫がいたる。彼の雲に稻妻を。月の明りにつく。見。「親父さまの此お筆。雷の様なものぢやと。御仰つたを用ゐぬゆゑ。別に此身に迫つた難義。此稻妻の雷光石火。敢なく此處に消へんより。其雷になりあふせ。名を轟かすか踏みはづして。雲から落ちるか二つ一つ。成程一味致しませうと。指劈さいて一卷へ。血判すれば軍藤太。圍みを引かせ顔を柔らげ。「六角多京が妻の兄。乙月害膳といへるもの。其子牛三と密かに計り。多京を失ひ國家を。横領なさん下た心。我れ



之を知る故に。一旦彼等へ味方と見せ。後では乙月親子めをも。失はんは兼々計策。幸ひなる哉六角多京。清水寺へ參籠し。未だ彼處にありと聞く。赤松殿へ奉公初め。汝之より忍びゆき彼奴めを只つた一と打にと。聞いて又六打ち首肯き。「赤松どのに仕へれば。今日より乃公は侍ひに。苗字が無くては叶ふまい。故郷の不破を氏として。人半分にも成り居れど。親の意見を其儘に。いに半と書き。今より不破の伴左衛門。兼て意趣ある山三が主人。多京の首は今宵の内にと。突つ立ち上れば柴七は。思案の小首傾けて。「多京に附添ふ輔佐の宗軒。老人ながらも功の者。遠山への文通にて。常々見知つた四郎次郎の。偽せ筆の手紙をかき。彼の宗軒を呼び出すか。左なくば自滅をとらする工夫。これ斯々と又六と。呷き點頭く其折から。早や撞出す初夜の鐘。「時刻が延びる早や行けど。後ろに急ぎ立つ軍藤太。伴左衛門は悠々と。お急ぎなさるな酸漿を。もぐより易い白髪首。どれ徐々とやらかそうか。「六角多京は常々より。清水信仰なりければ。音羽の瀧のほどりへ寄せ。新たに坊を營ませ。七日籠りの今宵は満願。近習の武士は遠く退け。傍には輔佐の宗軒一人。二階の障子押開かせ。さし入る月を眺めながら。心細げに吐息をつき。「コレ宗軒。武士のあるまい佛いじりと。愚痴なやうにも思やらふが。全く以後世菩提を。願ふばかりの慾ではない。如何なる事か此多京は。兎角我子に縁薄く。獨りの男子宇多之助は。若葉の前と嫁せて。阿野の家を繼がすべき。言約束はなしたれども。宇多

之助が身持放埒。剩さへ室町どのより。預け置かれし寶の掛け書。徽宗皇帝の鷹の一軸。失ひし故上への云ひ譚。尋ね出す夫まではと。勘當はしつれども。何處に何うしてゐる事かと。心に忘るゝ暇はない。娘銀杏は孝行に。して呉るれども是も又た。聳にとるべき四郎次郎。契情狂いに身を持ち崩し。まだ婚禮も取結ばず。年老いながら一ち日も。安堵の思ひをせぬといふは是も何その前世の宿業。所詮逃れぬ事ならば。此身の生命をめされてなりと。悴や娘の身の上を。守り給へと佛へ立願。必らず笑ふて呉れやんなど。ほろりと泣けば宗軒も。全じ思ひに打濕り。「御意の通り人中で。口へこそ出さねども。切つても切れぬは親子の絆。拙者の悴百合之助。子を褒むるにはあらざれど。づんど利發の生れつき。未頼もしく存ずる内。此奴めも彼の傾城といふ。古狐に魅こまれて。魂が入り替り。お國許にて是非なく勘當。仰せの如く今頃は何處をうろつき居る事と。存じ出さぬ日とは無しと。云ひかけて氣を取直し。「由ない事を申出し。御看經の大きな妨げ。最早午夜も打ちましたれば。何時もの様に御讀經と。勤めに多京は坐を立上り。「汝の悴百合之助。まだ部屋住にて我領地。近江にばかりありし故。逢ふたる事は無けれども。武藝勝れし若者と。噂は兼て聞及ぶ。若氣の至りの遊所通ひ。左まで落度と云ふにもあらで。行衛を尋ねて勘當許し。山三と心を合させて。悴や娘の力となり。我亡き後も六角の。家に過ち無きやうにと。仰せにはつと宗軒は。疊に額を摺り付けく。「難有く御意の



起き。悴に申し聞かせなば。嘸かし満足仕らん。今宵は那奴もどこぞでか。佳い夢を見て居りませう。早速在家を尋ね出し。「ナ、連れ來つて乃公に逢はせい。宗軒後にと障子を立てきり。多京は一と間へ入りにけり。折から廣庭柴五郎。奴姿に打扮ちて。坊の門を叩き。「宗軒さまへ急のお使ひ。開けて〜と呼はれば。内より門番大聲にて。「山三さまの割判が。無ければ此處は開けられぬ。先刻もひよつと蕎麥喰ひに。表へ出た内どうやら人が。這入つた様など蕎麥腹へ。大きな目玉を喰うたど。聞いて表の柴五郎。「そんならば此狀を。宗軒さまへ渡してと。門の透より差入る。聲洩れ聞えて二階の障子。開けて見おろす宗軒が。「それこなたへ狀受取り。「なに〜。命にもかゝる大事候間。阿濃寺まで御越し下さるべく候。宗軒どの。阿野の音信。ふうと暫らく思案を廻らし。手摺へ凭れ門の外。そと見下して聲を密め。「何事かは存せぬども。山三が斯れへ参り次第。早速宗軒参ろうと。音信どのへ申上げよと。云ふに表の柴五郎。「あなたと直きに御全道。申して歸れと吳く御意。お返事がムらねば。お目にかゝつた其印に。何んであらうと音信さまの。御存じの物を一と品。お貸しなされて下されと。望めば宗軒打首肯き。「それ紋付の此の笄と。投げやれば受納め。二た足三足行き過ぎしが。取つて返して二階を見上げ。「一と先づ此事申上げ。丹波口までお迎ひに出で居りませう。夫にも貴下のお目印。お提灯を一と張りと。誠しやかに云いければ。「ナ、能く氣がついたッレ門番。此宗軒が提灯を。

堀の上から貸してやれと。云ひ捨て奥へ入りければ。柴五郎は件んの提灯。受取つて押開き。「月に鳴子は保佐の定紋。旨い〜と獨り言。元來し道へ引ッ返す。暫らくあつて九つの。鐘鍋々と響く時しも。二階の内にてはつさり太刀音。ばつと血煙忽ちに。障子も朱に染めなせと。知る人更に無かりけり。



詠染逢山鹿子初編 終

詠染逢山鹿子第貳編序

今棒づくしといふ、替唱歌にうたふ、大津繪盡を初  
 編の畫題に載たり、なほ是に似かよひし曲子ふる  
 くあり、松の落葉古來中興踊うた百番のうち、第七  
 番に、大津追分繪といへるあり、こゝに抄出す、二上りの  
 ぼりくだりの目につく姿、露の命を君にくれべい  
 追分のたるま繪、鬼に衣はそげたもをかし、座頭は  
 らひに犬がほえつく、猫が三味ひく、酒のむ奴、愛宕  
 まるりに袖をひかれた、だてな若衆が鷹手にすえ  
 て、ふれやれく、大鳥毛、浮世のんせい、ふんらんら



ん、しんらんどんらん十三佛、かけ針くけ針たゝみ  
針、いけのかわ、菅笠より棒に十露盤つぶ、關の清水  
はうき名所此書寶永七年の印本なり、古來中興と  
あれば、寶永に新たに作りたるにはあらで、なほ古  
き踊うたなる事論なし、是によりて今の棒づくし  
は作りたるか、又暗合歟、此冊子に因ある曲子なれ  
ば、こゝに載て序にかふるになん、

文政十四年辛卯孟陽

柳亭種彦

詠染逢山鹿子第貳編

柳亭種彦

伴左衛門は多京を打取り。首搔き落して左りの手に。髻を搔いつかみ。右に白刃を提げながら  
二階を直ぐに山つたひ。音羽の瀧にて刃の血汐。洗い濺げる其の處へ。かくとは知らず名古屋  
山三。衣服を改め今宵も又た。宿直に急ぐ三年坂。早や打過ぎて清水なる。伴んの坊の前に佇  
立み。こりや小文次。今打つたのは九つぢやな。茨木屋にて思はぬ手間どり。喚ぞ我君にもお  
待兼ね。早や御讀經充てたるか。お聲もたしか聞えぬやうな。身を淨めてお目見せん。こり  
や可内。其提灯を瀧の下へど。歩みよりつゝ手を濺げば。小文次は透し見て。「や。貴君のお袖  
へかゝりしは。確に血汐と立寄るにぞ。山三も驚き振りあほのき。きつと見やれば入る方の。  
月にきらめく氷の刃。逆手に携へ見下ろす曲者。シヤごぞめれと名古屋山三。股立信と押ッ取  
り上げ。石坂四五段馳け上れば。伴右衛門は飛んで下り。二つになれと斬りつくるを。さしつ  
たりと身をかはし。手取りにせんと組付くを。後ろへ避けて突つかくる。並ならぬ手練の斬  
ッ先。無刀のあしらい敵し難く。山三は手早に肩衣刎ねのけ。折合せて丁と受止め。發矢々々



と斬結ぶ。太刀先餘つて石段を。打てば火花の飛び散りく。磯邊の千鳥花の蝶。優らず劣らず身も軽く。或ひは追いゆき追ひ戻し。雲時勝負の見えざりしが。伴左衛門は氣を焦ち。附け込む機みに石坂を。踏みこつてころく。轉ふを打つは安けれども。搦めて穿議をせんもの。山三も刀からりと投げ捨て。續いて下へ飛び下り。伴左衛門を取つて伏せ。下緒たぐつて小手捻ぢあげ。既に搦めんとなしける時。山三の侍ひ小文次は。音羽の瀧へ攀上り。はつと計りに仰天し。「やア大殿にはお打たれなされ。此處に敢なき御ノ首と。提灯かゝけて差出せば」と云ひつゝ見上ぐる山三。嘆きにゆるむ手を刎ねのけ。「大篋坊の名古屋山三。其處で悠ると吠へて居ると。悪口なしつゝ逸足出し。行衛も知れず逃げ失せけり。山三は無念の拳を握り「思ひも掛けぬ殿の御最期。性根亂れて組しいたる。仇を暗々逃せしか。チエ、口惜しやと向ふを見詰め。突立つ足に觸りし」と品。「提灯近うと手を取上げ。「ふう今曲者が懷中より。取落したる帛紗包み。中には片足の此草履と。云ふ間小文次下り立つて。「こりや貴郎かお召しがへ。お供を割つた慮外もの。拙者が打擲致した時。彼れが額を打破り。思はず血汐に汚せしゆゑ。其儘其處へ捨て置きしが。確に是はその草履。なう。何は兎もあれ彼の曲者。まだ遠くは逃げ居るまい。跡ぼつかけて一と穿議。汝は此處に止まつて。宗軒どのに面會なし。我に代つて寺中の吟味。油断するなど件んの草履。山三は把つて懷中なし。跡を慕ふて追ふてゆく。」寺中の騷

ぎ大方ならず。何思ひけん手を拱き。物をも云はざる宗軒を。中に取込め近習の侍ひ。大勢が聲々に。「兼て貴殿の存じの如く。御讀經の妨げと。遠く宿直を致す我々。お側にくるはこなた計り。さア殿さまは何者が。切害致した様子が聞きたい。何せ押黙つてムらつしやると。口々に問ひければ。宗軒漸く顔を上げ。「申譯には似たれども。御修法の其内は。某とても二た間三間。隔てゝ守護を仕れば。其の曲者の面躰も。「すりや御存はムらぬか。ホウと計りに諸武夫。呆れて顔を見合はす折柄。遙か末座をにじり出で。「私し事は名古屋が家來。赤羽小文次と申すもの。箇様々々の次第にて。主人山三曲者の。後を追かけ參つたれば。押付け捉へ參るべし。まつた此坊中に。彼の曲者を手引の奴。忍び居らんと存せしゆへ。殿の御首は寺預け。隈々穿議致せし處ろ。此處等に目馴れぬ蓮葉な女。如何なる仔物か此下た家に。躲れ忍んでいたゆゑ。則ち召連れ參れりと。突出されて逢州は。齒の根は合はず身はがたぐ。もうく私其様な怪しい者ではムんせぬ。そんなら何故に隠れて居たと。お疑ひもあらふけれど。私しが勤めの其内に。云ひ交した大事の男。その男の父御さんが。此坊に來てぢやけれど。勘當受けて居やしやんすれば。表て向ては逢はれぬ程に。せめてはお顔を餘所ながら。拜みに乃公も押しつけ行く。手前は先へ行んで居ると。教へられて廓を走り。此處へ來ても這入られず。うろつく内に奴どのが。蕎麥屋をよびに迂ッかりと。あの門を開け放し。是れ幸ひと忍び込み。隠れて居



たうち何やら騒動。もう勘忍して下さんせ。主は何處にムんすやらと。云ふもあろく宗軒は  
ほくくど打首背き。多寡があどなき傾城遊女。なに曲者の手引をしやう。疑ひは無いほどに  
氣を落つけて此處へ來い。して又其方が云交した。男の名は何んといふ。さア是れ御覽じてと  
差出す簪。「ふう是れは百合の花。」扱は和女は陸奥の。「あいなア。」云はで忍ふぞ得ぞ知らぬ。ゆ  
りどやら云ふ名は知らぬ。「エ、知らぬとはお情けない。現在あなたの獨りのお子。」下た家に隠  
れてないて居れば。「勘當許るせと難有い。殿様のお言葉でと。云ひかくるを押止め。「はて許す  
には折がある。見かへる此方噪がしく。又も追々侍ひども。駈け來つて大息つき。「仇を尋ぬ  
る手掛りもと。尙も穿議を遂げたる處。裏手の堀を斫破り。忍びこんだる傍らに。落ちてあつ  
たは此提灯。又殿様の御最期の。其場に落ちたる筈と。渡せば各々立寄つて。「此提灯も筈も。  
月に鳴子の紋どころ。宗軒どの。此りや貴殿にも疑ひがと。詰寄り詰めよる近習の武士。「チ、  
其云ひ譯は先づ斯うと。脇差抜き持ち宗軒は。腹へぐつと突立つれば。「コワ何故と驚く逢州。  
手負ひはほつと息をつき。「扱は最前音信まゝ。使ひと云つたも廻しもの。先づ云々の次第にて。  
欺き取られし其二た品。假令へば殿を打つたりとも。お家に執權ある内は。事成就し難しと。  
悪人原の皆計らひ。家中の者に疑ひ起させ。此宗軒に自殺させん。巧みの篋に陥るは。何ぼう  
か口惜しけれど。名古屋山三がある内は。氣遣ふ事は曾てない。今宵も今宵我悴。百合之助勘

當ゆるし。呼び戻せよとの殿の御意の。其處等に由縁の者あらば。云ひ聞かせたい者なれど。  
彼れが心を亂したる。契情にはどうも云はれぬ。夫ぢやによつて得ぞ知らぬか。な。知らぬ女  
中。くよく泣いてムらずと。百合之助といふ者に。もし逢ふ事もあつたなら。勘當許して得  
さする程に。汝は今まで國住居。家中の者も顔は知らぬ。是れ幸ひの事なれば。姿を扮してお  
家の仇。見出して功を立て。保佐の苗字を引起せと。能々傳へ下されと。云ふさへも最と苦し  
げなり。逢州涙に正體なく。「あい其事を云ふたなら。喜ばれるでムんせうと。わつと取つき泣  
きければ。近習の侍ひ聲を揃へ。「之より貴殿の忠心を。知らざる者曾てなし。證據に惑ひて疑  
ひしは。我々が智の至らぬ處ろと。後悔面に顯はれければ。小文次も膝を進め。「御生害あらず  
ども。何ぜ云い譯は遊ばさぬ。お疵は浅いお心を。確かに持つてと立寄るを。宗軒は拂ひのけ  
「今諸士の云はるゝ如く。お側に居べきは我一人。敢なく殿を殺害され。何面目に生存へん。さ  
ア何れも疑ひの晴れた上は。此處に守つてムらずとも。御死體を取り隠され。館へ歸つて御  
世繼の。評議あるのが肝要ぞと。人々を追立てやり。「あゝまだ云ひたい事あれど。息がはづん  
で云い悪い。幸ひのあの花活。慮外ながらそが女中。其れ一と口吞ませてと。云へば小文次差  
出で。「いや手負ひに水は禁物と。押とむれば頭を振り。「所詮生きぬ此身體。嫁の手づから未  
期の水。もう誰にも遠慮はない。早うく望まれて。親子の縁のうすばたを。涙ながらに携へ



もち。「賤しい此身を冥加ない。嫁と御仰る一と言が。直ぐに此世のおわかれとは。餘んまり果敢ない父様と。顔ふ手元に溢るゝ水。二た口三口宗軒が。莞爾と笑ふて言葉はなく。其儘息絶へにけり。」叢雲に月は隠れて路くらく。歩み悩みて四郎次郎。音信は立止まり。「こりや頼助手前はまア。眠りながら途を歩んで。提灯もちが後へ下ると云ふとが。何處の國にある者か。そして太夫は何うしたと。云はれて頼助目を覺し。「南無三寶遠山さんは。何處へかどんと落ちて仕舞ふた。いや待てよ後の村で。一膳めしの行燈を。尻目にかけて見られたが。てつきり腹が空いたゆゑ。あの美しくしい顔に似ず。汁かけ飯をぎつくどく。搔ッ込んでムるか知らん。一體まア此方衆が。夜る夜中乃公をつれて。こりや何處へ走るのぢやと。問へは音信小聲になり「手前の主人名古屋山三。あの遠山を受出し。乃公も共に下屋敷へ。隠して置いては呉れたけれど。多京どのの妻の兄。乙月害膳といへるもの。我を打たんと計るよし。頼みに思ふ山三のは。主人の仇穿議の爲め。知つての通り此頃旅立ち。さすれば足をどめ難く。此處は近江の上村。乃公が知己のものあれば。夫を尋ねて忍ぶ所存と。聞いてくつゝ吹き出し。「旅は愚か山三さまが。唐天竺へムつても。後には吾に聞へたる。此頼助がついるれば。大船までは行かずとも。にたりか猪牙へ乗つたと思つて。ハテおてついでムりまし。夫をくるゝ三井寺の麓を廻つて薄氣味わるい。此處等を舞ひくしあるくは。私しを阿呆と云はんすが。お前の方

が大きな阿呆。サア戻らんせ戻らんせと。歸るを音信引止め。「其正直を山三が見込んで。遠山に和男をつけ。久しい馴染といふてもないが。阿呆とと比頃うち。呼んだはほんの心安う。思ふての事なれば。氣に懸けずとも供してたも。あれく向ふに燈火の。影の見ゆるは人の住居。那處に暫時待つて居や。太夫がはぐれて嘸ぞ途に。難義して居るであらふ。何處か尋ねて連れて來うと。元來し途へ引ツ返せは。頼助は目をきよるく。「是れは又情けない。乃公獨り捨てゝ置いて。怖うはないが何んぢやいら。襟元がぞくくすると。後ろを見返り振返り。やうくにして燈火の。影を力に歩みより。「嬉しや此處に家がある。ハイちと御免なされましと障子あければ眞ン中に。人丈計りの閻魔の像。旗天蓋を飾り立て。微かに照らす燈明の。影に見ればおどろの白髪。振り亂したる一人の老女。「誰殿ぢや誰ぢやと出で來るにぞ。頼助はつと躓まり。「やア情けないいつの間に。乃公や死んで此の處へ來た。はいく洗濯してたつた二度。着ました布子もあげます。三途河のお婆さま。何うぞ私しは極樂へ。お遣りなされて下さりましと。大聲あげて泣きければ。老女は莞爾と打笑ひ。「此庵室に世を逃れ。髪をおろして居たけれど。去年の夏から長の病氣。此様に白髪も延び。顔も衰れて居る故に。もう畏ろしう見ゆれども。私しは麻生と名をよんで。元は都で武家奉公。怖い者では無いほどに。何んの用てムんしたか。さア氣を靜めて云ふたが宜いと。云はれて徐々顔をあげ。「爾う御仰ればだう



やら些つと。人間の様でもあり。油断をさせてもらんかアと。必らず脅して下さりますな。別の用でもムいませぬ。宿を出たのは三人ンきり。御覽の通り私は機轉の利いた生れなれど。後の二人が鈍なゆゑ。途にはぐれて三人ンばら〜。今に後から見えますまで。「待合せてゐるのか夫は何より易いこと。お連れが尋ねてゐたら。案内なしにあの〜間で。悠〜くり休んで行くがよい。せめてお茶でも進ぜたいが。折悪しう火は消へる。チ、幸ひと此處に酒。冷でも大事ないならば。一杯參れと徳利ごと。差付けられては〜顔。「夫は何より大好物。お辭儀なしにど茶碗に波々。飲まんとせしがわつと飛びのき。〜そらこそ愈々も〜んがア。化けの正躰顯はれたり。酒と名づけて血を呑ませ。命を取らん計策。爾うは行かぬと弱味を見せず。肘は張つても色青褪め。わぢ〜震へて居たりけり。麻生も溢れし酒の色。差覗いて不審晴れず。「經春は何してゐる。此酒どこで買ふて來たぞ。呼ばれて同宿經春は。一と間を立出で打笑ひ。「様子はあすこで聞きましたが。これは斯うでゐります。晝間大津で此酒を。買ふて歸る途ついで。浮世繪かきの又平が。處へよつて十三佛の。掛畫の注文する内に。店へ置いた其徳利。確にあつちで繪具に使う。煮じ蘇紡の徳利と。取違へたでゐりませうと。語るに麻生は打微笑み。「ほんに此方はいろ〜の。事で喫驚さつしやつた。お連れが見えたらこつちらへ。經春はその徳利明日戻してやるがよい。南無阿彌陀佛彌陀佛と。襖押あけ入りけり。頼助は茫然と。夢見し

心地に居たりしが。立上つて獨り言。「いやはや飛んだ目に逢つた。生中に徳利を。見たので虫がぐ〜鳴く。何處ぞへ行つて飲んで來よう。叱言たら〜行く向ふへ。取つて返せし阿野の音信。「頼助手前は何處へゆく〜はい。煮じ蘇紡で無常が起り。酒屋を尋ねに出かける處ろお前は向ふの庵室で。悠〜くりと待つてゐれ。私が能々頼んで置いたと。眞一文字に走りゆく音信は聲をかけ。「コレ遠山が何ふも見えぬ。ま一度手前尋ねてくれ。何を云うても他愛のない困り果てた阿呆ちやと。云ひつゝ庵の前に來り。「手前家來が御庵室へ。申入れ置いたる由。連れ待つ程は御縁の端へ。「さア御遠慮なされずと。此方〜〜と障子越。主個と覺しく老女の聲。「然らば御免と音信は。彼の庵室へぞ入りける。程なく來たる乙月牛三。家來引連れ蚤取眼。「こりや〜雲入。其の方は新參ながら。心利いたる壯者ゆへ。斯様な密事に召連れた。随分油断のないやうに。「お氣遣いなされますな。又之も侍ひに。なつたと云ふ噂を聞き。羨ましくてあなたへ奉公。稻妻組の雲の字を。其儘に岩波雲入。茨木屋で見知つてゐる。四郎次郎めが此方のほうへ。來たのを見付けてあなたへ注進。那奴をばつきりやつて仕舞へば。あの美くしい銀杏の前と。あなたは珍々鴨の味。從弟合せて六角の。家を取るとは旨いものと。稱賛し立てられ牛三はぞく〜。「さうさへなれば親父さま。害膳どのも嘸ぞ満足。したが待てよ。乃公は全躰浪人もの。害膳さまの養子になり。早や四五年は過ぎたれども。掟正しい六角家。



奥の出入は宥免なし。夫じやに依つて乃公さへも。顔を知らぬ銀杏の前。あの美しくいとお見たやうに。手前が言ふのは合點がゆかぬと。問はれて雲八近くより。「其御不審は御尤も。それも何時そや茨木屋で。彼の軍藤太の肩もつて。逢州の歸りを待ち。小影に隠れて居た時に。山三の連れて歸つた娘が。銀杏の前といふ事は。御父上宇多さまと。山三が云ふたで扱こそ之れかど。よう顔を見て置きました。一躰山三は又六の。兼て意趣ある奴なれど。強さうな武夫ゆえ。素知らぬ顔で歸してやり。四郎次郎めにかゝつた處ろが。得知れぬ奴めが出しやばつて。投げられたぢやないツイころ。轉んで手酷く腰骨を。碎いた恨みの音信めと。大聲あぐるを押止め。「これもう宜いわ靜かに云へ。幸ひ此處に柴の庵主。家來參れど牛三はずつと。葉の門へ近く進み。ちと物が尋ねたい。年の頃は二十三四。眼の内涼しく色白なる。男は此處らで見かけずやと。問はれて麻生は網戸を開き。「チ、お尋ねの四郎次郎音信は。」と問へ寝かして置きました。と云ふに牛三は打驚き。「すりや我々が密談を。」おいのう。庭の阿迦井を汲みながら。はて耳よりの話ぢやと。「聞いたら生けては置かれぬと。刀抜く手をちよつと抑へ。「ホ、由縁關係もない音信。何んで私がお前方の。巧みを兎や斯うと云ひませう。品に依つたらお方に。「ふうすりや手引して打たするか。「いやもう手引するまでもなく。私しが欺して只つた一打。骨折代の布施物次第。引導渡すは尼の役。「面白い。此差副は文珠四郎。是で見事に仕留

めて呉れど。牛三が差出すと腰を。麻生は受取り帯締上げ。「助太刀されては手柄が見えぬ。那の簀影に身を忍び。遠くから見てムりませ。精進酒の腹直し。しめ鳥一羽料らふかど。足音殺して窺ひよる。障子蹴放し阿野の音信。「エ、老耄め。親切らしく見せかけて。心を許させ欺し打。扱は己れは盜賊ぢやな。手並を見よと脇差の柄に手をかけ立上れど。深傷によわつてよろ／＼。透めく處ろを有合ふ衝立。麻生は取つて音信の。上に押かけ足下に踏まへ。「何んぢや私を盜賊ぢやホ、こりや可笑しい。剃いだ處ろが素紙表一枚。寢酒の錢にも足りはせぬ。後世より此の世が大切な。我を殺して此婆が。出世をするのを冥土から。見物しやと衝立越し。貫く刃に音信は。膽先をや刺れけん。あつと叫んで息絶へたり。「やれ／＼脆い奴ではあると。白刃の血を打揮ふ。折からうろ／＼立歸る。阿呆の頓助死躰を。見るより又もあつと叫び。「やア／＼／＼化物の。正躰知れた扱てこそ此家は。安達が原の出見世よのう。凄まじや助けてくれ。此處等に人は居ぬ事かど。大聲上げて泣きければ。麻生は脇差後ろへ投げ捨て。猫撫聲の笑い顔。「こな人はいの仰山な。先刻も云ふて聞かす通り。私しは怖いものでは無い此方の檀那はあの一と間で。快よう寝てじや程に。用があるならをこすがよいと。押宥めても頭を振り。「いや私しは怖い者ではないと。なんぼにこはてしやつても。さう云ふ此方の手は血だらけ。こりや的ッ切りお檀那を。「チ、さう知られたら是非がない。只つた今殺して仕舞ふた



「エ、と馳け出す襟髪を。麻生は捉んで引戻し。諸手をかけて咽喉首を。ぐつと一と締め頼助は  
 伝と計り虚空を捉み。大地にハタと仆るゝと。見返りもせず佛壇の。打敷はかして音信が。死  
 骸を押まき延び上り。見切る向ふの藪影を。顯はれ出たる牛三主従。「驚き入つたる老母の働き  
 我大望のよい片腕。是から直ぐに屋敷へ來やれ。「はい難有うムります。何んのこんな小治郎一  
 疋。水瓜を切るより手輕いもの。笑ふ後ろに同宿經春。「もし此水瓜は湖へ。冷して來よう  
 ぢやムらぬか。「チ、よう氣がついた。人の目にかゝらぬ様に。麻生の差圖。「どつといまかせ  
 と同宿は。死骸ひん抱きかけりゆく。牛三愈々笑局に入り。「何から何まで行届く。流石は老功  
 此れ雲八。あなたのお手を取らぬかやい。途があぶない提灯は。拙者が持つてお先立ち。これ  
 水溜りがムります。斯様な事と存じたら。お駕籠を持たせて參らふもの。追従たら。麻生  
 を誘い。主従打連れ歸りゆく。頼助はつと起上り。「あゝ酷い目に逢はせをつた。乃公が咽喉へ  
 手がさわると。あつちで締めぬ其先に。歌舞伎芝居の眞似をして。だアと云ふて仆れたら。死  
 んだと思ふて行き居つた。力があるか劍術が。利いてゐると其儘に。己れ逃しはせぬけれど。  
 どうも乃公には行きそもないと。嘸り上げて泣き居たり。「折もこそあれ遠山は。思を計りに馳  
 け來り。思はず確と行き逢いければ。「南無三婆めが戻つたさうな。乃公は死んだと仆れ伏す。  
 「此方は夫と氣もつかず。「はい。御免なされまし。いかう心の急きましますもの。云ひつゝ顔

を差覗き。「奴どのでは無いかいな。「やア。お前は遠山さん。あゝ遅かつた。」「さアお前に  
 はぐれて彼方此方と。路に迷ふてやう。此人里の燈火を目當に。夫れはさうと四郎さん  
 は何處にムんす逢はせてと。問はれてわつと泣き出し。「お前に云ふも面目ないが。此庵室へ待  
 たせ申し。己りや酒飲みにいんだ内。此處の婆めがお旦那を。酷たらしう斬り殺し。お死骸ま  
 でも同宿に。持たせて何處かへ行き居つたと。聞いて遠山腹立顔。「只さへ私は胸噪ぎ。氣合ひ  
 の悪るいに面白さうなに。あじやらを云ふも機がある。さア四郎さんはどこにぢやと。問詰め  
 られて尙泣伏し。「何んのあじやらを云いませう。其縁側が眞ッ赤になつたを。「ほんにこゝらは  
 血たらけぢやと。走り寄つて遠山は。頼助が胸倉をどらへ。「其仇は何者ぢや。阿呆も程のあつ  
 たもの。現在主人の殺されるを。浮々見物しやつたかど。振廻されておろ。聲。「いや見物はせ  
 ぬけれど。乃公が力にゆかぬ故。死んだ振して仆れて居た。仇といふは此家の主個。名は何ん  
 とやら熊坂の。手下の様ぢやと思ふたが。三國の太郎壬生の小猿。越前の麻生の松若。チ、麻  
 生といふて白髪のは。コレお檀那を殺した脇差。忘れて此處に捨てゝあると。聞く度毎に遠  
 山は。餘りの事に涙も出でず。「何程劍術勝れしとて。多寡が女の瘦腕に。打たれ給ひし御運の  
 末。嘆いて返らぬ年ながら。恚う云ふ事と知つたなら。お側について居やうもの。銀杏さまか  
 ら吳くも。お頼みなされた甲斐もなく。音信さまは恚ぢやと。どう顔向けがなる者ぞ。せめ



て冥土へ追ひついでと。脇差とる手を頼助押し止め。「此處で死ぬのはほんの犬死。銀杏さまへも此事を。文で知らせて力を合はせ。仇を打つのがあなたへ追善。わしを阿呆と云はんすが。お前も餘つぽど阿呆よと。云ひ勵ましてもぎ取る脇差。「是れはどうやら見たやうなど。庵の燈火とり來り。「見た筈ぢや〜。これは檀那山三さまの。お差料であつたのを。お家の伯父御害膳さまが。お望みゆへに上げられる。其おつかいは此頼助。守りに書いてあるやうな。梵字とやらいふ得知れぬ字が。彫つてあるので覺えて居る。銘は何んでも一代の。守り本尊の中にある普賢三郎藥師太郎。そうでは無かつたヲ、夫々。文珠四郎といふ作物。これで仇を。遠山さまと。渡せば手に取り借と眺め。「三ツ子に習つて淺瀬とやら。今死ぬ命を存命て。女の力は孱弱くとも。石に立つ矢のためしに習い。そんなら是れは害膳どのと。「脇差は脇差でも。殺した仇は此家の主個。「麻生と名をよぶ其老女と。突つ立ち上る遠山が。後に窺ふ牛三が下奴。「この脇差をど寄る處を。思はず知らず振上げて。只一と打に下部の首。ころりと落れば遠山も。呆れて尻居にはつたどこけ。身を顛はせて言葉なし。「三本傘の定紋は。「隠れ名古屋が一と構へ。客を設けの青疊。庭に時水潔ぎよく。拭ひ立てたる廣縁傳ひ。主個山三の女房お梶。娘の小雪引連れて。静々と歩みいで。「ヲ、侍女ども太義々々。よう綺麗に掃除が出来た。床へ花も活けやつたか。掛物は三幅ついで。目出たいものを掛けて置きやと。坐に直れば侍女桔梗。「今日のお客

人。麻生様のどかいふお方は。山上村の閻魔堂を。守つて居た尼ぢやとやら。夫にまア大層な御馳走役ぢやのお相客のと。何うも合點がなア野菊。「さいいなア。御馳走役はにいやらしい。あの沼淵の代兵衛さま。あんな者にお屋敷へ。來ぬやうになされたら。宜かろう様に存じますと。思ふた通りを仇よく。云ふをお梶は押しめ。「これはしたりづか〜と。滅多な事を云ひやんな。麻生殿が今までは。假へば非人袖乞でも。何う云ふ仔細か御當家の。伯父御乙月害膳さまの。所へ此頃御逗留。近々近江の御知行所へ。お下りなさる其前に。妾に逢ふて行きたいと。あゝるを捨ては置き難く。知つての通り乙月さまの。お館へ罷り出。此頃五月にかゝつたれば。そちの内へも行かうとは。もう迷惑の事なから。流石に否とも言ひ兼ねて。殿様不慮の御最期ゆゑ。夫山三は他國の不在。行届きかねますと。夫れに假托け断りも。おきゝ入れなく害膳さまのお氣に入りの代兵衛とを。御馳走役やら相客やらに。招んだがよいといふお差圖。随分粗忽のないやうに。氣をつけて呉れやれと。云へば小雪も温和しく。「害膳さまのお入は無けれど。御子息の牛三さまが。御全道なされる筈。目が大きいのお聲が高いと。又こそ〜と云ひやんなと。云懲らされて。「はい〜と。桔梗野菊も投げ首し。後退りする其處へ。案内も乞はず沼淵代兵衛。のか〜坐敷へ打通り。「イヤ名古屋氏の御内堂。其後は打絶へて。お顔を見ぬまにむつちりと。お肥りが參つたは。山三どの、お不在ゆゑ。お毒断と見えますする。相變らず



お庭も坐敷も。行届いた綺麗なお掃除。是と申すも歌連俳。等の道に心を寄せられて。御風流のお氣質が。自然と著はれ何となく。いや奥床しう存ずると。獨り饒舌つて坐に直れば。「そりや又例のいろ目かど。叫きながら煙草盆。直す桔梗をお梶は睨めつけ。三つ指ついて打微笑み」これはく代兵衛さま。何を申すも夫の留守。行届きかねます勝ち。夫をまア結構な。お言葉に預かつて。お耻かしう存じます。貴君こそ和歌の道に。御堪能など申す取沙汰。折もあらば私しの。腰折歌を憚りながら。御添削の願いたく。娘ども常々に。お噂申して居りますと。云はれて代兵衛猶ほ圖に乗り。「いや最うそれは後なき偽り。武藝の事は幼少より。心がけて罷りあれば。畏らく家中の者どもに。手に足る奴はないと存ずる。論より證據害膳さまが。其事を知ろし召され。則ち彼方の御推舉にて。當お家へ新參者。和歌は元より遊藝は。微塵も存せぬ無骨者。せめて妻には風流な。氣量もよくて氣立のよい。何處のか人の様なを。尋ねて見てもハテ無いもの。無いによつて内々で。文探り出してお梶が袂。そつと入るれば振拂ひ。腹立つ胸を押静め。素知らぬ顔にて振り反り。「此處に何やら文がある。そなた衆落しはしやらぬかど。問はれて野菊も空とぼけ。「はい知つたでも知らぬでも。のう桔梗。「さいなア。是れからちよつと見ました處ろが。確に夫は男の手。代兵衛さまが今何やら。味な手つきをなされた時。お袂から落ちたので。云ひかけられて顔色かへ。「いゝや知らぬ且つ以つて。「御存じなければ

其中を。讀んだら主が知れませう。私どもも、面々の。身晴れに奥さま其文をと。侍女どもに立噪がれ。流石の代兵衛行き詰り。横腹押へて。「アイタ、ゝ、頭痛が脾腹へ筋ばつて。痲氣がびん／＼顛頭で。うづいてお坐にたまられぬ。暫らく休息致さうと。云捨て次へ逃げて入る桔梗野菊は小氣味よく。「奥さま以後の見せしめに。那んな奴には思入れと。「恥かゝせるも知つて居れど。武士の廢るが氣の毒さ。私も胸を撫つてゐた。其上今日は害膳さまの。仰せを受けて饗應役。まさか捨ても置かれまい。小雪は皆の者をつれ。お氣合が悪るいなら。お薬でも上げませうと。何氣なく問ふておぢや。汚ららしいが此文を。戻すには折があらふと。お梶はしつかり懐ろへ。納むる折柄庭先へ。馳け來る遠山。「慮外もの。下れ／＼と支へる下部。お梶は遙に聲をかけ。「女を捉へて仰山な。立噪がずとも様子を云やと。問はて下部がカツ突く這ひ「女に似合はず一と腰を。薦にくるんで小腋に抱へ。此お屋敷を窺ふ曲者。夫れゆえ下郎が召捕つてと。かゝるを遠山引ッぱづし。「私の父は故ある侍ひ。家に傳はる此一と腰。譲り與へん男子なければ。女ながらも父の魂。持つて居るのが何御不審。いや夫計りでない御屋敷の。御門をうそ／＼覗き込み。何んでも様子のありそうなど。又立かゝる下部の手先。ちよと拂つて莞爾り打笑み。「様子は宜きに奥様に。申上るに奴さん。あだ世話焼かずと北向きの。馴染の處へゆかしやんせと。恐れげもなくつる／＼と。入り來る庭先大方は。夫と推して静々と。お梶は



縁より下り立つて。「此女子はわらはが預かる。部屋へ歸つて休息しや。さア女中。四邊に入はない程に。様子を妾に云ふたがよい。「はい。様子と申すは此差副。賣つて貰ひ申したさ。どれ抜き放して見せてたも。ふう。是は確に文珠四郎。「お覺えがムりますか。「そんなら是を妾に買ふて。「いえ。此賣先は今日のお客。麻生さまとか云ふお方へ。お取次が願ひたさ。夫でわざ／＼お屋敷へ。「チ、夫は何より安いこと。序でに其方も侍女に。抱へて直ぐに客人の。お話相手に出してやらふ。「エ、エ。願ひを叶へて其の麻生と。突ッ立つ遠山。止むるお梶。「こりや當家の伯父御乙月さまの。大事のお客ぢや。随分どもに。みだらな事の無いやうに。「あい。合點でムんすど。帯引上げて遠山が。見やる向ふの切戸口。乗もの釣らせて乙月牛三。「いやお梶今日は何かと世話であると。すつと通れば手をつかへ。「あなた様まで言苦しい。屋敷へわざ／＼お立寄り。有難うムりますと。いふ間にそろ／＼遠山が。窺ひよつて乗物の。戸を押開けば思ひもかけぬ。銀杏の前を高手小手。「ヤアあなたは。「そなたはど。互ひの驚きお梶は振向き「これ新參の身をもつて。入らざる和女が差出ずと。下りや／＼と遠山を。次へ追ひやる間もな。後よりのし／＼入り来る麻生。お梶はわざと笑顔をつくり。「牛三様へ申す通り。山三館へお入りに預り。お恥かしい先々あれへと。坐を下れば麻生も會釋し打通り。「是は／＼結構なお言葉に預かつて。反つて迷惑致します。尤も以前は去る武家に。奉公も致したれど。今では近

江の堂守婆。した那的なる牛三さま。御親子の御見出しにて。乙月さまのお客分。久し振なる襦袢姿。裙をふまへて轉ばりかど。それは／＼非常の辛苦。これより着馴れた鼠木綿の。袷であるが適に安樂。ほんに私しとした事が。云はいても宜い身の上話。よう饒舌る姿めぢやと篋んで下さるなど。云ふをお梶は聞き流し。「先づ餘の事は差置いて。合點のゆかねはお駕籠の内へ。まだ年若なる女を捉へ。見るもいぶせき縛り繩。どう云ふ仔細でムりますと。人目は云はず餘所事に。問はれて牛三は進み出で。これへ来る途次。林の影より矢一つ來り。麻生どのの乗物の。戸へはへしと立つたる故。家來に吩咐け开首此處と。捜し求めて捉へし女。手に半弓を持つたが證據。夫はさうと代兵衛は。どれに居るぞあの女を。引出して穿議をせいと。呼ばれてはつと次より立出で。「様子は那的にて承はる。麻生さまには危いこと。併しお怪我はムらぬ様子。おめでどう存じますと。追従笑ひをぢろりと見やり。「なんのあんなへロ／＼矢。五本や十本身に立つても。びつくともする婆ぢやない。そんな冗言云ふひまに。女に仔細を問ふたがよいと。麻生が指圖を呑込む代兵衛。「さア女め。麻生さまには何恨み。様子包まず白狀しろと。引据へられて銀杏の前。涙の顔を振仰向き。「はい私しは此ほどの。賤の娘でムんすが父さんが長の御病氣。兎の肝を薬に入れ。吞ますれば本服すると。お醫師さまの話聞き。幸ひ那的なる林の内に。兎の居るのを見つけたゆへ。父の病氣に殺生の。罪も思はず狙ひより



女の手腕の狂ふたそれ矢。どうかお許しなされと。云はせも果てず牛三は睨めつけ。「いや相う  
旨くは扱けさせぬ。汝が手足の尋常さ。殊に姿は扮せども。其のたきこめし衣の香け。中に賤の  
女でない。誠を云はずばそれ代兵衛。骨を挫いで白状させい。「畏まりたど立寄るを。「お梶は立  
つて押し止め。「山三屋敷へ招待せし。麻生さまは大年の賓客。その前にて不吉の拷問。假令へ責  
めよと牛三さまの。仰せがあつても代兵衛どの。あなたが執成なさる筈。夫を否と御仰れば。さ  
つき此處ろで拾ふた文。讀上げませうと極つけられ。「何んの否と申しませう。如何さま此場の  
拷問は。御無用に遊ばすが。宜しからふと後退り。お梶は牛三の前に手をつき。「雲時の間此女  
を。私しにも預け下さらば。細を許して義理にて搦め。様子白状させませうと。願へば牛三打  
うなづき。「執權山三に連添ふ汝。よもや言葉に違ひもあるまい。如何にも女を預けて呉りやう  
若し取逃さば其身の落度。其御念には及ばぬ事と。云ひつゝお梶は銀杏の前の繩を手早に取捨  
てい。先々是へと乗物の。内に忍ばせ坐に直り。「今參りの女は居やるか。それ最前の一と腰を  
あなたのお目にかけてたが宜いと。指圖に遠山心得て。坐敷に在合ふ刀掛け。恭々しげに件の脇  
差。かけて麻生の目通りへ。持つて出れば不審げに。「お梶さま。此一と腰はなんでムる。「さア  
それは貴女へ賣りたいと。其取次を私しへ頼み。「成程これから武家づきあい。女ながらも一と  
腰は。身の嗜みに持たねばあるまい。どれ／＼見せてと麻生は立寄り。何心なく拔放す。牛三

も共に差よつて。見れば覺えの文珠四郎。確かにそれと驚ろく二人。お梶は偕て麻生の顔。打  
熟視りて莞爾と笑ひ。「何んどどうやら。斬れそうな。鐵味でがなムりませう。「あい。ひいやり  
と肝を透す様な。名作ものでムりますと。苦笑ひして居たりけり。



詠染逢山鹿子第貳編終

詠染逢山鹿子第參編序

京から下つた万作が、見臺ひかへて一晚に、三十五  
 丁の落し話も、今では一話が五晩續後に道具をか  
 ざりつけ、前に燭臺の仕かけをまうけ、音曲に絶妙  
 役者の身振をよくうつせば、宛芝居を見るが如し、  
 繪冊子も、又如此、鼠の嫁入、舌きり雀、僅五枚か十枚  
 でなんと子どもども衆がつてんか、今の浮世はお  
 どな衆にも、合點のゆかぬチンパン、長物語が  
 流行なれど、それは上手のうへのと、予如き下手作  
 者は、皇國學の音曲も、漢學の聲色も、ちつとも聞か



ねば、根本の素讀、長谷川ならぬ歌川へ、あつらへた  
畫の道具だて、それをたのみに是で三晩目、いよく  
明後日は大切六角の館まで申あげます、相かはら  
ず、御來駕の程も願ひあげます、さてト扇をとりあ  
ぐるが、物がたりの發語なるべし、

天保壬辰春

柳亭種彦

詠染逢山鹿子第參編

柳亭種彦

麻生は雲時思案を廻らし、「お梶さま此刀を。私に買ふて呉れといふのは。そりや何者。」はい私  
しが侍女で。遣ふ女子でムります。「あの女子。はてなアそんなら。此麻生に。逢はせては下  
さるまいか。」夫は何よりお安い御用。こりや新參の侍女參れ。アレ麻生さまが。逢ふてやらふ  
と御仰る程に。粗忽のないやうお側へゆきや。苟ならぬ大事のお客。な「あの合點でムんすと  
怯めず臆せずつかく」と。立寄る遠山むろく」と。麻生は見やりて眉に皺よせ。「はて媚妍な生  
れつき。願ひの通り此刀は。おれが求めて取らせうと。云ひつゝひらりと抜き打ち。斬つて掛  
るを遠山は。ちやつと飛びのき身構へし。「こりや何んとなされます。」はて干將莫邪が劔でも。  
斬れぬ時には菜刀全前。此の斬味を試した上と。又打掛るを機轉の遠山。側に在合ふ刀掛け。  
手早に取つて受止むれば。「チ、殊勝らしい支へ立て。處を斯うと隙間もあらせず。引つぱづし  
て斬込むを。お梶はずんと立上り。麻生を隔て、利腕捉へ。突廻されて腹立聲。「これ名古屋氏  
の御内室。イヤ山三どの、おかもむさま。何んでお前は那の女子を。」庇ひます御不審は。は



て申さずとも知れたこと。刀を賣りたひ其者を。試して買はうと云ふ時は。廣い世界に刀打つ鍛冶も絶ゆれば研者もない。科なき妾が腰元を。お手打になさろうとは。ちと御粗忽かと存じます。成程これは私しの過まり。コレ手を下げて詫ます。イヤ代兵衛どの。最前私しの乗物へ。矢を射かけたる女めを。早く是へと麻生の指圖。沼淵代兵衛心得て。畏まつたと乗物より銀杏の前を引出せば。刀提げ立寄る麻生。お梶はひらりと襦袢の裾を拂つて又押隔て。害膳さまのお客にも。お似合なさらぬ重ね。仍ない麻生さま。まアくお下にムりまし。いや。滅多に下には居ますまい。科ない者を殺すのは。私が粗忽と云ひやつたゆゑ。大罪人の此女を成敗して切味を。オホ……夫れが矢ツぱり貴老の御粗忽。大罪とは主を失ひ。親を殺し火を放つ。重悪人を申す言葉。お乗物へ射かけしは。親孝行の爲めの外れ矢。それのお身には聊かの。疵もつかぬに下手人を取るは温和の沙汰ならず。まだ其上に私しが。預かりませう預けたと。牛三さまのお言葉を。聞いて居ながら引出し。手打にするかはそりや我儘。身不肖なれども六角の。お家を預り國政を。取捌く名古屋の屋敷。良人の留守に其様な。無成敗はなりませぬと。手に持つ刀もぎ取られ。流石の麻生も言句もいせず。牛三は何か打首肯き。「なんのでも立たぬ事。もう宜いわく」と。云つゝ庭に下り立つて。「身が家來岩浪雲八。次ぎに居るか早や參れと。よばれて雲八走り出で。急のお召何んぞ御用が。「オ、用といふは外でもない。

先達而も云う通り。奥の出入りを許されねば。某し未だ銀杏の前に。一度も逢ふた事はない。我れくも八と云つた時。銀杏の前の面躰を。覺え居ること幸ひなれ。最前途中で搦めた女。お梶が庇ふ様子といひ。確に彼こそ銀杏の前。面引上げて能く見よと。差圖を雲八まき終り。「茨木屋の角口で。ちらりと一目見た計り。先程の噪ぎには。迂つかり致して居りましたが。ま一度能く見ましたら。夫なら夫れと知れませうと。立寄る處ろを隙さぬお梶。件んの刀振上げて。水も堪らず雲八が。首打落せば是れはと計り驚く人々。牛三は怒りの聲震はして。すつと詰り寄り。「名古屋が屋敷で無成敗は。ならぬと云つた其舌の。乾かぬ内に身が家來。何んで斬つた手にかけたと。云へどもお梶は襦袢の。衣紋直して噪ぎもやらず。「最前も申す通り。國政預る山三が妻。妾へ不義を云いかけし。人非人の岩波雲八。親孝行のそれやから。比べて見れば大罪人。成敗致すは國の掟。すりや家來雲八が。和女へ不義を云ひかけた。その證據はと急き立つ牛三。お梶は先の文取出し。「御覽遊ばせさまある。戀る身よりといやらしい。到底もの事に代兵衛さま。中を開いて讀みませうと。云はれて代兵衛仰天し。「ナットく讀むに及ばぬ。夫は雲八が不義云ひかけた。夫さくお前へ附け文。此代兵衛が證據人。扱て憎い奴。すつぱりと手にかけられたは。牛三さまにもお任せ。主人の名まで出る處ろ。只今彼是御仰ると。お爲にならぬと身を焦燥り。押しめられて乙月牛三。少し怒りの顔色直し。「様子はとても



分らねど。夫程まで代兵衛が。示ふには何んぞ仔細があらう。夫は差をき肝心の。用事を何かに取紛れ。まだお梶には云ひ聞けぬ。當六角の家の重寶。淺祿の寶劍と。又つひ繪旨の二た品を。此牛三に持參せよと。室町御所より今朝嚴命。其實劍は山三の預り。とくく渡せ取受らふと。急ぎ立つほど尙ほお梶は落つき。刀の血を押拭ひ。鞘に納めて床に直し。末座に下つて手を支へ。「仰せの通り寶劍は。良人山三の預りなれば。成程お渡し申しませう。併し此所は血汐の汚れ。先々奥へ御座を移され。「ウ、然らばあれで受取らふ。まだ穿議ある女ばら。逃さぬやうに氣をつけやれ。麻生どの。代兵衛お梶も一緒に來やれと。袴の塵を打拂ひ。先に立つたる乙月牛三。「先々入らせられましと。お梶はことく後につき。皆打連れて入りにけり。」銀杏の前と遠山は。後に残つて手に手を取り。「お懐しうムりました。「さいなア。私しも和女の顔見ると。話したい事問いた事。何を云ふにも四邊に人目。」夫は私も同じ事。音信さま御最期の。様子を文に認めて。頼助を使ひとして。あなたのお所へ上げましたが。定めて御覽遊ばして「さア夫故に仇の麻生を。只一と矢にと思ひの外。女の手腕射損じて。此の憂き恥を見るわいのう。まだ其上に當家の寶劍。あの淺祿の短刀を。牛三に渡す其時は。どんな巧みをしやうも知れぬ。其れを素直に受合ふた。お梶の心の内までが。合點が行かぬと銀杏の前。打泣き給へば遠山は。背撫でさすりて太息をつき。「さう云ふ事なら寶劍を。何うぞ此方へ盗みだしと。見返

る奥の襖を開き。小雪は立出て手を支へ。「思ひがけなき姫君さま。此端近に附添ひ申す。者も見えぬはどうし譯。先々奥へと進むれば。遠山ふつと心づき。「お前は最前奥の間で。ちよつとお目にかかりました。山三さまのお娘御。まア丁度よひ所へ。あれ姫君があつた様に。只お一個で端近く。お泣かつてゐるのは。ついで口では云はれぬほど。御身に迫つた大事の御難義。その御難義を救ふには。牛三さまへ母君が。お渡しなさる寶劍が。あなたのお手に無ければならぬ。何うでお前の才覚で。銀杏さまへ上げるやう。計らふて下さんせと。頼めば小雪はをとなしく。「母さまや父さまの。大事に遊ばす姫君さま。其御難義になる事なら。此身は些つとも厭ひませぬ。其實劍は三寶に。載せて奥に出してあつた。つい取つて來て上げませうと。云ひつゝ立つて入りければ。遠山は胸撫で下ろし。「まア一と方はこれでよひとても事に奥へ陥んこみ。無二無三に一と太刀なりと。仇麻生と云ひかけて。人や聞かんと四邊へ氣くばり。銀杏の前も帯しめ上げ。「お梶が最前雲八を。手にかけてた刀も其儘。床へ置いて行きやつたは。那的で仇を打てといふ。「ほんに夫に二た腰まで。此に有つたは天の與へ。案内は先つき見て置いた。切戸口より奥庭へ。忍び込んで銀杏さま。「女の力は孱弱くとも。命を捨て働かば。一本望どげ置くべきか。「コレと四邊を窺ひ。名々一と腰手はさみて。下り立つ庭口二階の障子。がらりと開けて思ひもかけぬ。麻生は手に持つ種が鳥。筒先向けてにこく顔。いやさう甘くは



行くまいか。何んの小癪こしやくな双向こむぎひ立て。姐さん達あねさんたちに相應あはれな。飯事いひごとでもして遊あそんで居ゐや。びくしやくすると繋つなぎに打うつと。云はれて二人只ただ足あしうろ／＼。お梶かぢは料紙りょうし硯いんを提たへ。庭にわの切戸きりどを押開おしひらき。「二人りどもに早はやまるな。大望たいぼうのある麻生あしよさま。心に油斷あぶらつたがあらうと思おもふか。「チ、それ／＼お梶かぢさまの御仰おつしやる通り。なんと望のぞみのある此婆このばや。五六百年ごはくねん生なきた上うへ。命いのちに倦うきたら打うたれてやらふ。それお梶かぢさま。今の通り二人りの小兒こどもに。云ふて聞きかせて下くださりましと。頼たのめば料紙りょうし硯いんの差置さしき。「麻生あしよさまの御仰おつしやるには。生先なまきりのある若わかものを。無慙むざん々々ごご殺ころすも不便ふびんなれば。乃公のうこうを仇あだと狙ねらふまい。打うつまいといふ誓願せいがんを書かいて。渡わたしたら助たすけてやらうと。お情なさけ深ふかい御仰おつしやり方かたさア／＼早はやくと勸すすめても。二人は頭打かぶりうち振りて。「どうして夫おつとが口惜くちやくしい。「否いななら直ただぐに火蓋ひたぎを切きるか。「さアそれは。「さア／＼と切端せつぱづめ。お梶かぢは目めませで仕方しかたを知らせ。「死しんで花實はなぶたが咲さくではなし。悪わるい事ことは申しはせぬ。よ。御合ごが點てんか／＼と。云はれて詮方せんかた投げ首くびも。二人が誓願せいがん書き終おひれば。お梶かぢはとつて。「麻生あしよさま是こゝれで宜よろしうムりますか。「チ、よいとも宜よろいとも今宵こんじよから。高枕たかまくらして此足このあしを。延のばして樂々らくらく寝ねられうと。思おもへばどうやらかつだるい。コレ二人りの娘達むすめたち。もう怖い事ことはない。さア此處こゝへ來きて此足このあしを。些ちつと捻ひねつて下くだされぬか。顔かほ膨ふらしても目に角かどを。立たて／＼も此處こゝに起誓せいせん文ぶん。神かみの御罰おつちがは畏おそろしいと。嘲弄てうりやうされて二人りは耐たらず。寄よらんとするを隔へたつるお梶かぢ。「今犬死いまいぬじをなされるより。時節ときせつを待つてなア申し。「頼たのむはお梶かぢそなた計けいり

まづお入りなされましと。遠山とほやま諸もろろ共とも三人さんにんは。一と間の内うちへと入りけり。「引ひッ違ちがへ出て來きる代兵衛たいていゑ。四邊あたり窺のぞひ小聲こゝろになり。「麻生あしよさま。様子やうすは那あれ的てきにて承うける。何か拙者しやくしやに密事ひそごとの御用ごよう。「チ、用もちと云ふはと懷ふるより。寶劍ほうけんを取とり出し。「邪魔じやまにするわのお梶かぢ。罪つみに落おさん計けい畧りやくの。折ひに幸さいひ山三さんざんが娘むすめ。小雪こゆきの持もつて居ゐた寶劍ほうけん。だくしかけて捲ま上げたれと。迂うか／＼乃公のうこうが持もつては居ゐられぬ。何處どこかへ隠かくして貰もらひたい。序しよで是こゝも預よけたと。二人りの誓紙せいしを投なげ渡わたし。麻生あしよも次つぎへ立たつて行く。心得こころえ顔かほに代兵衛たいていゑは。誓紙せいしを取とつて懷ふ中ちゆうし。迂路うぢう々々ごご見廻みまわし獨ひとりり言こと。「扱あつて寶劍ほうけんの隠かくし處ところ。鴨居かみいの上うへも古腐ふるし。石いしの下したへは力ちからが及およばず。チ、幸さいひの此花活このはないけ。いや／＼是こゝも穿議せんぎの手詰てづめ。云はずば斯かうと花活はないけ振ふり上げ。丁々ていはつしと打据うちへると。水みづが溢あれる寶劍ほうけんが。中ちゆうから落おちるも能よくある奴やつ。イヤ其そのれで思おもひ出でした。究ひつ竟けいなはあの手水鉢てすいひち。よし手を洗あふ人が來きても。龍りゆうの頭かぶをひねる計けいり。中ちゆうに氣きの付つく者ものはない。奇妙きせう々々ごご蓋取ふたつて。寶劍ほうけん中ちゆうへ押おし。素知すぢらぬ顔かほに入いりけり。暫しばらくあつて奥おくの方かた。人音物音ひとおとものおとさわがしく。お梶かぢを誘いひ乙月牛三おつぎうしざん。疊たぐひ蹴ふ立て出いで來きり。「コレ寶劍ほうけんの空箱かまぼこを。身みに突つけて嘲弄てうりやうするか。どつ／＼と出いせ受取うけらふと。苦くるり切きつて云いひければ。お梶かぢは小首打こくびうち傾かたむけ。「中ちゆう改かめて置おいたる寶劍ほうけん。紛失まぎしたとは心得こころえぬ。「いや心得こころえぬで濟すまさうか。今見いまよ前まへで受取うけつて。紐ひもをほどけば中は空から。ヤア代兵衛たいていゑは何處いどこに居ゐる。それ最前さいぜんの女めを。急いそいで是こゝへと呼よべれば。「畏おそまつたと代兵衛たいていゑが。右みぎと左ひだりに銀杏いんげんの前まへ。遠山とほやま二人ふたりを引ひッ